

383
ä
CN2



始



後序
後序
村松
折立
即記
即記

眠札
子
子

支那
片
記

折立
即
記

後藤朝太郎著

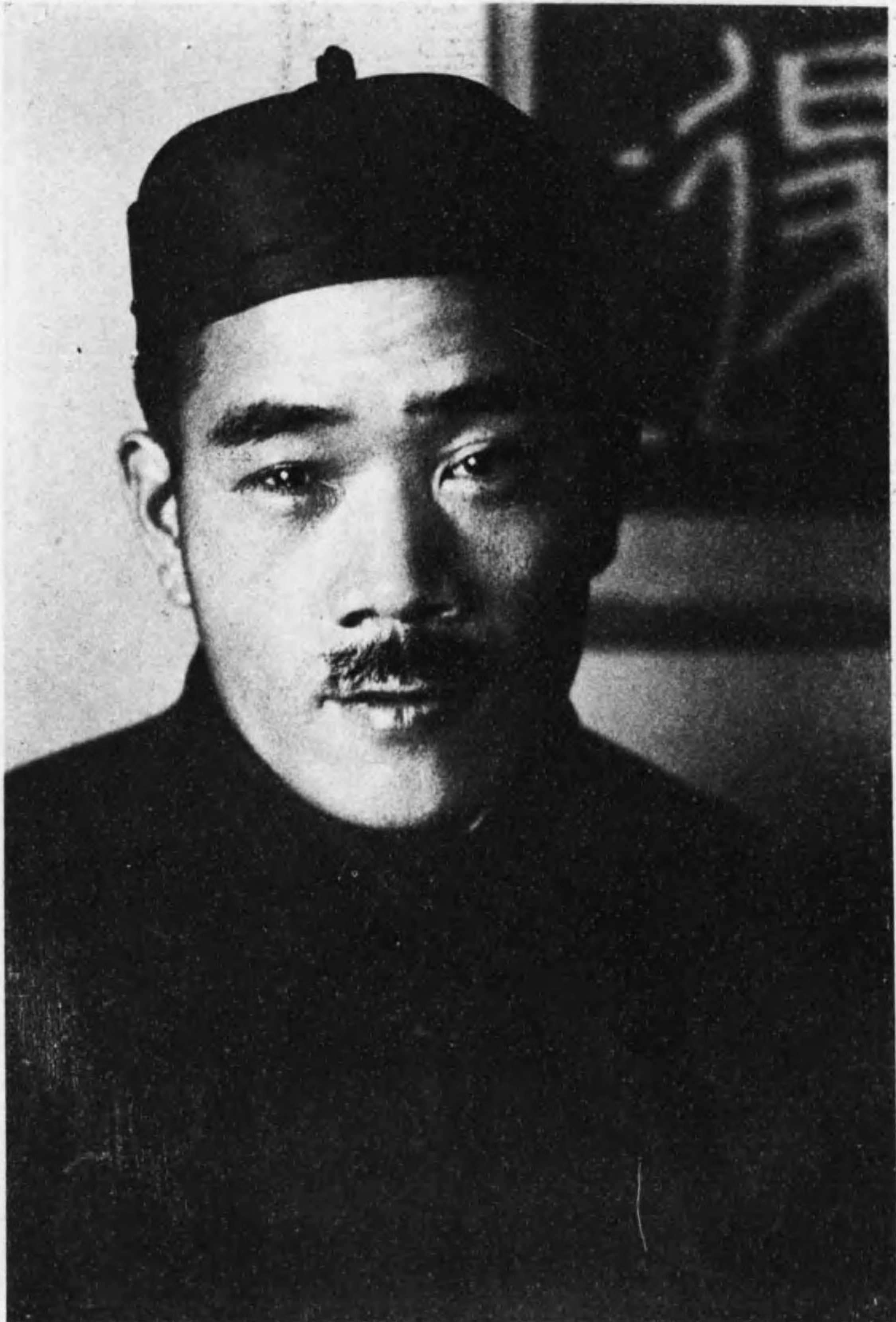
支那風俗の話

383
CV2

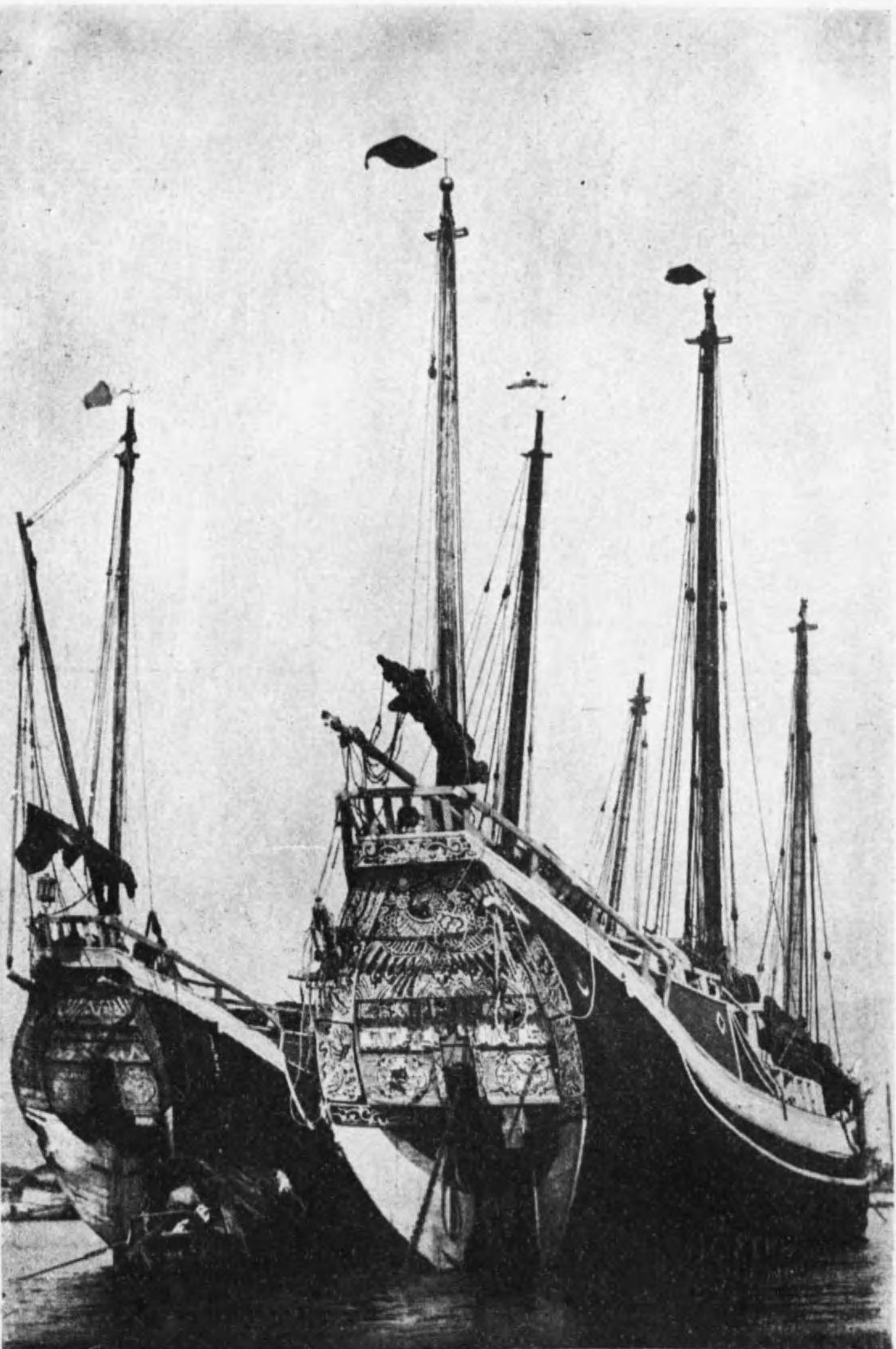


支那の近影
著者近影

1765

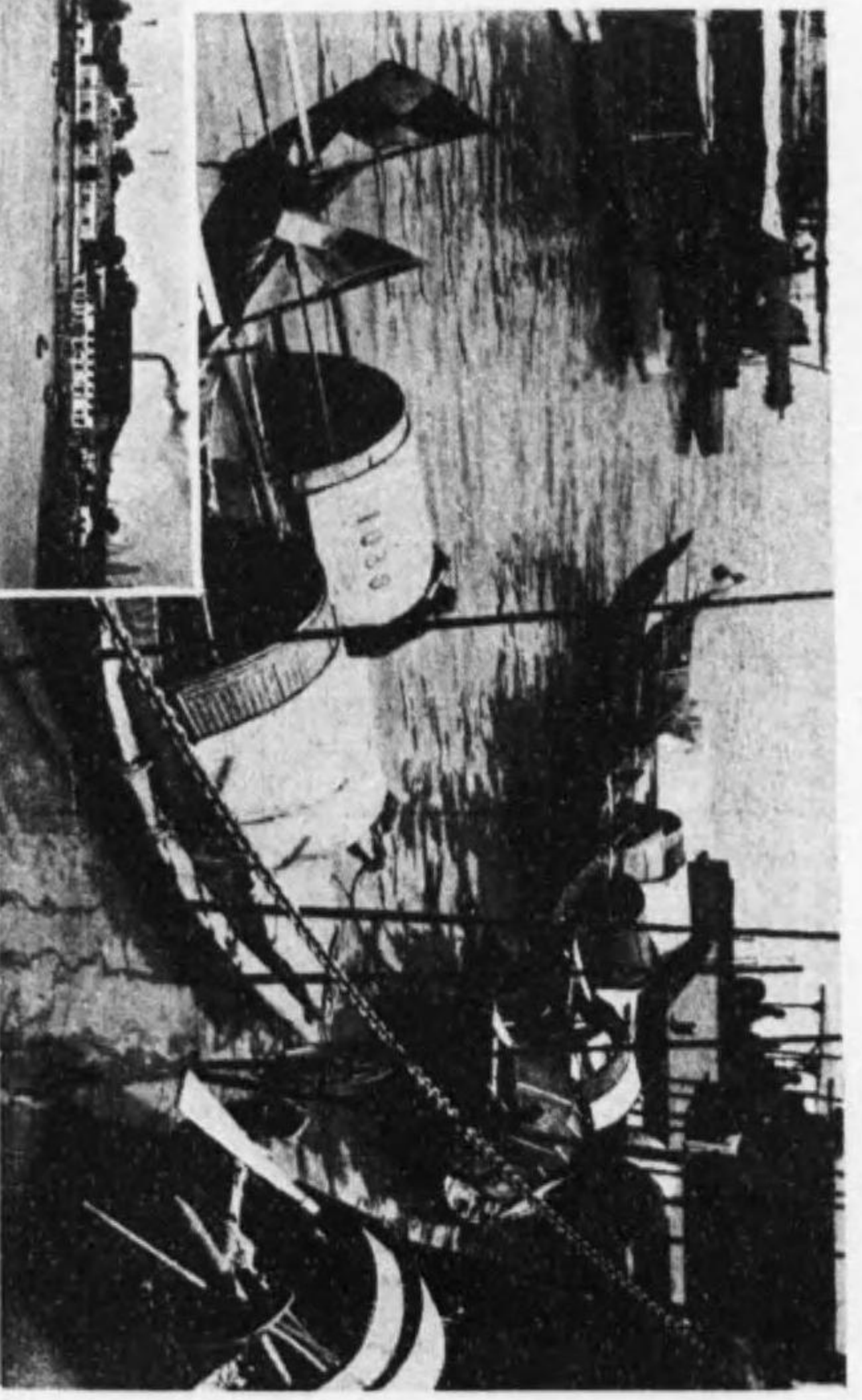
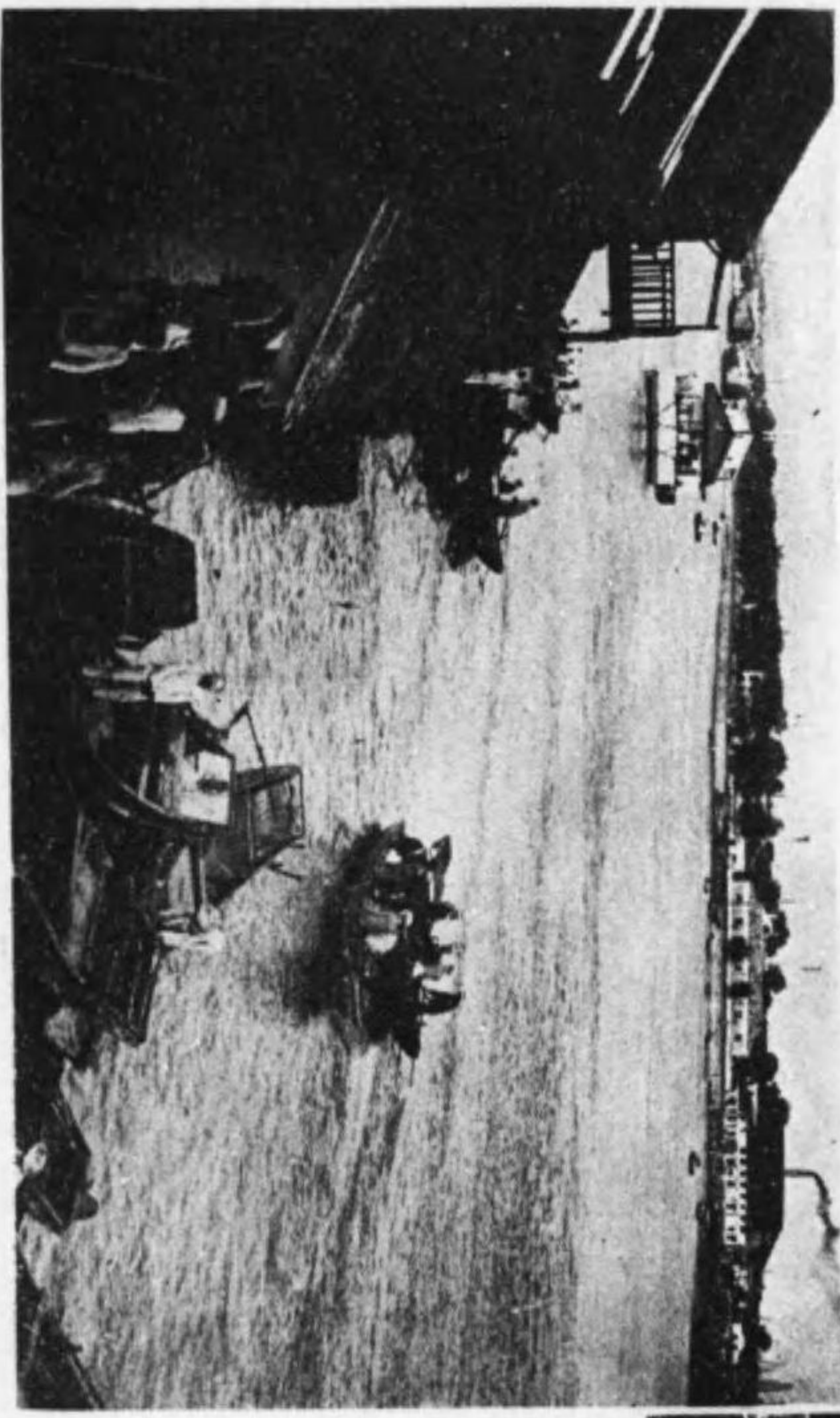


民國人になり澄ました著者の近影。愛讀者諸子と親しみの顔つなぎに自像を掲ぐ。但し髭の左右兩端を下
方に垂らしてゐない處に日人の俤を留むと支那の友人は語る。呵々。



福建省福州閩江に麗姿を現はせる華やかなる山東船。支那沿岸を航行するシーボートの中最も藝術的の裝飾と圖案意匠を凝らされ五彩の色榮ゆ。橋上の黄金の珠光は遠く山東大連あたりを照らし大連港外にも時々このフラワー・ボートの雄姿を望むことがある。

長江の濁流、流れ速き所に設けられた船着きのハルカ日英佛その他のハルカ相並ぶ。圖は日清汽船のハルカに小船ホッツの集まれるところを示す。



上海は水上生活を營める特殊の支那住民の多きこと廣東、福州、漢陽に次ぐ。圖は上海ガルナン・グリークの下、黃浦から蘇州河附近に居る戎克船ホッツの一例を示したものである。

湖北省漢口郊外楊樹の
陸に見る農家の情趣。
河南の田舎と異なりそ
の景色の著しく潤澤に
富めるを注意すべきで
ある。



河南省ロウヤン洛陽城
外田舎の情趣。雄健沈
重なる唐刻獅子像の下
に集まる驢馬の群、愛
するに足る。

北京城内を蒙古路へ朝早く
旅立ちする駱駝隊の一部。
その倒影を水に映せるとこ
ろ繪の如き感がある。



北支那を支那式の方法で旅行す
るときは此の風流なる馬車に依
る。車にばれなく文字通りのガ
タ馬車である。



民國小商人どもの露店にさる食事
一度が十錢以内にて十分の美味を
取ることが出来てゐたが昨今や、
物價が舊の如くでなくなつた。



北京路傍に見る元背担、屋臺をかつぎ
來たり暖かい食べものをひきぎ歩くも
のである。



支邦町城内に見るめくらの蛇三線弾き。
或は門前に又は流してあるきそのうち呼
び込む客のあればユワンツ院子に入りて
需めに應じ一二曲を弾するのである。



北京天壇の手前なる天橋路の民衆娛樂場
に於ける飲食店、都下の労働者一日の勞
を忘れてこゝに民衆芝居音曲何でもござ
れの遊山をなす所である。



北京城内の街頭にてよく出くはす鉄、庖
丁の磨き屋。細長き喇叭を吹きつゝ仕事
をとつて歩くのである。

在留日本人の最も多い上海北
四川路方面の街路の光景



上海租界は目抜き南京路即ち
大馬路の一角、殷盛を極むる華
商英商は多きも日商は極めて少
ないのである。



上海静安寺方面に遊ぶものはよ
く訪れてゐた愚園の喫茶室。今
は之を公開しなくなつたらしい

江南の農村秋の取り入れに用ふ
る唐箕その他の農具の一斑、農
夫や船頭はこの地方青染の袴を
穿つもの多し。



長江江邊農家の附近に、春の野
に戯むる水牛の群れと牧童



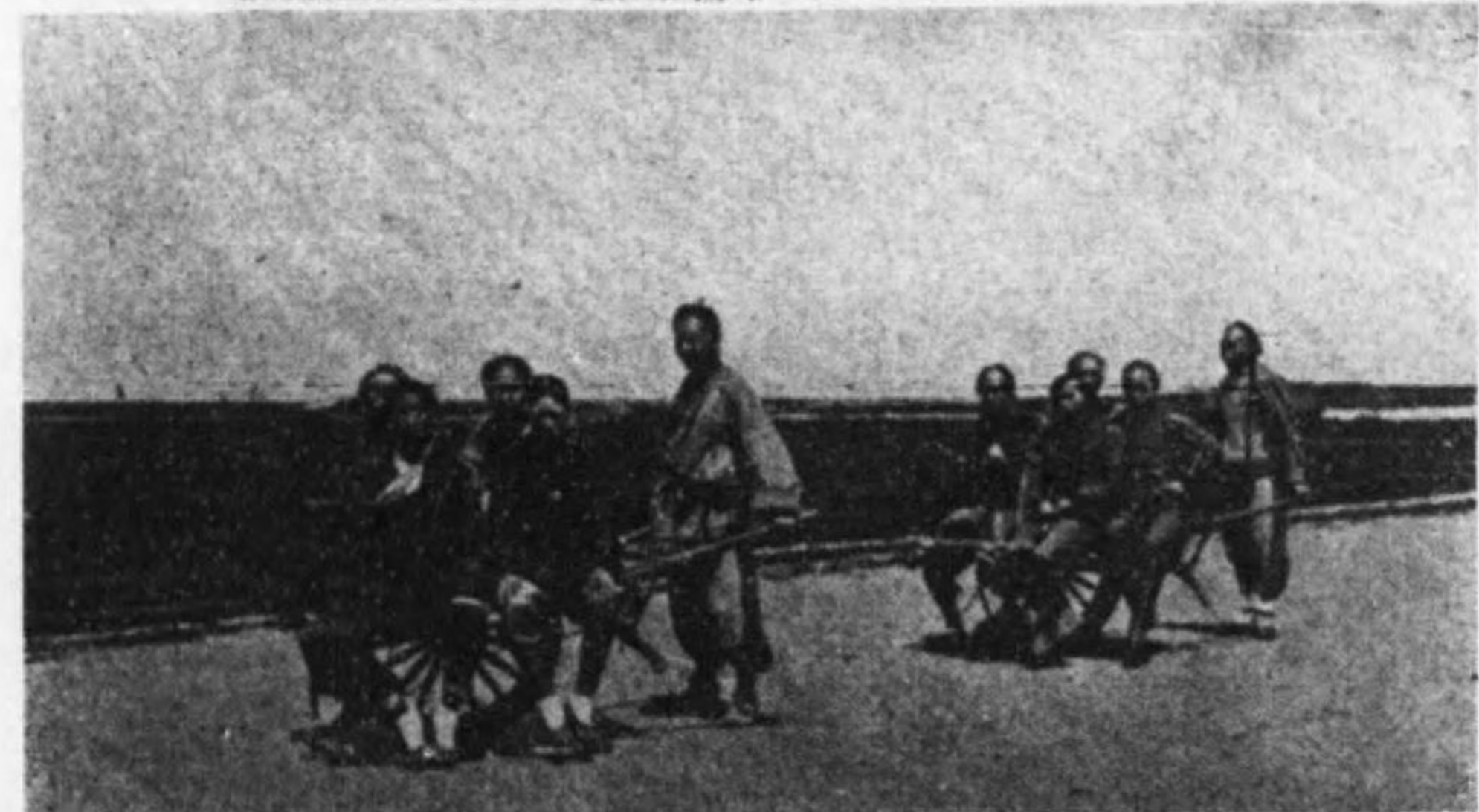
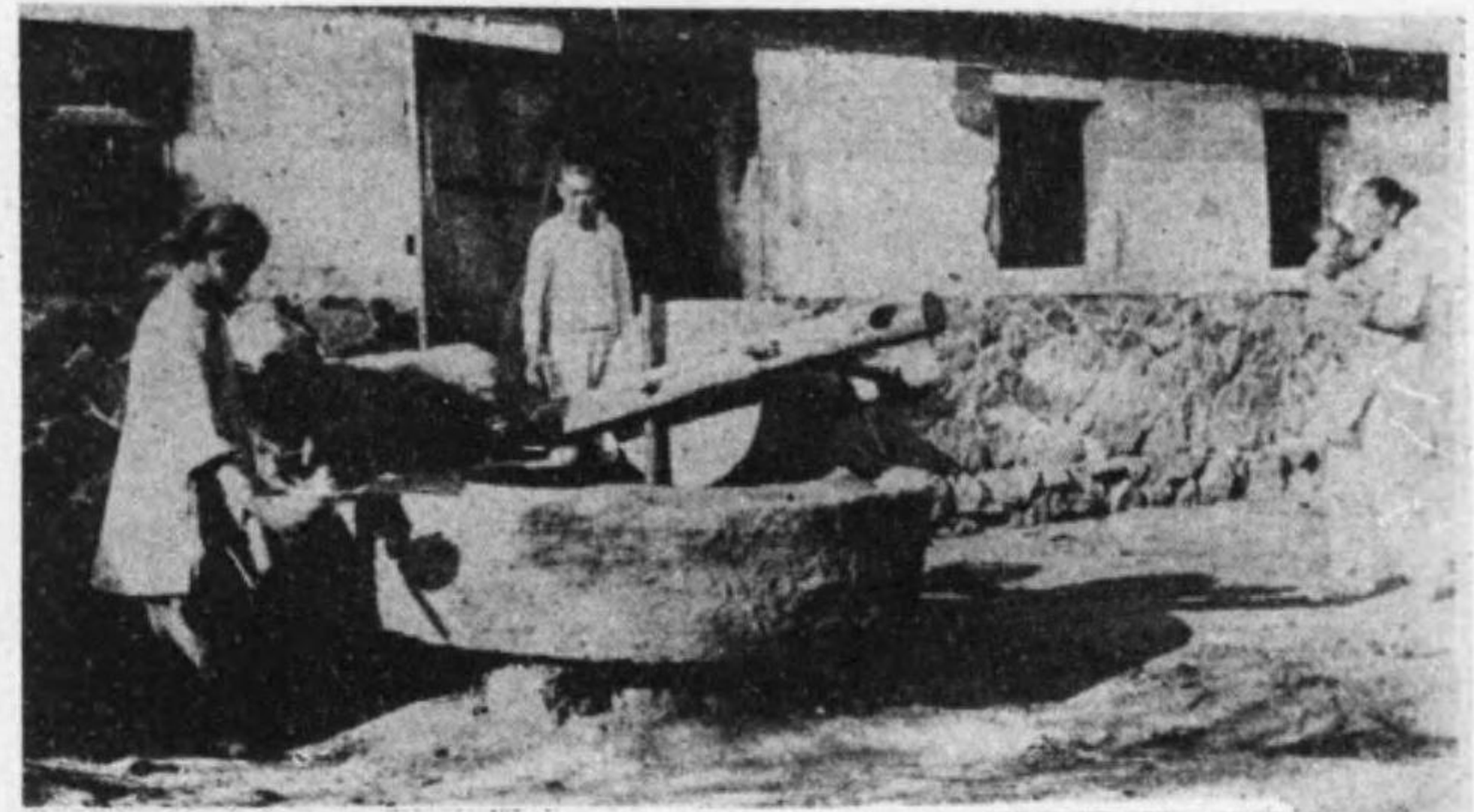
江南地方田家種子蒔きの景趣

蒙古王の正装、大体支那文化の影響を受くること深刻なる丈その服装にも圖の如く寛衣自若たる所がある。併し思想的には近來勞農ロシアの色彩を帯ぶること甚だし。



北京の旗婦と稱せらるゝ滿州旗人の夫人の姿。その婉麗なる頭飾と兩頬の臙膩とは漢人貴婦人に見る能はざる特色となすものである。

山東地方その他南支那の田舎に見る農家庭先きの石臼、普通驢馬に挽かせるのである。



長江江邊に見る大平野のうちな曳きあるく一輪車、推車の光景。荷物又は人間を圖の如く乗せて引く。

支那城内材木商の門前に見る木挽の仕振り。鋸切りの挽き方は日本と反対にからの重みは日。押出すやうな向ふへ挽出すので、手前に引くのではない。



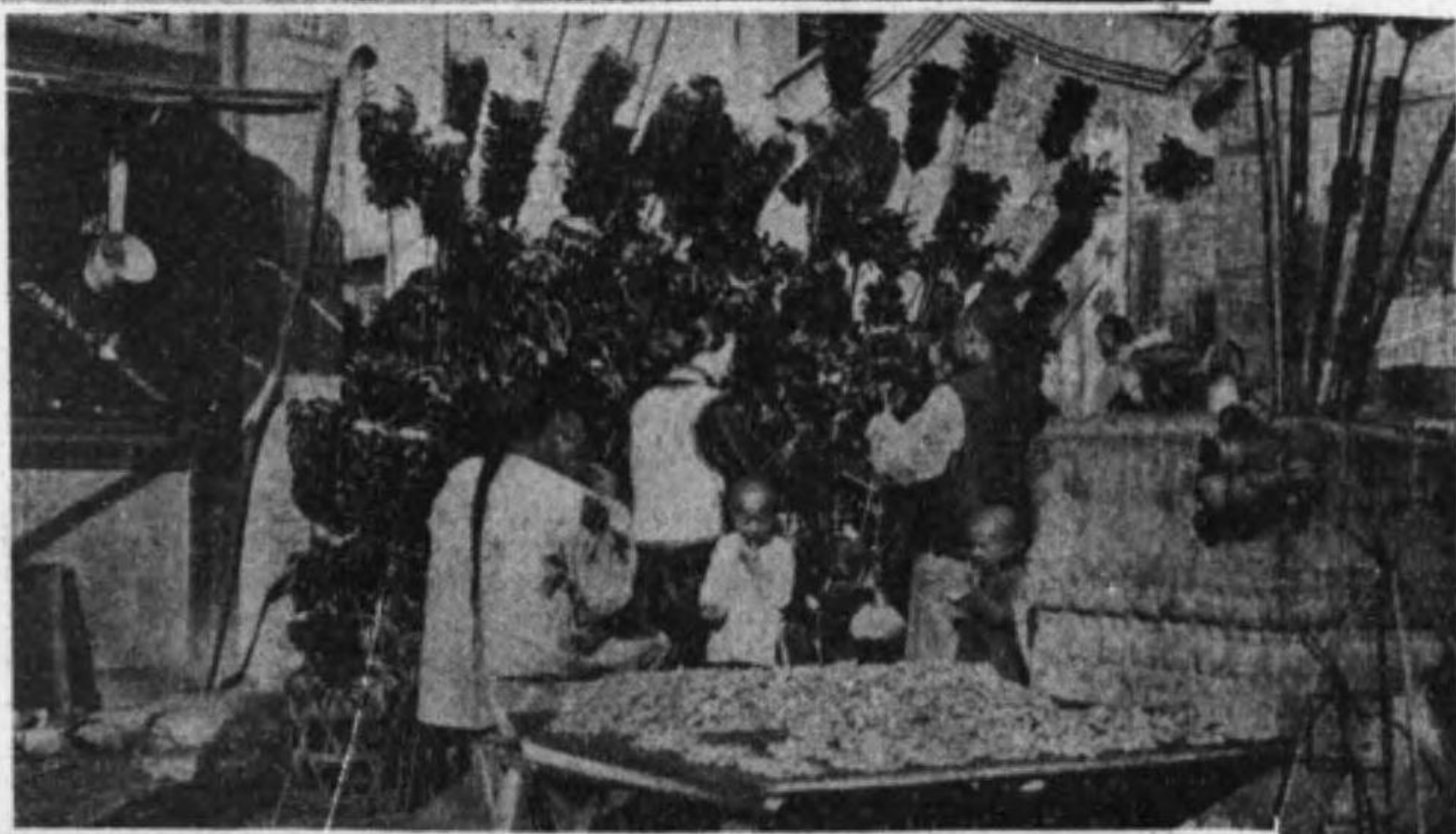
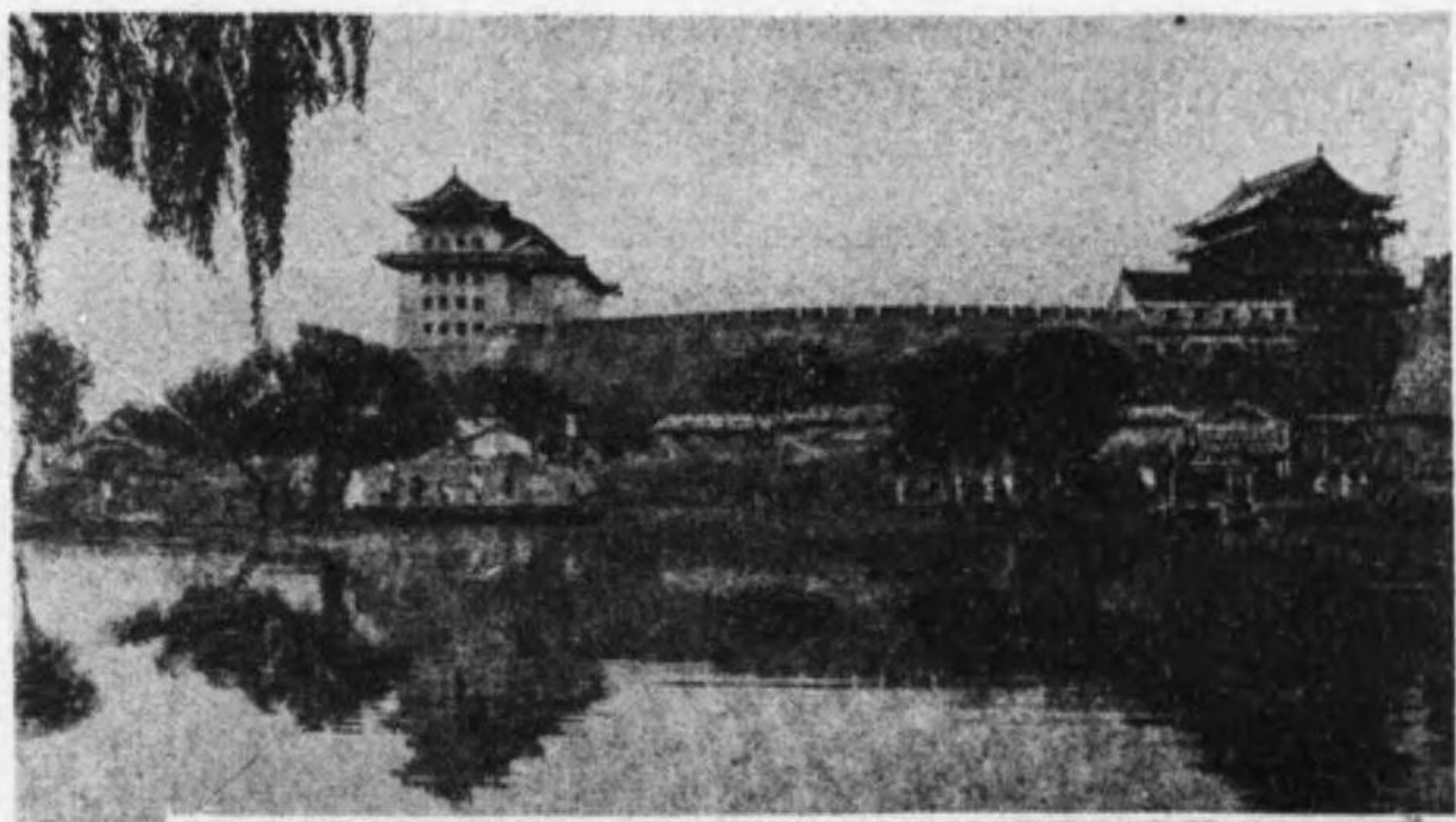


孔子廟大成殿の柱楹として支那四百餘州に最もよく聞こえたる山東省曲阜文廟境内の一部、その大理石柱瑞龍の彫刻に注意せられたい。



北京城内に見る出殯即ち葬式行列の光景その函簿に緑衣の傭人ども數多加はる。

北京城壁哈達門外の水郷とその光景。



北京ロンフウス隆福寺の白市露店に見るはたきの店と飴屋の商ひ振り。



湖北省武昌城内は張之洞パウピンドン抱氷堂の涼亭。武漢の大平野を展望するときの氣持ちは悪くない。

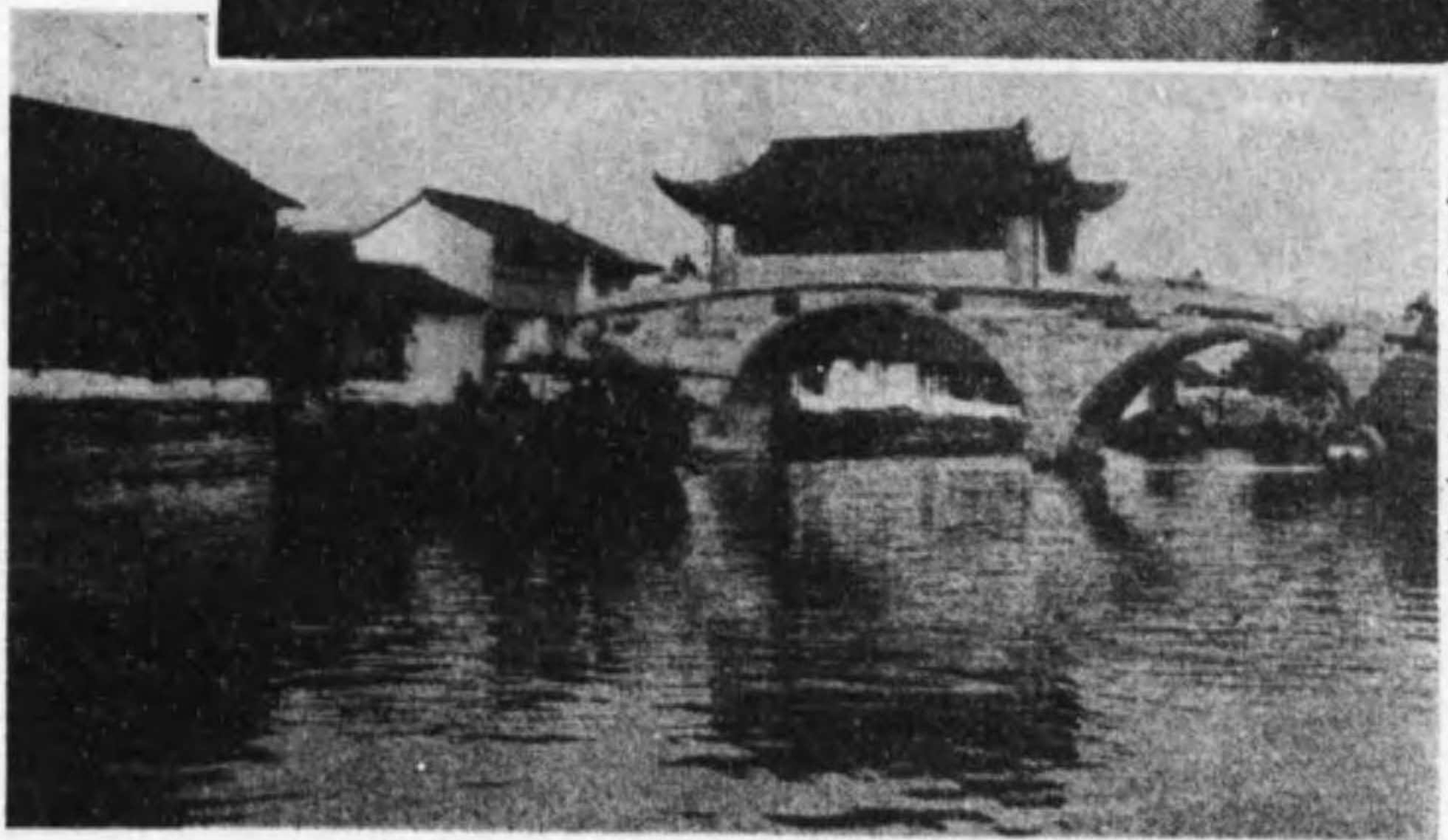
浙江省餘姚の水郷に見たる農村の水揚げ龍骨と水牛の情趣



浙江省水郷運河に見る屋橋、眼鏡橋にして橋上飛橋を有する涼亭を有す。夏の夕陽扇を手にして此に集まる子女多し。



江蘇省松江の田舎に見る運河着船きの光景



序

支那民族の思想人情のことから支那社會の習慣といつた文化方面のことを知らうとするには先づ手近い所の支那風俗の實際を見るのが何より興味深く感じ又最も判り易い方法である。日本では支那の戦争にした所で兎角日本式に力瘤の這入つた戦争のやうに考へたり又支那の軍隊といへば日本流の軍隊のやうに想像してゐる。従つて同じく軍人の精神などといつても支那の方のはとても想像もつかない位要領を得たものであるのだがその邊が殆んど日本には判つてゐない。

支那のやうな國なればこそあれ丈の動亂續きの情態がいくら續いても破産はしない。まだ今後もいつ迄續くことやら判らぬ。孫中山先生は革命未だ成功せずと云ひ残してゐるが事實民國の動亂は革命成功の道程に在るのだと宜しい。けれども今日の民國は幾度か折角の憲法を破棄してしまつて安定の中心となるべき大事

な礎を失つてゐる形である。支那四億萬の國民がその安定の中心たるべき礎のこゝを衷心考へてくれてゐるものが幾人あるか。いつ迄経つても何等その安定策の建て直しの時期の來さうにもない。恐らくこゝ五十年や八十年は當分このごつた返しの練習で暮れてしまふものらしくも見える。先づ氣長く吞氣に見てゐなくてはなるまいと思ふ。

然かし支那各省の良民たちには自分は深く同情をしてゐる。民國の美名の下にあれどもいつもかうして此の動亂の下敷きとなり塗炭の苦しみに惱んでゐる有様を實地に行つて見れば見るほど氣の毒に堪へぬ。日本の方でも亦その甚深の影響を被らずにはゐない。こゝは獨り南京事件や漢口事件の爲めばかりでなく、東亞大局の平和な生活の前途にどれ位陰影が投せられ脅威を感じてゐることか判らぬ。けれども吾人は徒らに前途を悲觀してゐるものではない。むしろかくの如き大きな渦亂を湧き起こしてゐる支那民族の心理に溯りいかにして東亞にこの時勢が生

み出されたかを討究し萬民は今日その日常生活のうちに如何なる慰安を求めてゐるのであるか。又さすが大國だけに殆んど時局とは沒交渉無關係に認めらるゝ南北各地方の都鄙の年中行事から冠婚喪祭の如きその他一般風俗の内容をまで實際について踏査攷究して見るといふことは頗る意義のあることであり又興味深きことでもあるのである。

自分は年來ひまある毎にといふよりは寧ろ専門的に年に數回宛渡支各地の風俗人情をしらべその材料を蒐集することに努めてゐるのであるが實は大正震災の直前一度支那風俗に關する一書を大阪屋號書店より出版したこともあつたが公刊しやすく後全部焼失の厄にかゝり遺憾そのまゝになつてゐたのである。最近自分は四川から廣東並びに武漢地方の新しい思想の流れをも見て來て多少支那國民性の研究上に得る處もあり、日頃の視察調査せるところのものをも加へ取纏めこゝに之を公にするに至つたのである。尙支那風俗の研究者は附記列擧せる拙著各種を

参照せられるならば一層本書の支那及び支那人の研究に就き足りない點を補ひ且つ又色々の手懸かりを得ることもあるかと考ふる次第である。

昭和二年六月廣東歸東

東京小石川小日向臺の小廬にて

後藤朝太郎しるす

支那風俗の話目次

- 一 支那宿の印象……………一
- 一 支那宿の情味
- 二 支那宿で知り合ひとなつた雅客
- 二 支那内地の風俗一斑……………一八
- 三 護衛兵を連れての内地旅行
- 四 家庭内部の光景
- 五 寺僧の心事
- 六 兒女の賣買
- 七 子供を借財の擔保となすこと

目次

八 巡警と兵隊

九 原始生活

十 兵隊の心事

十一 動物の愛

十二 牧童

十三 支那文學の特色

十四 人情の極致

十五 漢文は方便のみ

十六 日本の勢力

三 江南に見る清明時節の情緒……………五九

十七 江南各地の山寺行脚

十八 清明の時節雨紛紛の景趣

十九 墓前に慟哭せるふたりの美人を見て

二十 支那江南和平氣分の體驗

四 武漢三鎮赤ネクタイの童子軍……………八〇

五 支那内地の汽車に乗りて……………八七

二十一 支那汽車に對する常識

二十二 山西省の太原に行く汽車

六 北支那の田舎の情趣……………一〇一

二十三 山西の田家に見る耕讀第の篇額

二十四 太原に於ける閻錫山の風韻

その一 山西の山の色

その二 紡績の話

その三 山西富豪の郷土

目次

その四 山西の人口の増減傾向

二十五 山西省汾水濁流のほこり

二十六 日暮れて路遠く暗夜又汾水を渉る

二十七 人煙遠き山西の幽境山寺朝靄の情趣

七 支那地方文化の情味……………二九

二十八 地方文化の情味

二十九 各省慣習の尊重を度外視すべからず

三十 朝野名流の巡遊を促す

三十一 地方官憲民情の重大視

三十二 赤化思想を同化せんとする支那文化

三十三 宣傳の娛樂氣分

三十四 各地の漫遊

八 支那人の風流心……………二八

三十五 小動物器物に對する趣味嗜好

三十六 詩文に對する風韻

三十七 地理を歌ひて

三十八 社會を歌ひて

九 支那人の樂天生活……………一九

三十九 教育上より見たる支那人

四十 清貧に安んじて邊幅を飾らない。

四十一 佳句を並べて自ら慰むるの風懷あり

四十二 斷頭臺上泰然自若たる態度を失はぬ

十 支那民族生活の推移……………二七

目次

四十三 人間は一生のうち花の上海へといふモットーを

四十四 支那側に改善を望む點の數々

四十五 大英國はよい學問をした

四十六 日本の朝野には支那民族生活の

推移についての智識と用意ありや

十一 支那民族生活の表裏……………二三

四十七 支那民族性に現はれたる裏おもて

その一 褲子、敷物、卓掛け等に見る表裏の使分け

その二 建築住まひに見る表裏の使分け

その三 乗物に乗る乗客心理の表裏

その四 文物制度表裏の使分け

その五 阿片禁絶施行に就いての表裏の使分け

四十八 支那民族の體面論に同情す

その一 節婦孝女の門閭旌表

その二 文字美に現はれたる體面

その三 宣傳に終始せる社會生活

その四 租界回收の宣傳は面子論のみ

その五 四億萬の中國人士を以て如何となす

その六 租界より觀たる支那國民性の表裏

十二 北京趣味津津たる界限に出入して……………二六

四十九 支那趣味の特徴は文字から古玩に

五十 ルンフース隆福寺の白市に玩具あさり

五十一 北京紫禁城内に文華殿武英殿を訪ねて

十三 北京城外に漲る異國情緒……………二九

五十二 雙橋の無線電信を見る

五十三 通州古塔の影

五十四 道教の古寺紫清宮に詣で

十四 北京東城に鄧完白山人の後裔と翰墨談……………三二八

十五 北京貧民學校に觀る落花流水の遊戯……………三三三

五十五 異彩を放つ日人經營の學堂

五十六 かいがいしい學童の所作

十六 北京の大武術と手品……………三三九

五十七 北京の輕業師

五十八 北京蛇づかひの手品

五十九 上海壺ころがしの妙技

十七 支那上代の貨幣と裝飾用具……………三三九

六十 支那上古の經濟

六十一 支那では上古貝を貯へてゐたこと

六十二 古代に貝を貯へてゐた理由

その一 貝は賣ばれてゐたもの

その二 貝は貨幣として使用せられてゐた

六十三 貝が貨幣であつた證據

その一 賣買取引上の貝

その二 資産貴賤に關する貝

その三 贈與に關する貝

その四 税貢に關する貝

その五 罪をあがなふ場合の貝

六十四 上代に於ける貝の二大用途

十八 支那山寺の精進料理……………三六三

十九 支那茶館と菜館の情趣……………三六八

六十五 喝茶の光景

六十六 支那には路傍に茶の接待がある

六十七 支那料理の調味

六十八 支那の酒館と菜館

六十九 支那料理の發達

七十 亡國料理説について

二十 支那花子にかゝるなさけ……………三六九

二十一 支那の正月氣分……………三九三

七十一 正月氣分を象徴する春聯の佳句

七十二 正月新春の仕度と暮れの惡魔拂ひ

七十三 正月休みのマージャン麻雀

七十四 支那正月の好物ニエンカオ年糕の餅

七十五 上海あたりの正月氣分

二十二 支那の社會と家庭……………四〇五

七十六 趣味の家庭

七十七 家庭から見た支那の實相

七十八 都會地に見る支那家庭の婦人

七十九 室を守る家庭婦人のたしなみ

八十 田舎農家のかみさん

二十三 四川峽中江上阿片流しの妙技……………四三

目次

二十四	九尺の大男と二尺五寸の豆男……………	四七
二十五	湖南汨羅に見る粽子と屈原の傳説……………	四三
二十六	支那の迷信に見えた悪魔拂ひ……………	四六
二十七	支那の祭祀に見えた歡樂の情緒……………	四六
二十八	支那人の宗教思想……………	四五
八十一	宗教思想の研究に這入る前に	
その一	支那の社會方面の問題	
その二	政治の方面	
その三	經濟の方面	
その四	支那思想と兵亂の關係	
その五	支那社會の自治の精神	
その六	趣味の方面	

その七	地理歴史の方面	
八十二	支那人の常識に現はれた思想	
その一	常識の方面	
その二	悟道の問題	
その三	宣傳の氣分	
八十三	神に對する思想	
その一	神に對する氣持	
その二	偶像に現はさない場合	
その三	鬼神の崇り	
その四	寺廟の僧侶	
八十四	上天に對する常識	
八十五	自己に對する常識	
八十六	支那に於ける最も新らしい思想	

二十九 支那社會生活の觀方……………五〇一

八十七 山廓水村の郷土

八十八 社會の實相を觀るについて

三十 上海市中に漲る列國の氣分……………五〇七

八十九 英人の租界と城内支那町に對する考の相違

九十 南京路

九十一 上海に於ける英米水兵の舞踏振り

九十二 租界の問題

九十三 動亂中の支那城内散歩

支那風俗の話目次 をはり

一 支那宿の印象

支那を理解し支那情緒の深刻なところでも味はんとするものは議論はとにかく自分で進んでかの地に渡り支那宿を體驗して見るに越したことはない。固より支那の理解の仕方にも色々通りがあり、その爲めの支那旅行に出かくるにしても西洋式のホテルの止宿に鐵道の急行列車の上で要領を得たと云つて済ましてゐるものもあれば、又徹底的にどこ迄も支那生活の真相を掴む處まで行かなければやめぬと云ふ行きかたをするものもある。又同じく本ごとに自ら決心して支那宿に投ずるにしてもその十分に支那式の情緒に浸らんが爲めに宿をとるものもあれば折角その純支那宿に止まつて居りながら殆んど無頓着無關心で過ごして了ふと云ふやうな人もある。

こゝには支那宿なるものを通り一遍の視かたではなく多少とも之に興味を持ち之によつて支那を理解出来れば、支那情緒の一方面丈でも十分深く味つて見たいものだ云ふ考からして支那宿の内容を聊か研究的に攷察し又その止宿人の人情の方面にも及んで之を觀察して見たいと思ふのである。

日本から折角支那のローカルの實情を視察研究に出かると云ふ學生どもであつても愈その支那の本舞臺に乗込んでから宿はどうするだらう。支那宿でもとることかと思つて見てゐると案外にも努めて日本人の宿に取りきめたり洋式のホテルに投じたりなどしてゐる。誠に惜しいことである。こは恐らく一時の不便を忍ぶことを大層がりて努めて旅行の收穫を少なくしてゐるやうなものである。支那宿なるものは知らぬ不案内のところであつても少しも恐るゝことも怖がることも要らない。却つて支那宿に止まつたればこそ支那の社會狀態支那の國情、人情の真相がわかる一端ともなりその間自ら支那式的情緒も理解されて來ることになるのである。若しそれ支那宿が恐ろしいの穢いの、物騒なものと云つて辟易してゐるやうなものは支那を本當に研究するの勇氣と熱に缺けてゐるものであると斷じてもよろしいのである。實に今日支那を知

らうと云ふ目的には支那宿に身自ら止まつて見るより手掛りは得られないのであると云つても過言でないのである。

一 支那宿の情味

支那に遊んで支那宿の門前に轎子からおりる。支那宿はその入口からして文字を以つて大きく且つ派手やかに愛嬌を振りまいてゐる。その旅館名、旅社名は之を高く壁上に掲げてゐてそしてそのそばに

その一 仕官行臺(大官連御最眞の御定宿)

その二 學生歡迎(最近學生の擡頭を裏書きするもの)

などがあるものを長江筋その他に見出すのである。そればかりでなく元來が宿屋は客商賣であるところからして行人逆旅の孤客をして反らせない丈に巧みな美辭を弄してその筆蹟も鮮やかな聯句を掲げ人目を楽しましてゐるのである。實に時としては宿にとまらないでその句を味つてゐる丈でも結構支那の香が解せられるやうな氣もちがするのである。

その一 他郷故國同千里

芳草奇花總一春。

その二 幽齋特下高人榻

古道頻來長者車。

その三 煙外暮鐘催倦馬

林間殘照促婦人。

などと巧言令色以つて旅人の心を門前に既に柔らむることに努めてゐる。實に至れりつくせりである。その行人の心を吸ひ付けようとしてゐる心もちは獨りこの宿の方面ばかりではなく何れの方面の事にも現はれてゐるのであるが宿屋の對子は特に巧みに出來てゐて決して人後に落ちてはゐないやうに思はれるのである。

かうした文字は門前の聯に見るばかりでなく門内に入つて中庭、院子に這入つて見ても尙同種の佳句瑞句がいくつとなく掲げられてゐるのを見る。これが支那宿に對する文學的情味の第一印象として誰れ人の腦裏にも肝銘させられるのである。

同じく支那宿と云つても色々之にはその等級があり又その都會地と田舎とによつて少なからぬ差等がつけられるのである。北京に見る北京飯店や六國飯店は純洋式のホテルであるからして問題外としその次の中央飯店とか大陸飯店とかの如きホテルであると半ば西洋式を加味した所謂中西旅館に出來てゐる爲めどちらかと云へば本當の支那氣分と云ふものは味はれない。杭州西湖の新新旅館なども純洋式であり聚英旅館が中西式なるも北京の此の邊のものと先づ大同小異であるのである。外人を相手に經營しようとする風に出來てゐるものであるから、兎角かやうに中西式に傾いて來るのも致方がないのである。本當の支那式情味のある宿と云へば何としましてもかゝる合ひの子宿から離れて純支那町にある處の本當の支那宿に就いて之を十分體驗して見なくてはならぬのである。その點から行くと田舎に這入つて田舎の素樸な支那宿に投ずると云ふ場合が一番興味が深いのである。

その田舎宿に行けば勿論萬事不便の多いこと、勝手の判らないこと、便所や浴室の思はしくないこと、戸締りのないこと、朝めしの遅いこと、麻雀の爲めに一睡も出來ないことを覺悟すべきこと、夏は臭蟲(南京蟲)に見舞はれること、ランプ又はカンテラで我慢させられること、

數へ來たればいくらでも列べられるが要するにかうした物質上の設備の不完全の點に物足りなく思ふことがどつさりあるのである。

しかしながら又半面から云ふと支那宿くらの風流で面白いことはない。又精神的に氣樂なところはないのである。本當に苦になることは少しもないのである。さればこそその間に支那宿の情味なるものが十二分に味はれるのである。例へて見ると次のやうなことが味はれる。

第一 支那宿に止まると月夜楊柳の蔭に胡弓の雅曲の聞かれる機会が多いのである。これは田舎に入れば大抵さう云つた情味に浸ることが出来るのである。

第二 言葉さへ出來れば主人、番頭と土地の風物を語りあひ、食事の話、酒の話、その地方でとれる巨口細鱗の話にその地方の年中行事の話から傳説史話、ロマンス、婚禮談、何でもござれであるのである。

第三 相宿の止まり合せた客と刺を通じあひ互に心のうちを語り合ふ時の情味と云つたら又格別のものである。もし孤客をきめ込みひとり客房に居るときは、古人も云つてゐる如

くい

一盞孤燈寒夜客

數聲短笛杏花村

などと云ふやうな氣持ちであるであらうが他に客を得て老酒を卓に用意し共に獻酬萬古の愁を消すときには一種云ふべからざる歡興を覺えるのである。即ち

勸君更盡一杯酒

與爾同消萬古愁

と少しく大きく形容して見ると、かやうな情緒に浸ることも出来るのである。これはしかし或種の日本人の如く支那内地旅行に出かくるにいつもピストルを鞆に入れて行かなければ安心が出來ぬと云つたやうな疑心暗鬼に襲はれてゐる人には望みがたい話であるのである。それ程まで田舎の支那人を疑はなければならぬ氣のする人は田舎に這入らない方がよいのである。江南の支那宿で同宿した田舎の農夫どもについて見てもその人情美に富んでゐることと云つたらとても想像の外であるのである。

その四 支那宿は上に云つた様に物質的の設備は十分でないが食事のこと丈は至れりつくせ

支那宿の印象

りである。料理に酒、點心の類は何等不自由なく而かもその間に種々の情味ある材料を聞きとることが出来る。その宿料の廉なる又驚くの外ないのである。

かやうな譯であるから決して支那宿は恐れたり氣嫌ひをしたりする必要はなくどこ迄も心から情味を以つて之を研究して見るべきものである。

支那宿一般を通じて若し支那の田舎の人情を洞察して見ようと云ふ場合にはこの田舎宿くらゐよい場面はないのである。その最も赤裸々なそして又最も正直な自然のまゝの人情と云ふものがこゝで看破せらるゝのである。漢口だの武昌漢陽、九江、南京と云つたやうな大きな城都はいつも動亂の爲めに掻き亂され又人心も悪化してゐると云ふほどでなくともかなり磨れ枯らしてゐるのである。ところが純田舎の支那宿と來たら淨化せられた支那民衆見たやうなもので實に純樸そのもののやうなものである。無論そこには纏足もあれば辮子もやつてゐる。かねの筆の萬年筆と云つたやうなものは自分の持参せるので始めて見ると云つた手合ひなのである。この頃漸く日本から行く日水（魔法瓶）と云ふものを使つてゐる。湯のさめなくて經濟と云ふところから比較的ハイカラのものは之を珍らしげに求めてゐると云つたやうな程度に在るので

ある。それも二圓どまりの日水でなくては賣れてゐないと云つた状態である。かやうな有様ではあるがしかし支那の田舎の人情が、その堯舜禹の時代の太古そのまゝの生活振りであると云ふやうに見てしまふわけにも行かぬ。けれども少なくとも支那宿に集まる所の水村山廓の土民どもはいかにも情味に富んでゐてその傳説神話の上の人物のやうなものがどつさりゐること丈はこゝに紹介しておく値打ちがあると信するのである。

二 支那宿で知合ひとなつた雅客

支那宿のうちでも所謂客棧と稱するものがあり又は單に棧と稱するものがある。例へば

鴻昇客棧 振泰客棧 悅來棧

と云ふやうなのは東亞旅社とか迎賓旅館、紹興旅館、越新旅館など云ふのと似たものであつてあまり變つてはゐないのである。名稱の上の相違はさまで問題にするには及ばないのである。それよりも支那宿は支那の南北によつて著しくその設備の上にながひがあることを注意せんければならぬのである。

原則としては支那宿は旅人自身が洗面器から夜具枕すべてを携帯することになつてゐるのであるが特に北方の田舎に行けばこれが多い。驢馬の背に一臺どつさり持つて行かなければ旅行の出来ないところもある。南方でも地方によつてはさう云つたところがある。

一體支那は旅館の發達が幼稚なところであつて、大都會を除けば實に低級なところが普通である。唯なきに優ると云つた程度のものであると云ふのは古來あまり立派な大官連などは支那宿に止まると云ふことをしなかつた。それよりも豪族名家のところに滞在するやうにしてゐたものであるから宿そのものは進歩しなかつたのである。従つて日本の宿のやうに細かい處まで設備に注意すると云ふやうなことなどは殆んどなく、ともすればどちらが客か番頭か判らぬことさへあつて、随分呑氣であり又随分滑稽に亘ることなども演ずるのである。

又北方の田舎の宿は大體に於いて布團の用意のないのが普通で僅かに木枕と床がある位のものである。蚊帳から毛布から何から何まで持込むべきものとなつてゐる。中には床が板張りではなく高粱の莖の列べてある丈のうちもある。勿論その上には菰蔭ぐらゐるものは敷かれてあるのであるが兎も角ひどいものである。これはよい華客が宿屋なるものを古來利用してゐなかつ

た爲めである。従つて普通の旅客は宿屋客棧と云ふ所はひどいもの犬の遠吠や鶏鳴の曉を告げるのを聞き釋旅の感に堪へぬところであると云ふやうなことをのみ云つてゐて、それで當り前となしてゐたのである。それに又日本などのやうに温泉宿なるものは支那には大變少ない。北京のタンシャン湯山とか福州の南臺にあるやうなのは珍らしい位である。

南方支那のうちでは江南地方一帯の客棧は設備が北方よりはよく出来てゐて客室に寢臺の設けがあり之に年中木綿かかなきんの蚊帳が吊してある。冬期の蚊帳は空氣がこもつて暖くてよろしい。日本宿の天井の高いがらんとした室に寝かされるに比べたらたしかに氣持がよろしい。しかし江南の宿のそなへつけの布團は誠に薄い。嚴寒の候でも掻い卷の如き煎餅布團の一、二枚が用意せられてあるだけである。

支那人の客は巧みに之をからだにくるみ巻いて休むのである。江南の宿には便所に出かくる代りに各室にそれぞれモードン馬桶と、ビエンフ便壺と云ふものが寢臺の蔭におかれてある。室外に出て行くの必要もなく冬の夜寒にはなまけものには有りがたいもので持つて來いものである。便壺は普通青磁焼見たやうな上品な勿體ない色で之にかなり大きな把手と口がついて

ゐるのである。

食事は各室に暖いうちに運ばれるのであるが之を又中庭の院子に持ち出してやつても一向差支ないのである。大勢の支那土民と共に卓をかこむ爲めには庭に持出してやる方が却つて興味が多くてよろしいのである。

先づ支那宿と云ふものごまり心地はかやうな設備から推測せられたい。これも山寺の大きな禪寺で例へば天童育王と云つたやうな堂々たるごころの客房にでも止まるごときは格別であるがさもなくば普通江南あたりの田舎の宿に投ずるときには如何にその設備がよいと云つて見たごころで先づ上述の程度のものがさまりである。シーツや空氣枕、毛布の一枚位は氣になるものは持参して行つた方がよいかも知れぬ。

さう云つたわけであるが實際に支那宿と云ふものは之を趣味的に又之を文學的に考へると云ふ心のゆとりを持たなかつたならばつまらない不平のたねとなるが普通である。悪い方の印象は残つても香ばしい思ひ出のたねとなるなどはあるまいと思ふ。これは正直に云へば必ずその通りであると信するのである。自分はかつて浙江は寧波の田舎曹娥江のほとり曹娥の支那宿越

新旅館と云ふにとまつたごころがある。同宿同室の相客と一夜刺を通じた。ごちらも旅先のごころではあり相手は寧波から自分は餘姚から來つたごころでとまつたごころであつた。が互に話題に富んでその晩はおそく更くるも知らなかつた程であつた。翌朝は兩方共に六時の定刻に出る輪船に乗つて東關、紹興、蕭山などを経て錢塘から杭州の城内へ歸る事に話を合せて宿の番頭にくれぐれも朝の六時の船にまに合ふやうにしてくれごころかたく約束をして眠りについたごころであつた。自分は兎も角その客は是非六時の船にと莫迦に力を入れて居たやうであつた。

ごころが翌朝に至り乗り遅れたごころである。と云ふのは自分は若しや乗りおくれでは困ると早目から大事をとつて食事もとらず出かけようとした。客は悠々食事をとり、終つて約束の時間に番頭に連れられ碼頭迄自分も一緒に出かけたごころであつた。時に六時を過ぐる確か十五分。船は埠頭に居ればごころ。

先生ごころで怒るまいごころか、烈火の如くになつてごころなり出した。曰く、

「けふ杭州に歸れないごころ來ては商賣上大打撃を被るわけなのだ」

「船は出てしまひ姿は見えぬ」

「一體わたしをどうしてくれる」

「こちらのお客もけさのに乗りおくれて大變お困りぢや」

「この始末をどうするつもりか」

と河岸で大聲叱呼するさわざに、曹娥の兵隊やら巡警、民船の船頭、子供たち早朝ではあつたが黒山の如くたかつて來た。宣傳大いに努めた甲斐ありて遂に兵隊巡警どもを證據人に立て、ひら謝りに謝つてゐる番頭をあたまたまから又叱りつけ、つらにくげにいふ。

「速く何分の事を云へ」

番頭、

「ではけふ十二時半に乗合ひの民船が出ますからそれで御勘辨を」

「それに願ふと丸一日おくれて杭州につかれることになるのですが」

と平身低頭の體であつた。

客はどこ迄も鋒をゆるめる氣色も見せず

「ではそれで勘辨する事はしてやるがわれわれ二人の今日の晝の食事に民船の船賃、船中の夜

具、枕の損料すべてお前さんの宿持ちの事を承知しろ」

番頭

「ハイ、ハイかしこまりました。萬事すみませんでした」

そこで再び自分共は越新旅館に歸り茶を喫しながら語る。客の云ふには

「昨夜以來閣下とは同宿、相識る間柄となりこれも何等かの宿縁でもあらう。然るに今朝の乗りおくれは全く番頭の不覺。勘辨してたまへ。その代りふたりの午後に乗入船の費用など一切お聞きの通り宿に償はしむることに話をきめたからそのお含みにて」云々

自分は番頭のむすこと前夜小學堂の教科書を教へてやつたりなどしたなじみの心もありそれ程腹立ちの氣分のしてゐたわけでもなかつたのであるが牛に牽かれて善光寺詣りをきめ込んでゐたのは少々罪であつた。そして午後の民船には八十餘人の吳越同舟の鮪詰の場面を演じつつ、身うごきもならぬ民船旅行の珍經驗を嘗めさせられた次第であつた。そしてともかくその客と行を共にし錢塘を渡り杭州城内に入り客とこゝに別れを告げたのであつた。一樹の蔭に共に雨やどりをしてさへ何とやら、まして宿から船までかうして印象深き經驗を共にすることに

なつたと云ふやうなことは減多にあることではないのである。

けれどもこれによつてどれ位支那宿の曹娥の宿の印象が強められたことであらう。その後また寧波行き時には自分はこの曹娥の町に上陸した時なつかしいこの宿に此の番頭を訪ねて行つたのであつた。

思ふにこれは支那宿でたつた一晚一緒になつた青年の商人であるが、その自己の権利を主張して相手の缺點をどこ迄も追求して許さない處の様子又その深刻さ加減と云ふものは誠にきびしくひどい。どこ迄も云ひ出した處は徹底的である。よくもあんなことまで云ひ出し得らるゝものと考へさせらるゝ位までやるのである。かう云つた副産物の獲物を得ることを考へて見るとその宿の設備がよいのわるいのと云ふは問題でなくなるのである。支那人士の國民性の一端がかういつた事例のうち何となく窺はるゝやうな氣持ちがして却つて興味深く之を感じたやうな次第である。支那宿に體驗する挿話は断片的とは云へやゝもすると、その間に貴重なるねうちのあるメンタルテストの資料を得ることがあるのである。かうして支那宿を觀察するとき支那宿そのものは輕々視出來ない。こゝにはむしろ八釜しい研究問題らしく見えてゐない場面

の間にかうした國民性の反面を窺ふ機會を得ることがあると云ふことを注意したのである。

二 支那内地の風俗一斑

三 護衛兵を連れての内地旅行

先年夏季楊子江岸から這入つてアンホイ(安徽省)の山間を歩いて居つた所が、九華山の南方の山道に當つて亭があつた。こは道路を挟んで飛檐が突出て居て、夏の棧嶺雄關の大光景を前に家根下に冷風を呼びつゝそれに腰を掛けてゐると大變涼しく心持の良いところである。其處に腰を掛けて婆さんに茶を汲んで貰つてゐた。連れて居る兵隊が十一名、それから案内者、通辯、大勢其處で一緒に菓子を食べたり茶を飲んだりして遊んで居る中に、足許に澤山雛子がやつて來た。見ると眞紅な雛子がゐる。紫の雛子がゐる。緑のがゐる。黄色いのがゐる。色々まじつ

て居つて大層美しい。これこそ生れてから見たことのない雛子で、斯んな立派な雛子が支那に居るのならどうかして之を日本に持つて歸りたい。一匹幾らといふか多分十錢位のものだらう。三匹三十錢なら呉れるだらうと思つて、一體こは綺麗な雛子に見えるが、賣るのか、賣らないのかと聞いて見た。所が、それはそんなに珍重されるものでない。日本でも出来るといふ。をかしいことを言ふなど思つた。譯を聞いてみるとインキに入れて染めてあるのであつた。そこらあたり向三軒兩隣に雛子がゐると、銘々の家に寝かす時に喧嘩が起つて仕方がない。それで赤と紫は自分の家のもの、青と黄色は隣のものだといふやうな譯で、何處までもその所屬を明かにしないと氣が済まない。能く支那の連中又臺灣の連中にもあることですが、互に卓子の上でピンポンをやつて遊んで居る場合に或る球が壊れることがある、度々壊れると、どちらの人の球が壊れたか分からなくなるものであるから斯ういふ申合せをする。銘々の球に一々名を書いて置く、さうして甲の人が乙の人の球を打壊した時には、甲の人が辨償をすることにして、互に打つ時分に名を書いたのを打つ。元來さういふことをしてはゲームといふものゝ興味も何もなくなるでせうが、さういふことを考へる。或は子供同志喧嘩をする。それが學生

同志であるといふと能く自分の腰掛を振上げて向の人の頭を打つことがある。さうすると向ふも手を出して、どうかして腰掛の脚の一本を折るといふ始末になる。すると段々喧嘩が激しくなつて、到頭仕舞にどういふことに結局納まるかと云ふと、其の最後の話合ひが面白い。例へば甲の者と乙の者との喧嘩と假定して、甲が乙の腰掛を壊したのに對して、之を持つて行つて直させると一圓二十錢くらゐ掛る。さうすると愈々の談判の時になつて、一圓二十錢こゝへ出せ、といふ、さうすると片方もまけて居らずいつか何處々々で天麩羅を奢つてやつたことがある、あの時におれの方が幾ら出したことがあるから、あれも今出せ何とか彼とか言つて、さういふものゝ總勘定をやりだす。そして財布の中の勘定がすつかり出來て仕舞ふと、始めて談判が納つて仕舞ふ。向ふの人に對して立腹でもして勘定を出さないで居るかといふと、それはしない。それと同時に帳消しにして仕舞ふのである。その喧嘩する場合には彼等の心は最も赤裸裸の所が現はれるので、さういふ場合の兩方の考へ方を見るといふことは餘程面白い。なほ又極端な話をして見ますと、自分が品物を此處に置いた、それを友達の或る者が來て窃んだといふことが初めは分らなくても終にはどうかして調べの結果分つて來る。それで今甲の人が取つ

たどしますと、其甲の人が包み切れなくなつて自白する曰く、其處に置いてあつたから取つたのだといふことを言ふ。その際に乙の人は取られて非常に怒つては居るのですけれども、其時に取つて居つた所の品物は字引であるとか衣服であるとか、靴であるとか或は硝子の文鎖見たやうな色々な物を取つて居る、それを皆其處に差出して仕舞へば、取られた方の人は品物が皆戻つたといふことを以て満足する。日本人であると品物が戻つて來ても、彼の人はあること人を知らぬ時にはやつた人間だといふことで心の中でいつまでも思ひ疑うて居るのですけれども、支那の人はそれはない。戻して仕舞へばもう自分は彼の人とは何にも利害關係が無くなつた譯で、向ふは青天白日の人だといふ風に考へるし、又取つた人も一方の取られて居つた人に對し何だか極りが悪いか顔を合すのが變だといふやうなことはないのです。至つて其處らには要領を得たもので、あゝいふ風になれるものなら我々でも非常に氣樂なものだと思はれる。が、是は人情が違ふのですからさういふ譯には行かないのである。

四 家庭内部の光景

更に中以下の家庭について御話をしてみると、向ふの人はなるだけ勞せずして効果の多くな
ることを非常に喜ぶ。殊に働かずに金の這入ることを最も能く好む。それであるから父親は親
戚の者又は近所の者と麻雀に耽つて一晩の中に非常な儲けをする。それから又一家族の中であ
つても、母親や、お婆さん、妹さんまでが一堂に集つて穴錢をかけて麻雀をして居る。大層賑
かであつて、愉快さうにやつて居ります。家庭に於ても亦親戚仲間にもさういふことはち
つとも憚る所なく、寧ろ獎勵する位に盛にやる。支那人の家庭に泊つて居ると夜分から朝方五
時半、六時半、場合に依ると晝から又晩までもズツト連日連夜続けさまにやつて居つて我々は
寝られないで困つたことが度々あつた。それ位に麻雀といふものに熱中するのでありますが、
それは大した勞力なくして面白く遊べて、おまけに儲かるといふことを豫想してやるのであり
ませう。其弊害の餘波であるかどうか知りませぬが又次のやうなことがある。一軒の家の母親
にして少し氣の利いた人が表を通るといふと、殊に洋服を着たやうな人でもそとを通るといふ
と、提籃を左の腕に掛けて門口に立ちます。それから又小さい籠を提げた娘が御母さんに連れ
られて門口に立つ。さうして何を言ふかと思ふと、

「旦那さん恵んで下さい」

といふことをいふ。是は泰山に御登りになつた方は、その一天門の近邊廻馬嶺、朝陽洞あの
邊まで民家の女が出て来るのを御覽になつたでせう。こはどの地方にもある。が北支那には殊
に盛であります。其籠の中に金を入れてやるとニコ／＼して居る、所が其恵んで下さいといふ
聲が聞えると、隣の娘が又出て来る、それにお母さんも出て来る、娘の籠に入れてやつて、お
母さんの方は恵まれてないと娘に向かつて母は「お前は良いことをした」と云つて獎勵するや
うな言葉を與へるから、子供の方も得意になつて居る。斯ういふやうな譯で、働かずに人の物
を貰ふといふことは大層良いことと考へて居るのでもなからうけれども、何だか一家の中を引
締めなければならぬ母親がさういふ心で居るといふことは我々日本人には大變をかしく感する
のであります。尤も中以上の家庭にはさういふことはないでございませう。中以下の家であつ
ても相當な住まひは有してゐる。中こそ汚ないけれども外觀は可なり立派に見えて居る、しか
し家の中でさういふことをするのを見ると我々は意外に感するのであります。

五 寺僧の心事

前に述ぶる如き物もらひの風習は寺の坊さんには著しくある。それは無論徳の高い高僧であればそんなことはありませぬでせうが、支那中部以北の寺には間々物貰ひを本職にする様な寺僧が大分居る。無論是は其寺の中でもつまらない下の方の坊主共がやることでありませう。けれども、兎に角寺の中に入るとすぐ手を無暗に出されるといふことはこちらで良い氣持はしない。少くも寺院の境内では誰しも日本人は多少信仰の心を持つて見て居るのに、乞食のやうな者が幾らでも出て來るといふと、甚だ殺風景に感ずる。最も外國人の見るものは門番であるが、向ふで所謂看門の徒には五十錢か、一塊錢もやらなければ門を明けて呉れない。それから第一の門で金を取られて明けて貰つて、第二の門で又とられて明けて貰ひ、第三の門になつても亦金を出さなければ明けて呉れない。愈々奥の院となつて又扉を開いてもらふのに金を要求する。禮拜のときには、線香を出して呉れたり、蠟燭を出して呉れたりして禮拜がすんでそこを出やうとすると、其時に心持丈けは置いてやつてあつてもあとから尙坊さんが來て何を言ふの

かと思ふと、今は酒錢であつたお點けになつた線香代を別に呉れ、それから又蠟燭代をも呉れといふ。それから又こちらに來て少し休んで居らつしやいといふから、休んで行く。其處に僅かばかりの金を置くといふと、お茶を幾包使つたから其御茶の代を別に呉れといふのである。序に申しますが、向ふの茶は日本のやうに葉を摘んで入れるのでなくして、大層珍重がつて居る。丁度醫者から我々が藥を貰ふと、一服、二服、三服と包みに入れてある、あゝいふ風にお茶が皆別々に小包みにしてある。相當に高いものだからそれを要求するといふことは無理からぬことであるが、休息代が幾ら、お茶が幾ら、扉を開いたのが幾らといふやうに、何も彼もこまかく刻んで取るのであります。丁度床屋に行くとき頭を刈るのが幾ら、頭を洗ふのが幾ら、耳を掃除したのが幾ら、鼻の孔を掃除したのが幾ら、極端に言へばシヤボンで何回頭を洗つたから幾らといふやうに言ふかも知れぬ。さういふことを刻んで要求して來るのでありますから、お寺の坊さんがさういふことをやつても特に驚くに足らぬのであります。日本の神社佛閣の參詣には殆んどさういふことはなく氣樂であるが、支那では御賽錢以外にさういふことが、かなり嵩んで來るのであります。

六 兒女の賣買

尙ほ支那の風俗人情を見る上に於て打算的の方面で最も面白いのは子供を賣ることであります。是は天津方面にもありますが、上海それからズツト奥に這入りまして湖南地方、四川地方それから廣東方面各地方に行はれて居ることであつて、臺灣の如き所でも最近まではありませんが、此節は官の力でそれをさせないことにしました。子供を賣ると申しますのは、彼地では子供といふものにはそれほど情けの心がないといふと語弊がありますが、子供を品物扱ひにして居るのです、愛情といふことよりも品物扱ひにして居るといふことが根柢に於て誤つて居るのではないかと思ひますが、其品物扱ひにして居る證據を擧げて見ますといふと、私がズツト奥の安徽の屯溪といふ所に泊つて居りました、其處に大金持の家に此間婚禮があつた、さうすると數ヶ月の中に又喜びがあるといふことで大勢人を招いた、前の時には七十何人とか招いたが又今度も七十何人而かも前と違つた人を招いて子供の飛び出したのを祝ふのであると盛に其家では芽出度いことが續いて結構なことだといふことを云ふ。其子供の出來たのはどういふ關

係になつて居つたのか。前のことは知りませぬけれども、向ふでは大變やかましいのですから變などはありませんと見て置く外考方はないのです。前にどういふ人の胤を宿してゐたかちつともそこは問はない。兎に角子供さへ出來れば御芽出度いといふので、有頂天になつて喜ぶと云ふ有様、其の子供が正式のものであらうが、どうだらうがさういふことは問題にしない。だから其の子供が出來ても愛情は無論あるに違ひないがそこは心持の問題になるから吾人の考を以て測ることは出來ませぬけれども、どうも一體に支那の人のやり口を考へて見ると、日本の人の考へて居る愛情とは少し違ひはしないかと思ふ。是は親孝行の點からでも證明が出来ることであつて、日本では子供が自分の本心から親に對して濟まぬといふことが言葉に現はれて、何かの場合に胸に耐へるといふこともありますが、支那では父母から親孝行を強ふるのであつて、子供の心の中に自然に湧き起るといふことは、ありもしませうけれども場合が少くありませんかと思ふ。大抵支那の修身の書物に書いてある親孝行といふことは、親の方から命令的に出ることである。さういふ譯であつて、子供に對する親の情けといふものは、どうも我々には是もまだ觀察が足らぬのか知りませぬが、甚だ遺憾な點が多いやうに感ぜられます。しかし賣

買に出されるものは多くは他所で夕暮れなどかきさらつて来たものらしくも考へられる。

七 子供を借財の擔保となすこと

そこで親が金に窮して了つた場合のことを考へて見ますといふと、子供を質に入れるとか又町に持つて行つて賣るとかいふことは今まで申述べた例から御考へ下されても大抵分るでせうが、直ぐ金に取換へる。其方法は、大抵籠に入れて天秤棒で擔いで行く、前に一つの籠をブラ下げ、後ろにも一つの籠をブラ下げ、生後六七ヶ月位のものであると七弗、先年臺灣の相場を聞きましたら三圓位だと言つて居りましたが、上海の方では大抵六七弗して居る、それがもう四五才になりますと、今度は大分高くなつて、十五弗とか二十弗とか、段々年を取るに従つて高く賣れる。普通賣り歩いて居るのは小さい乳呑子であります、賣れる日には町に出て四ツ辻を曲らない中に賣れて仕舞ふ。さうするともう一人まだあとに残つて居る。それを片一方が軽くなるから、それと同じ重さの石を入れて、後ろと前と平均した重さにして又賣つて歩く。其時に大抵右手の所に別に獨りで歩ける五才か六才くらゐの子供を連れて居る。それも賣物

で、大抵一日歩く中には皆賣れて仕舞ふ。さうすると賣つた方では其金を懐ろにして歸る。買つた方では又それに何年間か御飯を食べさせて大きくする。やがて十二三位になると相當な値段で賣れるのである。それを又買求め家の内の雑用をさせるに都合が好いから、餘り値切らずに買つて呉れる、買ふた方ではそれに食べさせるのが主ですけれども、其外に幾らか金を積立ててやるといふやうなことをもする。

試みにその子供に向つて「お前は能く稼ぐなア」と言ひますと、「ハイ稼いで一年に幾らく金を溜めます、私が二十三になる頃には金が五十弗位溜る」溜めてどうするのか」といふと、「其値段で買へる丈けの細君を買ふのだ」と言つて居ります。向ふでは細君は迎へるといふことを言はずに、買ふといふのです、それを十二三の子供が我々に向つて平氣で言つて居ります。だから賣られた子供は運命と思つて居るか、何と思つて居るか知らぬが、一向そんなことは當り前のやうに思つて居る。それが本統な我子であつたならば情けが掛つて居るから、賣るだのいふやうな冷めたいことは出来ないだらうと思ふのでありますが、段々調べて見るとさういふのは本統な我子も時と場合に依つてはありませうが、それよりも日暮横丁でカツ拂つて來

る。大抵支那では、殊に上海などの共同租界は大通りは上野御成街道の通りのやうな廣い通りもあります。横丁に参りますとズット道が狭くなる。其横にもう一つの横道がある、さういふ所は表道路の所から裏にズット抜けて居る、さういふ所では家の裏口が日暮頃どうかして開いて居る。家の子供は小便をするとかどうかいふことで其裏道の方に出て行く。そうすると其時に行人が「うまく上げませう」とか何とかいつてお菓子でもやつて、ヒョット籠に入れて持つて行つてしまふ。さうすれば分りはしない。だから日暮は子供を外に出さないといふとを民間人は申して居ります。

去る八月二十日前後のことでありましたが、上海の新聞に陳家の葬式の話が出てゐた。會葬者のそばで十八九の娘が頻りに泣いて居る。側の人「なぜお前さんは泣くのか」と聞いたところが、「今實は葬式の會葬者の中に私の郷里の人が来て居つた。久振りで會つて、其人に段々私の故郷の家の事を聞いた所が、今御母さんが斯々だといふ話をして呉れた。誠にどうも歸りたくて堪らなくなつて、其事を小さい聲で今主人公に話して見た所が、お前は内の子になつて居るのだから歸つてはならぬと云つて返しては呉れない。仕方がないから泣き悲しんで居るの

です」といふことで、誠に可哀相だといふことが新聞に出て居るのを見た。がさういふ具合で娘などが相當の年になつて、せめて一度は母親のところへ歸省し會つても見たいと言つても、新しい両親は之を許さぬといふことがあるらしいのであります。尤も新しい主人の方では相當な金を出して大きくふとらして居るのでありますから、今になつて家に返すと戻つて來ないかも知れぬから、返さないのも無理からぬことであります。が、人情がさういふ風になつ居る。此子供の賣買といふことはモウ一つ進めば奴隷賣買のことになるのですけれども、さういふことが平氣で行はれて居るといふことは、一面に於て子供がカツ拂はれるといふこと、關聯して絶えず行はれて居る。それは能く考へて見ると、支那はすべて戸籍といふものが無いことが主な原因を爲して居る。一家の戸籍といふものがない。役場にちつともさういふ風の出來て居ないといふこと、それから警察權の行はれて居ないこと、向ひ三軒兩隣であつても、ちつとも本統の家族全體のメンバーがお互に知られてゐない。能く自分は言つて居ました。

「どうも筋向ふの家には今まで見たことのない子供が此頃又殖えて居るやうだ、賣りに來たのを買ったのか、つまんで來たのか知らぬ」云々と。

さういふことが近所に聞えても、家の主人はちつとも耻かしいとも何とも思ふ譯でなく、子供こそよい犠牲で可哀相である。けれどさういふ點は極めて呑氣であつて、いつ取つて来たか分らない、又いつ盗まれたかも分らない。警察に言うて行つた所がそれで子供の戻つて来る試しは殆どない。それに付ては警察の裏面に大變面白い話が澤山ありますけれども、餘談になりますから措いて置きます。

子供の賣買といふことはさういふ風にさかに行はれて居る。之は早く止むと宜いのですけれども、いつ止むかさういふことは逆も見當が附かない。まだ當分の間繼續するに違ひない。支那の漢時代に行はれて居つた質屋に關する話が前漢書に見えて居りますが、是は父親が非常に金の要ることが持上ると心安い所で相當な纏つた金を借りて来る。當分の間其金の辨濟が出来ないといふ場合に家の子供を一人向ふにやつて置く、さうして仕事をさせる。一ケ年に假りに二百圓なら二百圓の金を稼ぐとすれば、十ケ年で二千圓を、段々と澤山の借財を子供の勞力に依つて濟し崩して行くといふことである。が、若し貸した方の主人が、お前の家の子供の勞力は幾らにも附かないから、ズツト安く見積るといふことになつたならば、其の子供は一生

涯其處で人質になつて仕舞ふといふ譯で、一生稼いでもまだ借金の方が多といふことならば、到頭其子供は其處で終つて仕舞はなければならぬ。人質の中の最もひどいのはさういふ風なことが行はれて居つた。近世になつてもさういふ習慣はあるやうでございます。最近に大分質屋の方を調べて見ましたが、子供の質は見ないと申して居た。けれども私は矢張りあるならうと思ひます。御承知の通り支那では質屋の白壁に當といふ字が大きく書いてある。三間も四間も、場合によると五間もあるやうな字がある。其下に小さい入口がある、其門を潜つて金を借りる、質屋はなか／＼發達して居りますが、半面に於て人間を品物扱ひにするといふことさへも行はれたといふことを御話するのであるが併し最近民國十六年六月十六日廣東に於ける國民黨省政治委員會では支那特有の制度たる幼年子女の賣買とその成長後の奴隸待遇を嚴禁するに決議しその規則を布くに至つたのである。

八 巡警と兵隊

尙ほ此打算のことで支那の人情を考へる場合に、我々旅行者として一番寂しく思ふことは、

支那人の或宿屋に泊つて居る時、夜中になつて何か出来事がありはしないかといふことの懸念心配のある事です。是も金がなければ心配のことは無論何もないのですが、我々として少し内地に入つて深い處を探つて見やうといふには途中でどうしても金が餘計要る。それを持つて寝る。苦力などは臍の下の所に袋のやうなものを附けて居て、それに金を入れて両手で抱き締めて、道路の側の高梁畑などで能く寝て居ります。能く私は夏は夜路を行くことがあります。石だと思つて上ると人間であるので驚いて飛退いたことがある。それは金を抱締めて寝て居る人間のからだであります。我々は旅先では是非共枕邊に置くか腰の方に置くか何處かに入れて眠らなければならぬ。尤も宿屋に泊ります時全然一人で泊ることもあるし、それから隣室に案内者又は兵隊を寝かすこともあります。査と一緒には寝たこともありますが、是も其の實泥棒であつて大變なことをやつたこともある。向ふでは巡警と云ひ、兵隊と云ひ、苦力と云ひ馬賊と云ひ唯名稱が違ふ丈けであつて、其實は皆同じものであります。泥棒に木綿の鼠色の軍隊服を着せれば兵隊になるといふ譯であります。若し斯ういふことを言ふと甚だ露骨過ぎますが、事實私の遭ひましたことで、安徽の安武

軍の下に附いて居た兵隊ともう一つは山東の濟南で雇つた巡警と、其兩方を混ぜた御話であります。兵隊であるからと云つて安心が出来ず、巡警だといつても安心が出来ぬ。或る晩のト八十弗入れてある巾着が亡くなつて仕舞つた。翌日も出なかつた。若しやと思つて、巡警のポケットを握つて見たら堅い物がある、是は何かといふときは金だ、昨晚庭に落ちて居たから拾つたのだといふ、それなら昨晚あの通り騒いでゐたのだから出せば宜いのだといふと、知らぬ顔をして居りました。是は天津生れで二十三になるとかいふ巡警で、私はちやんとスケツチしてあります。それですからいざといふときは馬賊と相棒にもならうし、泥棒と相棒にもならうし、又我々とも相棒になるといふ譯で、誰とでも相棒になるのですから、我々の眼からは苦力も、巡警も兵隊も同じやうにしか見えぬ。さういふ者は同じ部屋には入れませぬ。隣の部屋位に入れる。或は宿が二軒あるとすれば、向ふの方に泊める。けれども或部分の者は自分の部屋の内に泊るのであります。

田舎を旅行しまして支那の十里十一里、多い時は十二三里も歩きますと、勞れ過ぎて眠れない。カンテラを下に置くと石油が臭いから、窓框の外に置きます。それで夜半二時三時過

まで日記を書いて居ります。さうすると時々兵隊が覗きに来る、「もう寝ませぬか」というて来るから「今寝るけれども、今少し書くことがあるから」といふと「さうですか」と云つて側に寄つて来る「何を書いて居るか」といふから「さあ見なさい」と云つて、途中の地名とか毎日の珍らしかつたことなど書きつけてあるのをそのまゝ見せる。暫くして兵隊は室から出て行く。外のが又やつて来る。夜中に小便に起きて来て部屋の隅にやつたり窓際の所にやつたりするので。我々が寝ないで起きて居ると傍に来て頻りに何かを聞いたがる。どうせ眠れぬ時だから面白半分に相手にしてからかつてゐる。出来たスケッチなどを見せて、是は君の中隊長の顔だとか云つて見せてやると喜んで居る。所が是でなく、安心が出来ない。何處に荷物があるかといふやうなことを見て歸りますから、金を何處に隠したら宜しいかと苦心をするわけがあります。それで床に就きてから頸と吳蘆の間の空虚の所に入れて寝たり、一部分は身體に着けたり、三四ヶ所に分けて置く。例へば二百五十元位這入つて居るのを腹に巻きますと、下を向ひて寝れば宜いが、上を向くと隣の所が押へられて非常に苦しい。のみならず腹が冷へるといふやうな氣がしてあちら向いて寝たり、こちらを向いて寝たりする。金の爲めに苦しむとい

ふのもをかしい話だが案内者にも少し持たせ兎に角命掛けで以て寝るといふ譯です。

庭先には荷擔ぎに擔がせる荷物がある。それには大した物は入れて置かれないから、寝る時にどうかして金だけは持つて寝なければならぬ。夜中にかねのことに氣が附いて見ると本統に一種變なものです、それも都の近くならば何とか方法も出来そうですけれども、山に這入つて百里も百五十里も入つて居る場合は金を取られて仕舞つたら全然身體が動けなくなるのです買ひ集めた品物を取られる位は構ひませぬが、兎に角金を持つて居るといふことを知られると向ふの人は殺してよも取るといふことは度々聞かされて居ります。自分でもそれは餘程覺悟して居なければならぬことです、だから第一金を持つて居らぬやうにいつも見せかけてゐなければならぬ。是れ程に苦しいことはない。無ければ無いなりに無邪氣にして居れば宜しいでせうが、有つて無いやうな顔をするのは苦しいものです。毎日要る丈け二十五弗か三十弗の金は小出しにして置いて、其中の二三弗は自分のポケットに入れて置く。銅貨や小さい十錢、二十錢の小金はいつも直ぐ出るやうにして置かなければならぬ。それを兵隊から見ると不思議だらうと思ふ。いつも無いやうな顔をして、いつも出して来るから手品のやうで不思議と思ふでせう。自

分としては本統に上手に隠した積りですが、風呂に這入る時には一寸困る。我々は勞れて居るから熱い風呂を沸して這入る。場所は中庭で風呂を使ふのです。皆に見られても仕方がないが裸になる。其時は荷物を眺めながら這入つて居る。それから又金は便所などに落したらそれきりですから、成べく便所でない所で用を足すやうにしなければならぬ。その邊の苦心は一通りでない。さういふ経験をやられた諸君があるならば理解して下さるでせうが、これ丈け申上げても本當の話のくるしいところその込み入つたところはちよつと御分りになりにくいことと思ふ。

支那人の良い家庭に泊つた時はさういふことはないが、少々變な家に泊つたり、或は木賃宿に泊つたりする時は絶えず頭を痛める。それともう一つ怖れることは人殺しの方法である。地では甚だ要領を得た殺し方をする。金がなければ殺すことはしないのですが、普通毒で殺す方法もありませう、又針一本あればそれで肋骨の何番目かを突いて殺す、又は心臓をどうかして殺すといふ方法もありますし、或は料理などに御馳走と見せて置いて、其實毒を入れて置く、それに陥らないやうにする爲めには、普通向ふの貴族の人は箸を自分の家から持つて行く、一

尺二寸位の象牙箸を持つて行く、其箸の先に銀が掛けてある、毒にも依りませが普通毒は銀に附くと銀が變性するといふ、これで自分で箸を持つて行く我々はさういふことになる。運命と思つて居りますから、向ふで出して呉れる本統に汚い箸でかき混ぜて食べて居ります。尤も田舎に行くに御馳走らしい御馳走は一つもない、大きな藪蕎麥の茶碗よりモット大きな井ですがそれに御汁が一杯あつて、拇指よりも大きい青い唐辛子がウンと這入つて居る。それに豆腐……豆腐と申しても縄で提げられるやうな堅い豆腐ですが、それが這入つて居る。それから谷川に居る魚が場合に依ると這入つて居る。

九 原始生活

豚などは卓上に出て來ないといふやうな程度の所ですから、さういふ所で毒などがあるとは無論思ひもさせぬけれども、或時支那蕎麥をやつて居つた所が、上に肉が少し掛つて居つた、肉をはぐつて見た所が、其下に蛆虫が二三匹居つた、吃驚りして、其前に金を拂つて置いたが、ウンと戒しめておいて其處を立退きました。偶に肉があると思ふとさういふ譯です。兎に角食

ふ方のことは御話にならぬやうな原始的の状態に在るのですが食ふ位のことは何を食つても命を繋いで行けるといふ覺悟があるから何とも思ひませぬ。一人も日本の國の人の居らね四面楚歌の聲といふやうな山里に行きますと其夜は、遠方に犬の泣聲が聞えるといふやうな時、何となく驛旅の感といふものは言ふに言はれぬものであります。我々は唐詩選其の他支那人の詩などを見、又文學物を讀む時には大變風流に感じますけれども、實地自分が其經驗を嘗めるときには何とも云へぬ心の寂しさを感じるのでございます。

我々の案内者であるとか、兵隊……兵隊は護衛といふ名前で附いて居るのですが、さういふ者の宿屋の費用は私一人の名前の中に悉く何も彼も書き入れて来る。と云ふのは兵隊どもは權力がありますから、宿屋の主人に向つて頭ごなしに何でも言ひ附ける。さうするところらに書附が來るといふ譯、若し兵隊が餘計なことを言つて、或は是は日本から來た人で、是々位金を持つて居るだらうといふことを村の者や主人などに言ふと面倒なことが生ずるのでありますから、第一兵隊などに一々明かにしてはいけない、彼の地方では兵隊が暴力を逞しうしてゐる爲めに、なかく兵隊には手を焼いて居るのであります。

十 兵隊の心事

日本人では武士道の精神から打算のことを排除する。殊に軍隊などでは商賣氣を出すといふことは絶対に排斥すべきことになつて居るが、支那では兵隊其者に非常に打算の考がある、是は上から下まで總てさうであると言つても宜からうと思ひます、第一兵隊になるには向ふでは戸籍法と云ふものがありませぬから、傭兵で募集されて集る者が軍隊を作ると云ふことにならぬ。悪く言へば烏合の衆であります但し別段に訓練らしい訓練がある譯でない。金に依つて集つて來た傭兵でありますから金が渡らない場合にはいつ何時でも家に歸つて仕舞ふ。又どんなことをし始めるか判らぬ。隊の方からしてきまつた丈の金が必ず渡るといふ保障は出來兼ねるのです。

支那人には上官の爲めとか國家の爲めとかいふ考のないのは當然のことで、金が貰はれるからこゝへ雇はれて來るのだといふ考である。何處までも被傭人的の考を持つて居るのである。訓練をやつても身が入らない、私が先年連れて歩いた兵隊は高山の上で天候が一變し少しゴロ

ゴロ鳴り出した所が、皆持つてゐた傘を開いた。そこで日本の兵隊は傘などはささない云つてやつたところが「我々の此服は銘々自分の金で拵へたのだから雨に濡らしては惜しいからさすのだ、あなたも這入らないか」と言つて私を中に入れて呉れた。其の洋服の地は羅紗ではありませぬ。木綿の鼠色で形丈は軍服に作つてあるのです。下にゲートルを附けまして、足には支那靴を穿いて居りました。すべてそれはなぜ自分で作らなければならぬのかと云ひますと、軍隊から軍服を皆に給して置いても賣飛ばして仕舞ふ、それから鐵砲なども平生訓練用の物を銘々に渡して置くとは何時何處に賣つて仕舞ふか分らないから、平素はわざと訓練をさせないで庫に納めておくのです。それで政府當局から檢閲官でも來るといふ場合にはすぐ庫から出して鐵砲を持たせるのです。けれども、平素は成べく數の減らないやうに納めてある。戰爭の場合でも、南軍と北軍とで、例へば湖南省あたりで兩軍が接戦するやうな場合でも、「お前さんの鐵砲は餘程良いやうだが、それは幾らで寄越して呉れるか」といふやうな談判が始る。互に丸を打つといふことは止めて、先づ鐵砲の相場を話し合ふといふことになる。それが單に鐵砲丈けでなく、或村なり町なりが一方の軍畧の上では是非此處を焼き拂つて仕舞はなければなら

ぬといふ場合に、若し城内の者が一致して幾ら／＼の金を纏めて出すから、此城は焼かすに何處か他に道を轉じて進んで呉れぬかといふと、金との相談ならさうしやうといふので、相談づくで其處を焼かすにすませるといふやうなことも事實行はれて居る。さういふ譯でありますから軍隊といふものは如何にも打算的に行つて居るのである。

それから我々が連れて歩く兵隊は大抵ヒラ兵でありますが、中隊長などは相當に扮装も良かったし、風采も良い、段々ヒラ兵どもの口から隊長のことを聞いて見ると、隊長は軍隊には我々と一緒に雇はれて來たのだがあれは家が金持で大金を出したから中隊長の職を贏ち得たのだ。我々も金さへあればあゝいふ者に爲れるのだと言つてこきおろして居りましたが、少しも軍人の精神といふことは問題でないやうであります。詰りそれは初から軍隊を組織するのでなく、内容がさういふ風であるが爲めに、軍隊内部に打算的の考が横溢して居るといふことは當然の譯であらうと思ふ。南京や蕪湖あたりの此の度の南軍の正規軍にしたところがあの通り掠奪や凌辱をするものである。これでその一般は推測されるのである。

十一 動物の愛

民國人は日本人の到底及ばぬ美點を生來持つて居る。是は動物に對する取扱方のことですが、例へば家畜のやうなものを取扱ふ場合、豚でも宜し羊でも宜い、牛馬は無論のこと、水牛のやうなもの或は鷺のやうな鳥類の群集して原野に飼はれる場合、斯ういふものを取扱ふ時の方法といふものはなく、巧みなものであつて、日本人はともさういふ點が是までの經驗に依ると不得手である。尤も經驗が餘りないといふこともありませんが、是は日本の民族はさういふ點には下手であるといふことがいへる。

支那人は西洋人と同じやうに牧畜方面の事業には餘程得意のやうであります。所が馬を取扱かつても、或は驢馬のやうなものであつても、日本人はとも怒りつぼくて仕様がなない、さういふことを前から聞いて居りましたから、我々も驢馬旅行をやります時には、どういふ風にすれば長途を歩く場合に驢馬を喜ばせて歩くことが出来るかといふことを支那人に直接聞いて見ました、それを私が實驗しましてから大過もなく行きましたから、友人にも傳へて居る。今其

の方法を序ながら御話し致しませう。それは驢馬で旅行するとき悪い道路になると同じ方面に向つて轡を駢べて行くといふことは道幅が狭いときは出来ぬ、どうしても前後の關係になつて並んで進んで行く。さうすると向ふは風が能く吹きますから、耳に風が當つて前の人の言葉が聞えない。然し横に列をなして行くことは狭い路では出来ないことです。それで私はいつも反對に乗る、驢馬の首が前に進むといふと後ろを向いて乗つて、手綱は片手で握つてゐる、足は掛けなくてもブラ／＼させたまゝの方が却て樂です。それで右の手は遊んで居る、さうして坂を上る時は多少身體を加減しなければならぬが、どうかして驢馬が自分の思ふ通り動きさうもないといふ場合には指で以て汚い話ですが尻尾の附根の所を少し撫でゝやる。どういふものか驢馬は好い氣持になるものと見えて目を小さくする。本當の局部にはさはりませぬが、其近邊を撫つてやると靜になる。其方法を行つてやりましたが少し急がせるやうな場合でも撫でてやると能く言ふことを聽く。日本人はむやみに鞭を使ひますが、私は餘り鞭を使はない。この方法でやれば驢馬旅行に於て落とされるか怪我するとかいふやうなことは私は一遍もありませんでした。若し諸君が支那旅行をやるといふ場合には、此話を思ひ起されて經驗なさるならば

面白いと思ひます。

十二 牧 童

さういふ風で單に驢馬のみに限らず、家畜の取扱方は支那人は餘程心得て居るが爲めに、十才以下の子供であつても數千頭の羊を牧場から寝かす所に導くことが出来る。又犬を使つて牧場の管理をさせるといふことは支那では見聞しませぬが、西洋では其方面が大分發達して居るやうであります。それから驚なども支那では子供が導いて居る。實に無慮數百のものを小さい子供が川で遊ばせたりそれを寝かせる位のことには譯なくやつて居ります。尤も土地が廣々として居つてさういふ風が材料が多うございますから、自然練習する機會も多いのでありませう。要するに支那人の家畜に對する扱ひ方は日本人の大いに研究しなければならぬ所である。日本は牧畜事業に對しては列國中以最も劣つて居るのでありますから、大に此際斯ういふ方面を發達させるやう互に努力して行かなければならぬと思ひます。

十三 支那文學の特色

日本人が支那といふ國を隣に大昔から持つて居なかつたとする、其の場合に日本の今日はどうんな状態に在るかといふことを考へたならば甚だ日本の人を馬鹿にした言ひ方になるかも知れぬが、生蕃と餘り違はないではないかと思ふ。随分今日の日本の文化を高めるに至つた此の素質を造るに至るまでには、魂のことは兎に角として、文化方面に於ては、確に支那の恩恵に浴したといふことが多いであらうと思ふ。其本家本元たる支那人は、どんな程度の低い者であつても文學的の趣味を解するといふ點に於ては日本人より確に一等上であるといふことがいへると思ふ。尤もあれ丈け廣い面積を有してそれに數千年間にわたり種々な經驗に經驗を重ねてあれほどまでに練り上げた譯であります。

平生の日常生活の上から見ましても、百姓は百姓なりに一種の文學的の生活に満足してやつて居る智識階級は無論のことではありますが、全體から申すと支那は智識階級といふのは人口四億萬の中の一割もなくしてあとは無智識階級でありますから、寧ろ智識のない方面のことを全

體の論として言ふ方が當つて居るかも知れませぬ。けれ共支那人は文學的方面に適した素質を持つて居るといふことが言へる。是は建築物を見ましても、又食べものを見ましても、着物でも極端から極端に亘つて色々あるが兎に角衣食住の方面から音楽方面、又文筆の方面など確に日本人よりも優れた點が多いやうに見受けられる。文學的の方のことで申して見ると僻陬の田舎に這入りまして、山には殆ど水の音と風の音の外には何にも聞えないやうな所で、偶には鶯の聲がして居るやうな深山に行つて見る。一つの廟が幽玄な景色をバックにして建つて居る。周王廟であるとか關帝廟であるとか、財神廟とかいふものが、所々山の上に見出されるのであります。それは甚ださ々やかな建築であるが、而かもそれには一種の文學的の色彩が見えてゐる又さういふ様式で拵へてあるといふのが段々ありまして吾人の眼を樂しませて呉れます。又殆んど眼に一丁字のないやうな百姓を捉へて來ましても、所謂老莊派の學問でもした人であるかと思はるゝやうに、如何にも大悟徹底して呑ん氣を極め込んでゐる。世の中が中華民國の世になつたのか、まだ清朝で居るのか、一向その邊のことは知らぬ、世に新聞といふものがあるのかわからないのかそれも知らぬ。新聞を見なければ時勢に遅れるといふやうなことも知らぬ。

此頃汽車(自動車)火輪車といふものが出來たといふことくらいは知つて居るでせうが、本統に呑氣に水牛と共に田野に出で毎日を送つて居るといふ連中が多いのであります。さういふやうな連中には殆ど何にもカルチュアの方面は分らないのでありますけれども、何となく人間が雅致を帯びて居るといふことだけは言へるであらうと思ふ。

併し田舎の土民は無智識であるが爲めに迷信のやうなものは非常に盛でありまして、迷信傳説といふ方面のことは意外に發達して居るのであります。荒誕無稽のことを言ひ觸らしもするし、又眞面目に信じて居る。斯様なことは矢張り支那の地理上から來るのではないかと思はれますが、總て支那人の文學的方面に長けて居るといふやうなことは、支那の社會の各方面を見渡して見ますといふと、政治的とか社會的に存外興味を感じることが出來ないで、矢張り精神的に愉快を求めなければつまらぬといふことが銘々の頭に歴史的に浸み渡つて來て居るのではないかと思はるゝのである。

十四 人情の極致

萬民の生を安んじ業に楽しましむる爲めに天下國家に君臨するてふ英雄は偶には出ることもあるが、その出現は三百年に一回とかいふことで、滅多に出ない。支那四億萬の民衆を樂しませしめるものは事實に於て國家問題ではない。非常な不出世の豪い者が出ればともかく、一般の者は日常生活に甘んずるといふこと丈でそれに満足してゐる。全く一つの運命見たやうになつて居るのであります。天下國家を取る者はさういふものを犠牲にしてやつて居るに過ぎない。だから支那といふものの全體の人情を考へるときには、さういふ政治家などの考は別として、全體の民衆を通じて觀察をしなければならぬ。天下國家に野心のない連中は、樂みは自然を樂むとか、家庭に於て樂みを求めるとかいふことになつて来る。そこで彫刻にしましても建築にしても、佛教的に非常な力を籠めた、勞力を非常に掛けたものが段々發達して来る。是は繪畫にしても、彫刻にしても、總て美術品の方に支那趣味の現はれて來るといふ事實が其間の消息を告げて居る。そして之には時間の觀念といふものをいつでも超越してゐる。

かやうな點に於て争へない所の支那社會の特色が自ら現はれて來る。家を造るにしても部屋の仕切りを大變多くする。下等社會は仕方がないが、中以上の住宅になると部屋に澤山仕切り

を拵へる。又部屋を一つ造れば其中に小區劃を澤山造る。さうして兄弟の部屋とか叔父さんの部屋とかいふものが出来る。部屋を一つ造るとそれに入口を三つ位作る。又その出入口には秘密なのが出来る。又裏口の路次などにはそれからそれへと複雑な道を作り又道路の設計なども小面倒に出来て居る。それが爲めに風儀を悪くしたり、泥棒の術を助長させたり、色々な害も生じて來るが、兎に角さういふとを段々拵へて行くといふことは支那の今までの歴史が屋外の方では樂みの得にくいところから、内部に自然に求める様仕組まれたものだらうと思はれる。支那人の藝術上の作品を見ても、馬鹿に鄭重に時間を掛けて彫刻物を拵へるとか、繪畫を作るとか、さういふ物を見てもわかる通り唯時間と勞力は之を認め得るけれども、それに向つて何等の氣品を見出すことが出来ないのである。日光の靈廟の如きものを見ると、こは支那建築の爛熟したものの日本に入つてからも發達したものでありませうが、あゝいふものを見ても唯細かく出来て居る丈けでつまり精巧といふのみであります。あゝいふものを親しく支那人が來て見ると非常に賞める。支那の本場に行つて宮殿などを見ても大變な五色を以て雲形或は花の形狀などで美しく塗り潰してあります。さういふものを見ると如何にも支那式に美しく見えてゐる

るのであるが一向其間に氣品がない。高尚であるといふ心持が見られないのである。尤も六朝あたり、唐あたりから段々退化して参つた爲めといふことでありますけれども、全體に於て意味のないが多い。是は國家全體として最高潮の所を段々過ぎ去つて行つて、時代を逐うて段々下りつゝある。今日中華民國になつて頭を上げれば格別、清代では一旦康熙乾隆頃に頭を擡げたけれども、今は餘程調子が下つて居るといふことが藝術の上に現はれて居るし、又さういふ方面に従事する人も自覺なしに唯勞力を掛けるばかりで、何等の秩序なく何等アブストラクトしたものが見出されない。これが今日支那文化の特色になつて居るとは嘆はしいことでもあります。これも一面から言ふと國家全體の調子が其處に來て居るからであるから仕方ないのである。

十五 漢文は方便の時

文學的の方面で最も能く我々に知られて居るのは漢文であります、皆さんが漢文を見られるといふとひどく頑固な感じがするといふ。老人はそんな風に教養されてゐるからさうは言は

ないでせうが、ともかく形式に引掛つて囚はれ過ぎてゐる。達意の文章では僅か二行か三行で言つて仕舞へるものが漢文にすると大層長くなり又餘計の形容が列べられ、エッセンスといふものはいくらないのである。一面からは漢文であれば簡潔に言へて力が強くて宜いと云ひますが、我々は漢文の形式を取ると手取り早く行かない。少くもそれから強いものが場合に依ると得られないといふことが漢文の半面に於てありはしないかと思ふ。こは世間の人の言ふことと反對の事を言ふ様であります、其誤解があるといかぬから辯じて置くのであるが、さういふことがあるのである。

漢文は一面に於て非常な強い言方が出来ると同時に他の一面に於て芝居の役者の如く色々の着物を被せることが出来るといふ便法を持つて居る。茲に漢文で以て人を泣かせるといふことが假りにあるとします、それは漢文の形といふものから聯想する所の考で我々はその形に對する聯想の方に自然と引かされて行く。それだから漢文でなければ精神が出て來ないやうな風に感ずることは既に我々の囚はれた因襲である。さういふ風な弊害に陥るのではないかと思ふ。いつもそれに囚はれる漢文をやつて居る間は小説なり又戯曲なりが漢文であるが爲めに我々に

強い情を感じしめる。けれども漢文でなければ事實はそれ程のことではない。書く人もツイ支那文で書くときは筆が思はず其方に迂つて行つて、極く調子高く書いて仕舞はなければならぬやうになつて仕舞ふ。是は漢文の特徴である。さういふことがあつた爲めに今まで大平原の文學といふものは其方の特色が高まつて今では支那文學といふ特色あるものを大成したのであるが、我々は漢文にかぶれるといふことは何處までも警戒しなければならぬ。漢文では、心にいか二しか思はぬことを九にも十にも言へる。それで以て我々はツイ誤まれて仕舞ふ。文天祥といふ人の如きもえらい人であるに相違ないが、それは何で偉く思はれてゐるかといふと文章で残つてゐる爲めである。併し果して文天祥はそれ丈の人であつたかどうか心理上の作用を考へるの必要があると思ふ。

そは葬式の時などに他の兄弟よりも大きな聲で泣くやうに競ふと云ふのと同じことで文天祥が人を泣かせると云ふことはその文章で人を泣かせてゐるのである。腹の内では他の事を考へて居つたかも知れぬと考へて宜い。それは自分共が平素民國人と交際して居ると、齒が浮くやうな親切なことを言つて呉れる。それであるにすぐあとから人をベテンに掛けて出し抜くとい

ふやうなことをする。一時は肝膽相照することなどがあつても、それはその時文けであつて、あとでは其の逆襲がいつ来るかも知れぬといふこと考へて置かなければならぬ。それと同じことで、文天祥の文章を読んで讀者は泣いたといふのは芝居を見て泣いたと一般で、役者から云へば泣いた人を見て笑つて居るかも知れぬ。其處は漢文の妙味の爲めに我々が欺かれて居るのである。従つて漢文といふのを吾人がいつまでも守つて居るといふことは、漢文の専門の學問としてゐる人は別ですが、支那を理解するといふ者の爲めには不十分であると思ふ。吾人は高所大所から觀察しなければあとで臍を噬むやうな虞れがあるといふことを序に申し添へて置く。

十六 日本 の 勢力

自分共日本人が支那内地を旅行します時に非常に愉快に感ずることが屢々ある。それはどんな片田舎に行きましても日本の仁丹の廣告が出て居ることである。私は茲に宣傳をする譯ではないが支那内地を歩いて八千尺もある山の上に屢登ります。そこにちやんと「仁丹」と大きな字で書いてあるのが見當たる。相變らず藍色の字で白抜きで二間大又は三間大の字で書いてあ

る。側には大抵競争的に必ずそれと相伴うて「美孚」といふ文字が掲げられてある。こは亞米利加のスタンダード石油會社の廣告であります。其石油の廣告と仁丹の廣告が今はやゝ衰へたが殆どいつも競争の形で居る。又味の素や金剛石牙粉の大文字も見ると。或は又「清快丸」といふ關西の仁丹のやうな藥、そのが出て居る、日本の藥屋は餘程努めて居るものだといふことが分る。其事を歸朝後仁丹屋に話した所が色々廣告の苦心談をしてゐた。あれ位に日本人がズツト山の奥に迄這入つてやることを外の方面に應用して行く丈の元氣があれば實に頼母しいわけである。尤も仁丹の賣れる譯を段々聞いて見ると、こゝでお述べするには變な話ですけれども、日本では之を上口の口に入れるが支那では上と下の兩方の口に使ふと申して居りました。これはチト申上げにくいのですがそんなことからであるか非常に多く賣れるといふことであります。上の口の藥位では仕様がありませんが、御互ひに日本の智識階級の連中が支那を理解するのは、さういふ人情の機微にふれて隅々まで行渡つて向ふの實際の日常生活を調べて、さうして本統の支那の土民の人情風俗を見るときが先づ第一に必要なことと思ふ。其點になると亞米利加人などは實際によく調べて居る。事實楊子江あたりの沿岸にゐる土民で少し金の

出來て居るものに向ひ「お前達は一生涯何の希望があるのか」といふと土民は曰く「私等は一生涯どうにかして支那の土地には住まひたくない。からして上海に出て租界の地に住みたい。佛租界でも英租界でもどこの租界地でもよい。そこに行つて。居留地の法律で護つて貰つて生命と財産の安全を期したい。それさへ出來れば西洋などに行くには及ばぬ」といふことを言つて居る。

こはその半面に於ては如何に彼の財産と生命との不安を感じて居るか云ふことを物語つて居るのである。是は最も味はふべきことで、我々は最も此の點に興味を感じてゐるのである。支那の人情の機微といふものはさういふ點に在るのであります。是は無理もないことで、政府といふものが一向あてになりませぬから、自然さういふ心が起るのである。政府の當路者であつても、是は餘り大きい聲で言へないことかも知れぬが、役人をして居る連中どもはたゞ當座限りの役をしてゐるのであるから、清朝時代などでは人も言つて居る通り、一度巡撫なり道臺なりの名位置を得れば三代寢て居て食べられると云ふことである。又清朝の末路には官吏の腐敗話がたくさんありました、今でも隨分國を賣り兼ねまじき連中が全然ないとは言へないの

である。實際又本人の心理状態に立入つて考へて見れば自分の財産を英蘭銀行や米國の銀行に預け移して、利子を良くして呉れる保證でもあれば格別、アヤフヤの支那の銀行に預けるかはりに我が家の一部分に金の壺を埋めて置く方が宜い位である。それ故に租界開港場の新設を外國から強ひられることは國家としては好ましく思ふかも知れぬが、其の租界に好い住所を保證して貰つて一生涯を送るといふことは支那人有識者階級の内心翹望する所であるのである。

三 江南に見る清明時節の情緒

十七 江南各地の山寺行脚

自分のことをいふやうであるが老母は不斷、寺まわりが好きであつた。自分が支那から歸ると、母に支那の名山奥地の寺院、山僧の讀經の話などこまかく物語れば何より之を喜んで聞いてくれたのであつた。又浙江舟山列島普陀山の讀經でもレコード(唱盤)で蓄音機にかけると云ふと、支那のお寺に詣つてゐるところつくりの氣分になると云つてゐた。何にせよ有名な眞達和尚始め諸師山僧數百名からの朗誦なのであるから「香讚」の唱盤の如きは殊に誰れ人の心にも靈感を喚起してゐたのであつた。支那でもこれは、

焚香頂禮
諸佛降臨

慈雲普護
花雨繽紛

千祥咸集
百福並臻

人人虔誦
大地回春

と云つて有りがたいものとなつてゐるのである。母が佛間でおつとめのあとにはよく之をかけて喜ばせたものであつた。ところが今はこの唱盤を見るにつけても思出のたねになるやうになつた。大正十五年の二月七日六十六歳(文久元年生)を一期として、腎臓炎から腦に來て遂にどうとう六神丸の力も西洋醫者ふたりの匙もその甲斐がなくて永眠。十一日の紀元節の夕、寂しい日暮里の火葬場で茶毗に附せられた慈母は今白骨となつて了つた次第である。父の十三回忌が今年だなどと思つてゐるところへ又此の不幸。八年前に長男重夫を亡くした時のことなど忘れてゐたのが、再び浮んで來る。人生の悲哀の種類にも色々あるが、かう云つた人知れぬ心の奥底の悲しみはいかに慨いても打ちやる事が出來ない。經驗を未だ味つてない人には眞の諒解は出來がたいことと思ふ。でも自分は幸であつた。いつも出かけて居る支那の奥地漫遊のときでなかつたのは、不幸中でも先づ幸の方であると友人の慰めて呉れるのは如何にもと尤もに取れる。六神丸さへも利き目を現はさなかつた重患だつたので諦らめては見たものゝ、これ

が若し支那漫遊中でもあつたらとても片田舎の僻地まで電報が届いては來ない。それが不思議にも偶然自分が日本にゐるときであつた。九州大學の講義を了へて歸る途中電報を受取つた。急遽東京に歸りつきて臨終の間に會つたのは何よりであつた。心残りのない丈家族のものどつくすことが出來たのはせめてもの慰めとしてゐるが、今日となつては没法子であるとあきらめるの他はない。

今にして思ふと年寄りには餘所の老人と違ひ、支那の田舎に出かくることを決して危ぶないと思つてゐなかつたらしい。勇んでその行を楽しんでゐてくれた。そして時には家内にも行つて見て來るやうにと同伴させてくれたこともあり。又文子(十一歳のとき)と一緒に夏休みに連れて行つたこともあるが、いつも支那行を積極的に勧めて居てくれたのである。子爵後藤新平翁には九十歳で亡くなられた母堂が子爵の支那行をいつも案じてゐらつしやつたので、親思ひの子爵は孝道のあまり支那行が十分に出來なかつた様子である。その點は自分は今更の如く母に有りがたく感じてゐる次第である。

支那に行つて讀經を聞き、山僧を訪ねるなどは水野梅曉君か常盤大定師かの如くもあるかの

江南に見る清明時節の情緒

如くに思ふものがあるかも知れぬが、支那社會の精神的方面を本當に見るには山門を訪ねるところが何よりである。支那文化の深みの或る方面は今日お寺關係のところに残つてゐる。寺廟の空氣は一見墮落してゐるやうなところもある。殊に乞食的寺男の多いところに行くとき外國人がかけて哀を乞ふ手合ひが多いので厭氣がさすこともあるのであるが、田舎の寺らしい大寺に行つて見ると全くその見解は裏切られるのである。山寺生活は見れば見るほど深みがあり懐しみがあつた。通り一遍に支那を素通りして來る連中どもに、ぜひ此の山僧生活の一斑をも覗いてもらひたいやうな氣もするのである。日本だつて田舎の山門の清淨な空氣はゆかしい幽玄の氣に打たれるものであるが、支那のは又格別である。

江南の地には有名な巨刹の多いことは人も知る如くである。普陀珞珈は云ふも更なり、天童育王の如き、又靈隱天竺の如き、棲霞甘露の如き、例の鎮江金山寺の如き高塔の下堂内三百の山僧の藁の圓座に踞して讀經を始めつゝる光景、又育王天童の本山に見る焚香讀經の光景、全く、諸佛降臨、慈雲普護、千祥咸く集まり百福並臻るの感が自ら起つて來る。廬山南麓の秀峰寺、海會寺、慈航寺、萬杉寺なども又同様の靈感を催されるところである。總體に江南の山寺

は空氣のしつとりして樹林の多い勢であるか、之を北部支那の山門に比べると全く變つた感じがする。同じく梵唄の聲を聞くにしても、南方で聞く方が有りがたさが深い。遠寺の鐘の音、古殿の香華、寺僧の讀經すべて、南方の山門九天の雨露深きところの趣の方が何となくお寺らしい氣持ちを咬るのである。支那は何れの地方の漫遊にしても、寺院廟觀の歴訪をぬきにしてはよほど興味が減する。たとひ寺廟の景趣が俗惡化してゐるものが多いにしても、この方面を無視するわけにはいかぬ。

江南地方の山門は四季の折りくゞでいつが一番趣きに富んでゐるか云ふと自分の經驗からすると、舊三月十三日頃例のチンミンチエー清明節の頃である。江南の春雨は驟雨であつて詩趣に富んでゐる。江岸の蕭條たる春雨の日に楊柳青々水を渡るの人を打眺め、昔王維が汶陽に歸る途上廣武城邊で寒食の節句に遭遇したと云ふ故事も此の季節であつたのである。江南山門の道には必ず石が歩き易いやうに鋪き詰めてあるから、山門を訪ねるにしても日本の山寺とちがひ大變らくである。山門の麓には石の牌樓が聳えてゐて、之に題字があつたり、左右の石柱には球を片足で押へた姿の老獅の一對の彫刻が配せられたのが樹間に見えたりして、山門前の

気分は既に何となく淨域の近づいた事を聯想せしむるやうに出来てゐる。雨の日には寺僧、寺男も門外には出であるきをしないから春雨の山道は行人の影を見ない。たゞ雨露深くして詩趣を咬るよい題材を興へてゐるのである。浙江は寧波の田舎慈谿の山に道教の寺で有名なる清道觀と云ふがある。之に友人鄭君と一緒に訪ねて行たことがある。その時も例の雨露深き樹間の石段を幾丁となく登る。石の牌樓苔蒸して獅子は一部漫漶してゐたが、その雄姿に古色を添へてよい眺めであつた。山道を登りつめると山門がある。道觀は規模も宏大に幾體の神像楹聯などもその前年に行つて見た時と同じでそのまゝであつた。道觀は三層か四層か、かなりの高樓になつてゐるのであるが、一番上層の樓は半ば巖窟内に在る。正面の巖壁に沿うて道神の立像の安置せられたるがある。之も以前の通りであつた。度んで之に禮拜をした。それから欄杆によつて一望千里、浙東の大平野を眺むるに實によい呑んびりした風光である。文人風に之を形容すれば、高樓萬里春とでも題したいやうな氣もちのよい詩景である。谿慈の町と運河の水は脚下になたねの黄色の畑は緑なす毛氈の畑と入り亂れて、色彩りよき一大パノラマの展望何とも云へない景趣であつた。

前年白蟻の害で、殆んど怪しくなつてゐた道觀の柱楹檐端の邊りも、今は工事も大半成りて、圓楹紅綠紫黄の圖案模様も鮮かに眼を引いてゐたのであつた。かやうにしてその日は木匠、瓦匠が柱や壁に足場を作り工事最中のところであつたがともかく思ひ出多き清道觀の近況を拜することが出来、僧房を訪ねるのいとまなく山門を辭し山道に清淨の靈氣を感じつゝ、鄭君と普濟禪寺へと道を取つて行つたのであつた。

十八 清明の時節雨紛紛の景趣

清明の時節雨紛々、路上の行人魂を斷たんと欲す。借問す酒家何れの處にかある。牧童遙に指す杏花村と云ふは有名な唐詩の七絶、杜牧の作である。

清 明

朴 牧

清明時節雨紛々。路上行人欲斷魂。

借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。

この杏花村の絶句は自分の最も好きな詩の一つであるが、後世杏花村と云ふが各地に見出さ

江南に見る清明時節の情緒

れる爲め杏花の説が色々になつてゐる。しかも春雨の紛々と驟雨式に降つて來るところは、江南南京(金陵)あたりを見ておくのが一番適當であらうと思ふ。又實際この江南地方一帯雨の景趣はすべて詩の題材たらざるはなしである。湖南地方の洞庭の春雨にしても、所謂瀟湘八景のある地方のこととて何れも決して悪くはない。遠浦歸帆の湘陰、洞庭秋月の岳州、山市晴嵐、天暮雪の岳麓、すべて皆春雨をバックにその地の風光を考へて見るに、何れも景色が大きくて雅趣に富んでゐないものはない。又江西の廬山は云ふに及ばず、江岸一帯が即ち畫趣そのものである。詩人や畫伯はたいして努力をしないにしても、自ら文人的素質が備はつて來るかの如くに感ぜられる。清明の佳節當時となつたならば、一帯に雨紛々の朦朧體の對聯に雲煙體の畫卷など自然と出來て來る筈であると思へてもよい位である。古來文人墨客が江南の地方から多く輩出してゐるのもその天然が大いに與つて力があると思ふ。江山畫圖に入ると云ふが、江山又自ら文人に入るとも云ひ得るであらう。

清明寒食の時節は日本で云ふと彼岸の頃に當り、江南では民家それ／＼子孫の榮えてゐるうちであればあるほど墓所を立派に掃除し、或は壞れたところは重修をする。そしてそれ／＼祖

先考を祀る儀式やら、靈前の手向け物、追善の供養饗應などを盛にやるのである。こは洵にゆかしくて麗はしい風習である。江南は浙江錢塘江の義渡を渡り、西星から蕭山シャオシン紹興あたりまで運河を船で行く。紹興は東廓門の水門から江上を遙かに例の脚划船と云ふ手足兩方で漕ぐ小舟に乗つて、蘭亭の樓公と云ふ處まで南下し、更に十支里、禹王臨終の靈地として傳へられてゐる禹王廟までも江上運河を漕ぎ行く。そしてその日のうちに會稽の山も遙かに兩岸のなたねの畑や、江岸に巍々乎として聳ゆる石頭牌樓の古色を賞しつゝ一日の清遊を了へて再び紹興へと歸つて來る。全く春の日長がのどかな日には持つて來いの雅遊である。文人でない普通のビジネスマンでも、一日のチェンジ・マインドは恰好の催しである。

清明の時節雨紛々のところ、丁度この方面の江上をその名も雨にちなみたる張雨耕君と小舟を傭ひ、一葦の行くところを縦にしてゐると降りみふらすの春雨は却つてその景趣を添へてくれるのみで妨げにならぬ。況して時々その雲烟の間から綠なす江山巒峰が高姿を現はして來ると趣を増すわけになる。そしてその白雲深きところに人家がある。そはしかし人家にしては壁の色が紅過ぎるやうだと見てゐると、

張君、

「あれは人家でなくミヤウ廟である。」「龍王廟だらう」と云ふ。なるほどだん／＼船が近づいて見ると廟である。自分は張君に向かつて、

「張君いかにもあれは屋根のそりの工合から見てもミヤらだね。そして緑したゝる老樹とあの紅壁との色の対照は畫圖のやうだね」

などゝ語りあつてゐたのであつた。紹興城外の運河の江上には此の種の文人畫風の所がいくらかもある。トンフ東湖の嶂壁頂上にある東湖精舎を始めとしてまだお寺は澤山ある。四川省の奥地であつたならば石寶寨の山寨の如きものがあの頂上に構へられるのであるが人情惇樸な此の江南の田舎では見るも風流な江廟が眺らるゝとは嬉しい。「この次ぎに來たときは必ずあの東湖精舎の山僧をも訪ねて見よう」など云つてゐるうちに、このあたり幾杯もの鴿首の五彩の船がすれちがふのである。青紅、綠黃、金銀各様の塗料で美しく描き立てられた美術的のハウスボートである。船首のところを一パイに化け物の顔に似せて、耳目鼻口を最も怖ろしく描出してある中には、彫刻でも施してあるかと思はれる位立派なものもある。流るゝが如く流れざるが

如き靜かなる江山をかうした錦のやうな綺麗な圖案的の船の往來してゐるのを見るとこれはこれ紹興から蘭亭、東湖このあたり一帯かけて實際こゝは龍宮とでも稱して天下の童謡にでも唄はせたい氣持ちがしたのであつた。

浙江運河の江上は浙西浙東何れも四季を通じて十分の水を湛へ、春水岸に漲れんとして石路岸に沿うて長くつゞき、拱橋の題石刻鮮やかに讀まれ、橋下狭き處を鼉の音靜かに之を通りぬけて出て見ると綠野ひろく開けて楊樹の間に農家の二三軒が散見してゐたり古寺のウイカン回杆が二本左右に高く天に沖してゐるが見えたりしてゐる。帆を掛けてゐた小舟は橋下帆柱を倒し通りぬけて出ると又帆をかけてゐる。風力弱ければ帆柱の頂きに百間餘の綱をつけて岸を曳子に曳かせて行つてゐるものもある。その曳子は胸に斜に細長き板をあてがひ、之に例の綱を結び付け、遊びごとのやうに両手をプラン／＼させ足並みにあはせ吞氣さうに曳いてゐるのである。四川の三峡あたりに死力をかけて裸體の曳子が百人二百人と齒を食ひしばつて前に倒れんばかりの姿勢で巖角を辿り曳張つてゐるのに比べて見ると云ふと、たしかにそのローカル・カラーが此の曳子の上にも現はれてゐるかと思はれる面白く眺められたのであつた。

かうして浙江運河の江上を或は小舟で或は曳船で或は時に輪船で動いて見る。そして時々はまた上陸して見て氣に入つた田舎に二三日宛滞在をする。そしてその邊の風物に心から親しく接して見る。或は橋畔の樹下に佇んで江上を去徠する蒲鉾なりの小舟鵝首の美しいのに見とれてゐる。漁船鵜飼ひの船などもそこへ交じつてやつて来る。雜貨を積んだ民船も来る。實に運河は盛なもので又運河の水路は大小蜘蛛の巢の如く複雑に通つてゐる。穹隆狀をなしてゐる石橋の一番高い所に登り石の欄杆の彫刻のよく出来てゐる所に凭りかゝり暫く展望を恣にしてゐる。すると雨後の日和の時などあたりの景色が何となく和らかで白き水鳥の五六羽が岸邊の淀みで何かを啄いてゐるのが見えるかと思ふとそのさきの方には漁夫が四ツ手綱（支那人は之を罾と云つてゐる）をかけて、悠然とかまへてゐる。時々あげてはゐるが、滅多に大きな魚はかゝらないやうである。鵜飼をやらせる方がましではないかなど餘計の心配をして見たりしてゐると、どうも流石は江南清明の時節である。次から次へ續いて五色に彩られた鵝首のお釋迦船がいくつでも漕いで来る。その船は漕手の船頭までが餘所行きの衣裳をつけてゐる。そして漕ぐ櫓までが美しく五色に彩られてゐる。色は主に青緑の色が勝つてゐるから一見した丈では

綠色に塗りつぶしてあるやうに見える。船は蓬窓圓屋の奥深いところはよく判らぬがかねを敲き香を焚き念佛を唱へて老媪年弱のもの打まじり船内一パイに乗つてゐる。その唱へてゐる念佛の聲は焚香の煙に紅蠟燭のつけられたる光景と洵によく調和していかにも春ののどかな田舎の法會氣分を象徴してゐるやうに思はれたのである。

江上の農家から又同じやうな美船が新しく仕立てられて漕ぎ出て来るもあり又二杯ぐらゐの舷々相摩してくり出されて来るものもある。何れは皆清明の節句のことであるからどこか佛寺へ行つて法會でも營む爲めに漕がせてゐるのであらうと思はれたのであつた又時には氣の向くまゝに橋のたもとから町外れの方へと出かけて見ると廣く續ける共同墓地の土饅頭の原は見渡すところ春草の萌え出で、緑の一色で蔽はれてゐる。ところが山川の岸に面した所にある或る由緒のありさうな大きな墓陵は明の萬曆時代の銘ある石門はあれども、今はその子孫の絶えたる爲めか半ば壊れたきりで石柱も傾き誰れ人の重修する者もなく、随分ひどくなつてゐる。陵道に建てられた石人石馬石羊の類も哀れ水に落ちたるもあり首の亡くなつたのもあり文武の石人も倒れ半ば埋まりて目もあてられぬ状態になつてゐる。その昔ありし當時の榮華の力で美を競う

て建てられた陵墓建築の美もかうした清明の佳節にめぐり會つた處で何等營繕の手の加へらるるわけでもなく實に氣の毒なものになつてゐるのがまた他に多い。さうかと思ふとそのすぐ隣りの簡単な陵墓は陵域こそ狭けれ清く掃除も出来、雜草も引ぬかれて氣もちよく亡き人をして地下に眠せしむる丈の事の出来てゐるやうなものもある。全く墓陵は澤山あつても色々様々である。

かやうに墓陵を見又運河江上の鵝首の念佛を考へ併すときはまだまあ、あゝして焚香、念佛でも唱へて法事を營む子孫のあるうちの方が先祖の靈を慰める爲めに何より結構なことなのであると思つたのであつた。日本人にも江南漫遊の雅客の中にはかうした紹興蘭亭曹娥百官慈谿寧波へと悠々自適の行を試みてもらひたいものである。自分はこの間を都合三度やつて見た。素通りをしないで成る可くわき路に這入つて味つて見ることである。上海から寧波へ行くに一夜で新江天、新寧紹と云つたやうな蒸汽船で飛ばして了つてはビジネス的には行かれるがそれでは少しも趣が味はれない。満鐵理事をやめたる松岡洋左右君、三菱公司上海支店長たりし秋山昱禧君、詩人田邊碧堂翁などの珍らしくこの道を行かれ今日その風懷を偲ばせて

ゐる高士もゐらるゝ。その他癸丑の歲蘭亭會を日本東京、京都で催した時には雨山翁虚明友永翁始め大分肝煎りの連中が蘭亭曲水へ水を求めに出かけ瓶詰めにして持つて歸つた話なども耳にしてゐる。この蘭亭行の記事は自分が嘗て東京日日に詳述し公にしたこともあり且つこの清明節の事からは縁が少しく離れるわけでもあるから省筆をしておいたのである。

十九 墓前に慟哭せるふたりの美人を見て

江南の清明節を記念すべく自分共は寧波の友人鄭君や若林君と慈谿の普濟禪寺に久しぶり定法大和尚を訪ねた。定法大和尚は見るからに高德圓滿の大人格者でその温容に接して談話を交へてゐる間できへもこちらのからだか溶けるやうな感じがするのである。折も折丁度都合のよい清明節の舊三月十三日にこの山門を訪ねたのである。山門の左右の壁に昔爲吳相宅。今作法王城。何公且敬書とある。禪寺は唐開成年間の開山である丈に由緒古く門内當時の歴史を語るに足るべき遺物もあり、自分は一年振りの約束をこゝで果しておかうと定法大禪師の前に篆書の大字を記念に認めたのである。又畫僧と談しあひ又清明の法會の儀式をも一同で拜するの好

機を得たのであつた。その上おまけにその佳節の爲めに特に用意せられた清明の料理（勿論精進料理）までも呼ばれたのであつた。他に檀家の善男善女たちも見えてゐたのであつたが、墨場の方が殊に賑ひ歡聲頻りに起ると云つた状態で自分は全く歸るのを忘れる位であつた。丁度その日のこと慈谿途上で村夫子然たる一老爺の杜少陵全書を吟ぜるものがあり、その音調抑揚がいかに面白い。そばに寄つて書籍を見るに大の木版本を繕いてゐるのである。

寒 食

杜 工 部

寒風江邨路。

風花高下飛。

汀煙輕冉冉。

竹日淨暉暉。

田父要皆去。

隣家問不違。

地偏相識盡。

雞犬亦忘歸。

とあるのを悠々と高聲で吟じてゐたのであるがその結句の雞犬亦忘歸とあるをそこで思ひ出したりした。しかし興は盡きず尙慈谿の山では蕨狩が出来ると兼ねて聞いてゐたので酔眼朦朧の目で後ろの山にしばし蕨狩りと出かけたのであつた。提籃に大分取つた。その分量の點よりも之を摘む爲め松山巒峰の間を上下した時の出来事の方が興が深かつたのである。慈谿の清明

佳節は江南春日の清游中でも最も特筆大書すべき日であつた。どこ迄も大童になつて蕨狩にはしやいでゐたが、やがて山門を辭し山をうしろに盡きぬ興を又の機會に残しおきそろく緑なす春の野の方へとそれく下つて來た。ところが、圃畔の小徑、白のスミレの咲き亂れてゐる所に指しかつた頃行く手の先きに墓陵の打ちつゞきたる所が見える。松がまばらに生ひ茂つてゐる。一筋しかない小徑を小溝に沿ひつゞ辿り辿りて行くところにか女の泣き聲がワイワイと叫ぶが如く唸るが如くに聞こえて來る。誰れ云ふともなしに、

一時は

「これは又いかに」

「どうしたのだらう」怪しむものもないではなかつたが、云ふ迄もなく、

「今日は清明節である」泣き女の出る日だ」。

と首肯せられる日であつたからして、こは慥かに墓參して墓前で泣き、慟哭をしてゐる女の泣聲であると判つた。この地方の墓は何れも丈高く家の形に作られたる煉瓦積みの建造物のみである。どこら邊りに女の姿を隠して泣いてゐるのか聲は聞こえてゐても所在が容易に判らぬ。

墓が所せばく立ち並んでゐる爲めに捜しにくかつた。捜し求むべき性質のものでは勿論ないがせめて遠くのところからでもその現場を突き止めたい気分も手傳つてゐた。ところが遂に功を奏して見つかつたのである。見ると二人の美人である。美しく着飾つてゐる良家の美人が下婢に澤山の銀の元寶を持たせて自分で腹をそれ／＼押へからだを振つた様にしていかにも苦しげに號叫してゐるのである。知らぬ者が見たならば野路で急に胃痙攣でも起して苦しんで泣いてゐる者だ位にしか思はれないだらう。しかしこは空泣ではなく兩頬に涙を十分に垂れ鼻汁まで交へて顔を汚くして泣いてゐるのであつた。自分共がそばに見に來たので一層ベストを盡してゐたものかとも思はれたが兎も角本式に泣いてゐた。勿論泣かんが爲めに清明節に態々そこ迄町から出かけて來たのであるからその目的を達するやうに努力してゐることは云ふを俟たぬ。葬式のとほ同じやうにどこ迄も號叫し色々亡くなつた人に對するグチを並べ諦めんとしても諦められない所以の心事を訴へてゐるのである。決して不自然にやつてゐるのではなく、心からそこへ行つて泣いてゐるのである。色々思ひ出し思ひ出し墓に縋がり之に手をかけかへてゐれば色々聯想からしてどうしても悲しくなり、熱い湯の如き涙も出て來るのである。元寶

を墓前で焚くにつけても香を焚くにつけても何にしても思ひ出されて悲しくなる。そして涙を出し號叫すれば精神的に幾分をさまる氣もするのである。併し支那の習慣としてこれは又一つには世間に見せておく必要もあると考へてゐるのである。節婦孝子はその點を烈しくやらなくては評判にかゝはると云ふ事情もあるのである。運河で見てゐた念佛の鵲首の船に現はれた情緒が之を見て一層清明節らしく印象を深からしめたのであつた。慈谿の山の蕨狩り氣分も定法大和尚に會つた靜寂圓滿の氣分も今こゝで考へて見るとどう云つてよいか判らなくなつた。先づしかしすべてこの清明節氣分と云ふもので概念的に蔽うておこならばそれでよろしいものとするの外はあるまい。又世の中のことには、はしやいで見ても笑つて見ても悲しんで見ても同じことである。靜寂も喜悅も號叫も虚飾も慰安もつまる所は遂に同一のところ歸着して了ふ。一片の氷心は玉壺の中に在る。永久、永遠と云ふ長久の思想からすれば五十年百年と云ふ此の世にゐる間の悲喜の心事もたいしたものではないと云へる。悟つて見れば何の事もない皆無に歸すると云へるであらう。

二十 支那江南和平氣分の體驗

民國の江南に見る清明節の情緒の話をかりて一種人生觀見たやうなところに話をおとしたやうになつたがしかしこゝにはどこ迄も支那の田舎の情趣は上海や北京の如き都會では經驗が出来ぬ。どうしても地方地方の情緒風物はそのところに自ら出かけて行つて實地に味つて見なくては判らない。人の話を聞いたり書物を見る文では徹底しない。理窟は判つても氣持がさどられて來ない。その香がわからない。その氣分が本當に判らなければ支那人一般の人生觀の奥深いところも判らない。宛もそれは自分の子供を亡くしたことの無い人には本當のその悲しみが判らないのと一般で、本當の慰安の言葉など出ないのが當然である。判らない人に限つて、子供を亡くした人に向かつての慰安の語に「悲しまなくともあと又すぐ出来るよ。若い間だから」など云ふ。これは癪にさわる語である。あとで出来ること云ふこと、今亡くした子供に對する悲しみと云ふこととは關係がなく唯々どこ迄もその亡くしたことが悲しいのである。埋め合はしが出来るから損はないよなどと云ふが、理窟や損得の問題ではないのである。そこが經驗の

ない人には判らぬのである。支那の田舎の情緒、江南の景趣と云ふものも實地にその呑みびりしたところを行つて味つて見たことのない人には唐人の詩以上の深いところは理解せられないだらうと思はれる。要は實地に行つて見てもらふと云ふことにあるのみである。自分自身にしてもこの江南の清明時節の氣持ちとその經驗の印象全部をそのままこゝに傳へることは傳へたくとも容易に出来るのである。意があつても筆が之に及ばないうらみがあるのである。

四 武漢三鎮赤ネクタイの童子軍

共產氣分の横溢して來た武漢三鎮の天地は從來の黃鶴一たび去つて復返らず、白雲千載空しく悠悠といつた悠暢な大陸氣分のよい所は全く去りて、青天白日旗大空に翻る未曾有の新天地となつてゐる。

◇

親しく武漢の街をあるいて見ると種々の時代の氣分を物語る新ポスターはあちこちと壁に掲げられてゐる。中にも中央軍事政治學校や國民革命軍學兵團の印行に係るもので面白いものがある。

一、繼續北伐工作完成、民主統一運動

二、革命者要能忍受目前的苦痛！ 才能得到永久的安寧！

三、鞏固革命的新根據地！

四、實現三民主義（民族、民權、民生）

五、促開國民會議

と云つたやうな五彩の美しい大きな宣傳ビラが澤山掲げられる。それらには又擁護國民政府とか嚴密黨的組織とか、擴大黨的實傳、又統一黨的指揮或は總能保障的發展なんて云ふやうな大文字が歌はれてゐる。尙此の種の立派な大規模の革命政府の宣傳ビラは自分ども武漢滯在中小山田侍從武官が、聖上陛下に天覽を請ふ爲めにとて集められ、時の海軍陸戰隊諸子の尙隨分苦心蒐集せられた物が五六十種に餘つて將來されてあるのである。これらはその何れを見ても最近武漢湖南湖北一帶の變つた社會革命の新現象が如實に物語られてゐるのである。一體この宣傳ビラに歌ひ出された文字とその氣分くらゐよくその武漢政府の精神とその目標、理想を物語つてゐるものはないのであるからこれらのポスターは實に貴重なものとなるのである。

武漢の天地は正にかやうである。四月の騒動のあの時分の光景は殊に慘憺たるもので物凄

く、従来の社會の秩序は保ち切れないことは勿論全然無警察であつたのであるから工場であれ事務所であれ銀行、住宅、すべて實に亂暴狼藉を極めたものであつたのである。當時のことで物語るべき挿話の多くあるうちでもわけてかの有名な泰安紡績の如きは最も振つて居る話があるのである。その資本家を葬り工場の機械を止め、そして工人が工場を乗取らんとするの氣分の横溢してゐたのであるから資本家は固より手の出しやうがなくなつたのである。

泰安紡績乗取りの時の手順は又巧妙を極めたもので先づ始は赤ネクタイの童子軍を會社工場の樞要な室に闖入させたのである。重役室であらうと社長室であらうとお構ひなしである。これは勿論かれらの濼踏みをさせてゐる丈のものであつて、あとから亂入して来る工人の行列群集はそこから様子を窺つてゐる。そしてやがてドヤドヤと無遠慮に這入つて来る。或は兵隊どもも劍突鐵砲でドンドン闖入して来る。いきなり會社幹部たちの椅子テーブルを押し強く占領せんとする。重役課長たち平素何でもない時は偉いが、かうなると弱いものである。弱いよりは怖い。何をされるか判らぬ。で室外に難を避けるのである。すると工人兵隊たちは之を口實に會社の連中は室外に出て之を放棄した、放棄した故に之を占領したまでのことだ。どことが悪いと、

逆振りが來るといふ始末。

殊に振つてゐるのはその工人たちはバツクにゐる總工會を力に頼み仕事を何一つやらない。それでゐて工賃だけはストライキをしてゐながら普通の額を平生どほり貰はうと云ふ。ところで滑稽なのはそこで働いてゐる電氣の方の係りの工人どもである。かれらは毎夜暗夜に點燈の出来るだけのことは仕事をしてゐる。そこを付け込みどころにして要求していふには、

「毎日ストライキで何も仕事をしない工人どもですら平生通り一日分を要求してゐるのだから自分どもかうして毎日働いてゐるものは何としてもそれらの二倍の賃錢を拂つてくれなくては云々……」

どうまい理窟もつけようと思へばつけられるものである、といふことが判る。これなどは寧ろ武漢の思想界から云へば當り前の常識であつて之を不當なりと考へるやうなものは間違つてゐるのだといふ風にあたまを改造してかゝらなくてはならぬのである。このやうな虫のよい事を押し強く権利の如く要求しそれで資本家をやり込める位のものでなくては武漢最近の流れに掉したものはいへないのである。これでは資本家側はとてもしや切れぬ。武漢の地に建築の竣

工を將に見んとしてそのまゝ立ちかけて抛かつてあるのは竣工まぎはにサボツて仕事の完成をわざとせず、そして完成を欲するならば莫大の要求があると聞き直る妻味を見せるといふ事實もある。

建て上げて見たところで貸し事務所でも貸家でも家賃など資本家たる家主に支拂ふ馬鹿があるかといふ調子であるから未竣工のアスファルト建の家屋も廢墟の姿してあたらそのまゝに抛かつて棄てられてあるやうである。

しかも資本家の財産は土豪劣紳の名で沒收せられる危険があるのである。今日工人側が自ら行詰り窮狀の極に陥つて來たとは自然の歸結で又道理上さうあるべきことだと斷案を下しても差支ないのである。

由來保守的の看板を取つてゐた支那民衆の舞臺面が近來よほどの新し味を加へ來たり、上海邊りには西洋婦人の間に随分ひどいモダンガールがオペラ・バツクを手にながら歩いてゐるのを見る。或は青年學生は古い孔子の教など口にするものは殆んど見えないで「マルクス」だ「陳獨秀」だ「山川均」だと云つてゐる。烈しいのになると「レーニン」の亞流にあこがれてゐる類の徒もある。

支那は農業本位の國であるに拘はらず、湖南湖北方面には共產思想の跋扈の爲め、地主の地面の沒收、土豪劣紳の殺害などが頻々行はれ、不換紙幣(中央銀行)の使用を強要し、大洋の銀の強奪を敢てしたり、階分極端なことをやつてゐる處がある。支那青年や南軍の標榜せる聲明は、實に人聞きもよく、又四百餘州を風靡するに最も適切なるものである。従つてこれは思想的には北方軍閥の方面の中へも深く侵入してゐる。南軍政府と武漢政府とは今日まで互に敵視してゐるやうだが、北軍を共同の敵としてゐる關係上青天白日旗の下存外以心傳心氣脈の相通せるものがあるらしくもある。この度、自分は廣東、漢口、上海各地を、砲火を浴びつゝ歩いて來たが、對日感情は珍らしくよほど緩和されてゐた、南京、漢口には空前の不祥事はあつたが、對日気分は對英のそれとちがひ、日を追つてよくなつてゐた。こんどの出兵は大分崇らるゝであらうが、この新しみを加へて來た民國の舞臺面に對してはよほどの理解ある接觸を保つてゐないときは、日本は國際上取り返しのかね破目に陥ることはないかと案ぜられる。徒らに新しい南方の舞臺を恐がつてゐる許りが能ではない。日本人は威張らずに同情を以てこの新局面

の理解に努める必要があると信ずるのである。

五 支那内地の汽車に乗りて

二十一 支那汽車に對する常識

北京の城内を散歩して居ると、よく目につくやうに路傍四辻の白ペンキ板札に横がきで「汽車慢走」

と楷書で黒く注意が煉瓦塀の高いところに掲げられてある。又西直門外や朝陽門外などのその城門を出たところの壁にも矢張り同じやうな「汽車慢走」の横書きが讀まれる。人馬往來の頻々な全く車馬織るが如き賑かなところで肩摩殺撃の文字通りのところである。その他にも尙一々その處は覚えぬが極めて狭い路次に近いやうな細い胡同の曲りかどなどには大抵同じ白ペン

支那内地の汽車に乗りて

キの板札に横書きで、よく目立つやうに

「汽車慢走」

と書いてある。北京語で汽車とは「自動車」のことを云ふのだと判つて居ない遊歴客からこの不思議な質問を受けたことは一度や二度でない。それと判つて見れば何でもない事である。それから北京語の火車が「汽車」のことを云ふのだと判つてしまへば線路の踏み切などに簡明な文字で以つてよく、

「火車小心」

とあるのも無論すぐ會得され別段人に聞くまでもない。こゝに表題の「支那内地の汽車」とは云ふまでもなく日本語の汽車のこと支那語で云ふ火車のことであつて自動車のつもりでは固まりない。

支那の汽車は日本の汽車とは乗り心地が丸きりちがふ。支那へ一度でも飛脚旅行をされた方は大抵経験されたことであらうがその之に乗らんとするときの気分も亦全然ちがふ。プラットホームの様子もちがふ。支那乗客の群があつた大きな荷物行李を持込まんと構へてゐる様

子からあの混雑振りには中々變つてゐて面白い。又その鐵路や鐵橋がいつも動亂戦争の爲めにすぐ破壊され不通状態に陥つたと思ふと出水氾濫の爲めにこわされることがあつたり又土匪の爲めに夜間の運轉が中止されたりする。又時には列車が軍閥の専用に占領せられて民人一般の拒絶せらるゝこともある。或はまた鐵道借款を起こして金銭は受取り乍ら鐵橋の基礎工事半ばにしてこゝに幾年遂に未完成のまま放棄せられ枕木レールを腐敗に委せてあるやうな事實もある。又鐵道固有の論を導火線に革命の叫びを武昌に擧げ一擧三百年の王朝を倒して民國萬年の天下を作り出したと云ふやうなこともやつてゐる。支那の汽車鐵路はよほど廣く支那社會の現状と複雑した交渉を持つてゐることが判る。されば此の汽車によつて現代支那の社會的文化の觀察も見方次第では如何やうにも向けられ得る。また見方によつては支那の鐵道ぐらゐ支那の文化を弄んでゐるものはないとも云ひ得るであらう。支那の人民殊に奥地の人民は鐵道によつてその文化の恩澤を受けてゐるが反對に又この鐵道の爲めにいつも惱まされ動亂なども便利にたやすく起されてゐる。支那民衆自身の幸福の爲めから考へて見ると果して鐵路は民に幸ひしてゐるのか禍をもたらしてゐるのかどちらとも云へないのである。

支那の汽車鐵路は平時事のない時であつても軍閥は常に之を利用して軍隊の輸送だの色々の事に使用しその動員令でも下した時となると殆んど一般には乗せなくなるから物の役に立たず全く軍閥の私有物の觀を呈して來る。さればいざとなれば督軍は此の汽車を抑へる。これ位強い事はない。一般は唯その列車のひまの時にお情けで乗せて貰つてゐるやうなものである。されば一ヶ年の中無事平穩に南北に快走慢走で往復の出來る月は僅かしかない。こは偶々旅行して見るとつくづく判る。流言蜚語で河南に發砲が始まつて危険だと云ひ、途中立往生をするだらうと云ひ、又山東臨城附近が又又物騒になつたなどと云ふ。京漢、津浦の兩幹線もいつも何かのケチがつけられてゐる。流言蜚語は氣にするにも及ばない。けれども流言でなく實際に列車の中止となつて來ると旅行日程のあるときなど萬事窮して了ふのである。

民國十四年の盛夏から仲秋にかけては北支那一帶近來での珍らしい大降雨、出水氾濫がつゞき、北京天津間でさへ廊坊驛以南の鐵路の左右は見渡す限りの田畑が太湖水郷と化し農家は船を漕いでその湖上を渡つてゐると云ふ状態をも目撃した。桑田變じて太湖となり見るも哀れな景趣を呈してゐたのであつた。國土が大きい丈にいざ出水となるとその範圍も亦大きい。線路

の崩壞も従つて亦甚大であることは實に止むを得ない。そのいくら甚大であつても、天災地變の方は没法子であるから諦らめるの外ない。しかし地方軍閥の私有物同然に弄ばれてゐる支那の汽車は一般國民の交通機關と云ふ意味がよほど輕んぜられてゐるわけである。もし日本の汽車の如きつもりで以つて支那の汽車に乗つたら失望することが多い。支那の汽車はどこでも支那式の汽車である。

支那式の汽車とは一寸一般に説明しておく必要がある。

その一 支那では正月の元旦の朝は汽車も朝寢坊をして走らない。正月に敬意を表して休業をさせる。無論驛の改札口にも係員の姿は見えないのである。肝腎の本尊が動かないのであるから出る者も出なくてよろしいわけである。

その二 特急の快車とは名ばかりで時には定刻から七八時間も延着する。發車する時は正確でも途中偉い人や軍閥、動員などの御都合次第でどうにでもなる習慣であるからいつ迄ホームで待つてゐても來ないのである。待ちきれず試みに驛長の室へ這入つて聞いて見ると「電話がまだ來ないから不_レ一定」の一點張り。喧嘩にもならぬ呑氣な話であ

支那内地の汽車に乗りて

る。

その三 途中下車などをしては大抵その切符は無効。

その四 支那服でも着込んであれば格別。さもないと護照(旅券)や行李を改めに來る兵隊がどやどやと踏込んで來る。そして訊問をしたり書き付けたりする。「一塊錢も出さなければ見せてやらぬぞ」とこちらから太く出ると却つて小さくなるくせに。

その五 列車乗込みのときの混雑さわぎと云つたら日本ではないことである。

その六 可なり大きな手廻りでも故障なく列車内にかまはず持込める。矢張り支那は大國で鷹揚で有りがたい。こせつかない。

その七 食堂のめしは列車内どこへ迄でも三度三度運んで來て呉れる。又頼まなくとも熱い茶壺と茶碗を必ず持つて來る。時に又熱くむした手拭を持つて來る。しかし營業は分業で別々であるから心付けを一人にひとまとめにして渡すとあとの二人にはやらなかつたことになる。めいめいの株になつてゐるので中々の仕事になる。

その八 支那の汽車は廣軌で大きい。列車の等級は、頭等(一等のこと)二等。三等四等。貧

民車などある。頭等は白切符でなく多く黄票である。貧民車は上海などのやうに苦力の乗客を多く乗せるもの。この外に牛馬豚を専門に載せるものや貨車がある。

その九 驛に驛名の立札が少ないので車窓から「こゝはどこだらう」と判らぬ場合が多い。

乗り替前など殊に小心。

その十 下車した驛で惡車夫から包圍せられ叫び倒されるので肝を冷やすことがある。

その十一 大抵は借款鐵路であるから車票は中々高率である。

その十二 支那の汽車は日本のつもりである間違ふ。北京から發車奉天へ、又北京から漢口或は上海へとその終點まで乗る場合ならよろしいが途中からキャッチして乗るとか云ふ時には時間のだらしない爲め夜中などかなり困らされる。又惡車夫からつけ込まれると馬鹿を見る。

支那の汽車に對する常識として上述十二個條を數へて見たのである。尙これは各地方の線によつてそれぞれ特色を異にしてゐるが随分慣れない方には何れにしても骨の折れるものである。慣れて了へばひとりほちで乗り込んでも支那人の乗合つたものを話し友達にして徒然を慰

支那内地の汽車に乗りて

さめることも出来るし地方の人情風俗珍談、旅社、地理のことなど何でも話題をつかまへることが出来る。慣れないものは周囲の人を皆泥棒小盗兒のやうに心配して心にゆとりがつかないのである。汽車旅行のやうな楽な旅行に心を碎くやうでは内地の田舎に奥深く這入つて驢馬旅行や馬車や民船で動くことはとても出来ないであらう。

二十二 山西省の太原に行く汽車

最近自分が支那内地を汽車で動いた處は山西省の田舎である。山西は太原から汾水を徒ちで涉り晋祠古唐村から天龍山に登つたのであるがこゝの太原に出るまでは例の正太鐵路即ち正定府と太原府を結び付けた線である。北京から本線で南下し自分は石家莊で乗り替へて此の鐵道によつた。先年北の方、大同府雲崗石佛寺に遊んだときは大同までは柴溝堡、陽高、王官屯、聚樂城、大同と乗つた。最近のは、正定、石家莊から獲鹿、井陘と行つて、娘子關から山西省に入り河岸の景趣を賞しつゝ、遡り平定、陽泉に至り、峠を越えて洞渦水に沿ひ、壽陽、榆次の諸驛を経て太原府に入つたのである。此の山道の正太鐵道は大同京綏線や京漢線のそれと異な

り廣軌でなく狭く出来てゐる。狭軌であつて日本の列車に似てゐる。佛蘭西人の車掌が出て來て親切であり京漢線の列車内とちがひ、こじんまりしてゐて気分がよろしい。

すべて汽車のうちの気分と云ふものは、汽車の窓から見ゆる光景の移りかはりやその情趣によつて大いに色着けられるものである。山西の天地は空氣が乾燥してゐて山野に潤澤が乏しい感じのする所であるが幸に獲鹿、井陘を過ぎ娘子關の省境ひに這入ると水流の谷は深く汽車は鐵橋を渡りて截ち切りたる如き斷崖を背景に暫し十五分間計り停車する。給水の爲めらしい。その間支那乗客どもも下車して構内を散策しあたりの景趣を賞したりなどする。汽車は出る。同行の諸豪、高橋亨博士始め西田、加治の二君と地理を語り名産の山西炭を語る。汽車は平定、陽泉、壽陽へと進む。西田君、

「陽泉のこの邊りの石炭は質がよい」

「この邊で噸當り四弗ぐらいのが北京に來ると二十弗からするのですから」

「全く汽車の運賃を拂はされると同然で」

驛前に山と積まれた光澤のよい所謂山西の煤炭を賞美する。

支那内地の汽車に乗りて

山に野にまばらに見ゆる古木は多く楡の木である。河沿ひに並木の打續けるは大抵楊樹のやうである。楡と楊柳の外に變つた樹は餘り見えない。この楡の多い爲めに、誰であつたか、「壽陽の先きの楡次縣の地名は全くこれから出てゐるのだらう」など口ずさむものもあつた。

鐵路に沿ふ河は黄河の支流汾水のその又支流である丈に濁流の處が多いが時にはまた多少の清流の處も見えてゐた。しかし大體山西の山河の色は潤色は乏しく秋の黍の野にふさはしい黄土色のパノラマであつた。右方や左方の山麓自然の洞窟が上に下に散在し、洞穴の入口之に廂を付けたるものもあり、廂のなくいきなり洞口より奥に通ぜらるしきもあり或は堂々たる山西建築の前方半分だけを築き上げあと半分は洞窟そのまゝ利用せるものなどもあり、中間式のものもあつて何れも立派な穴居生活をなせる穴居の民の住宅である。

「珍しい太古の民の光景である」

「四川省に入ると三峽の奥に穴居の現状を見、河南に又澤山の穴居を見る」

「穴居なる哉。穴居は山境の一等自然的な住居法である」

など穴居を評し乍ら窓から穴居の民の洞口より出入する姿を見つめる。狗や鶏や豚などの洞

口の前の楡の木蔭に中よく戯れてゐる平和の空氣がなつかしく感ぜられる。

かれこれ、石家莊から八時間も車中或は語りつづけ或は居眠りなどをしつゝ揺られ揺られて午前四時頃太原こゝも潤澤の乏しさうな驛頭についていたのである。

かやうにして車窓からをちこちに指願し得る山西の景趣に話題を探りつゝたはいもなき談柄を進めてゐた間に、古河の西田善藏君から情緒濃やかなる話が出て吾人の眠むけを覺まさせたのであつた。西田君の云ふに

「壽陽の山のかなたに山西隨一の日本の女丈夫あり、とある支那人の許に嫁つぎ既に十七八年の星霜を経てゐる。」

「山西の山めぐりをする日本人の時に之を訪ふ時は狂せんばかりの喜びで下にもおかぬ持てなし振り。」

「一つ天龍の山ごもりを了へたなら歸りには汽車旅行をやめてその山西隨一の處の門を叩いてやつたら……。」

「いつも大和民族の海外發展は男子よりむしろ……。」

などと民族延長の功勞者の談に時ならぬ花を咲かせたのであつた。かうした工合に支那内地に這入り込んで見ると往々にしてかゝる雲煙萬里をかけ隔てたる天涯の秘境に貴き日本人の先驅者の足跡を印してゐることを耳に挿むことがあるのである。四川の三峽に分け入つたときもあそここの激灘急流を突破して溯り行く民船の裸體曳子（一艘の民船を八十人百人百五十人と多勢の力で竹綱を曳き上るのである）のうちに日本の隠れたる男子の居たことを聞いたこともある。これで日本人には存外奥深く隠れたる進展力を潜有してゐるものであるかと云ふことを考へさせられるのである。でもかう云つた事實を發見する爲めには或る程度まで汽車なり汽船なりを利用してあとは全く轎か馬背かで秘境に分け入らなくてはならぬのである。

自分共、山西は太原晋祠の奥、天龍山に分け入り千四五百年の古の六朝北齊の石窟石佛の洞穴を探險に出かけて行つたのも、北京から太原までを汽車便によりそれからあとは急峻な山羊の險路を攀登した次第であつた。かやうなわけで支那奥地の汽車は更にその奥を窮めん爲めの方便として之によるを眼目とすることが必要である。汽車のある處を態々驢馬や轎子にするのもよほどの事のない限り出來ない話である。

北京の北部山境に萬里長城八達嶺を見に行くにしても多くは北京西直門から南口、青龍橋まで汽車による。あとはいくらもないからそこからは轎か驢馬かによるを普通とする。しかし更に少しく歴史的の事をしらべ又あの朔北氣分を山境に味はつて見ようとするには、

南口から驢馬か又は駱駝に乗り、親しく舊道のゴロゴロ石のひどい處を行き有名な居庸三關を見て、之をバスし路傍の駝店に時には立寄り蒙古ドロンノールに往復してゐる駝群の休憩してゐる大きな情緒に浸つて見なくては判るまい。

とかやうな注意が出来るのである。それを唯道中は單に殺風景だとか居庸關の四天王、六國文字もつまらぬなどと云つてしまつては折角の史料を棄て、行くわけである。殊に度々遊歴する機會の少ない諸君は是非ともこれら田舎の道中の見る可きものを切り棄てない方法をとらる様に注意したのである。八達嶺を見乍ら居庸關を見ないで歸る人は實に多い。誠に惜しいものである。

支那の汽車でも京漢線や津浦線はその列車そのものに何だか一種の暴力的氣分と云はんか又蠻的氣分と云はんか。之に乗り込む時の刹那に既にその混雜さ加減から來る異様の聯想を感ず

るのである。京奉線にしても北滿の線にしてもこは同じことである。然るに上に述べた山西の正太鐵路ばかりは如何にも平和な穏かな氣もちを感じる。田舎の奥地に入る汽車だけに靜かな平和な空氣が充ち充ちてゐる。又之が設備も極めて簡單でよろしい。

正太鐵路の列車は田舎汽車だけに一二等は一函のうちに收められてゐる。そして一等と二等とは唯入口に「頭」の字と「二」の字のちがつてゐるだけで殆んど同じことである。全くそれ丈のことであると思つてゐたがしかし氣がついて見ると自分共の二人宛掛けてゐるソーファーには白のレースの飾りがついてゐる。之と床のオイルクロースに古い緞通か何かが布いてある。これ丈のちがひであつた。隣りの二等の室には紳士らしい西人夫妻の客が見えて、その次のセコンドの室にも今一人紳士の西人がゐた。

北京で最初、觀光局へ山西往復の二等の票を依頼しておいたらどう聞きちがへたか頭等のに間違へてこしらへて了つたのであつた。が今、白のレース飾りに凭たれたり靴の下に緞通が柔かにしつくりと來ると云ふその氣持ち、事實はどうでも唯それ丈の氣分で頭等の函に満足を買はされるやうに出來てゐるものだなど解釋するものもあり大笑ひであつた。しかし時々三等に

わり込み山西の田舎風俗そのまゝを丸出しにしてゐる手合を相手に又例の情緒の味ひを語らつて見るのも興味の一入深くなるわけである。折にふれ、場所次第ではそれも足まめに演じてゐた。ともすればその間又案外彌次喜太式の好材料を得ることもあるのである。田舎の奥地の汽車は相當又その地方のローカル・カラーがあつて面白いものである。

六 北支那の田舎の情趣

二十三 山西の田家に見る耕讀第の篇額

支那の田舎の漫遊の途上眼を悦ばすに足りるものは随分色々見るのであるが、陳氏家廟とか邵氏宗祠とか云ふ祖廟並にその牌樓の文字を見るときは何となくその祖先の遺徳が偲ばれてゆかしく感ぜられる。わけて又「進士第」など云ふ正楷の堂々たる黒塗りの扁額でも仰ぎ見る時はその家の徳澤敦厚の趣を感じるやうな気分になる。學人秀才ではそれ程にも感じないが、しかも學人だつて支那の田舎ではたいしたものゝあがめられて居るのである。進士や學人の家であれば必ず門に之を掲げて大いに家門の誇りとなすこと南北各地その人情の機微なる所は顯著

に汲みとられるのである。

浙江寧波の范氏の第の如きその名は四庫全書に因縁深き天一閣の芳名によつて、周く天下に知られてゐる家柄だけに范正格、范光文、范從立など歴代の名聲に伴ふ佳句が、

第一、書城巨觀だの

第二、人間罕觀だの、又

第三、天下藏書此一家

などと随分褒めちぎつた大文字で掲げられそしてその奥に、

第四「世進士」

どこれは必ず忘れないやうに立派な扁額を懸けてゐるのを見るのである。こは北京あたりでも南京、武昌いづこにも數多見出されるのである。

晋の故地山西の田舎の方にしても、此の「進士第」を見ることは少なくない。しかしかゝる進士第の文字は自分にはこれ迄到るところで大分見てゐるので眼に慣れて了つてそれ程に珍らしくも映じない。どうせその家には例の進士及第の勅書、五色の綾の辭令書の古卷なども寶藏せ

られ、家傳の名卷を自慢のたねにしてゐるにきまつて居る。家にとつては、大變な重寶であるからその祖先の歴史に箔をつける物語りとして力説さるゝのもその筈であると考へられるのである。

ところが山西省の田舎、汾水の西方邊りにあるいてゐると今一層面白いものがある。幾度か自分は山西の田家にゆかしい文字を見た。そは、

「耕讀第」

と云へる文字が即ちこれである。尤もこはたまに楚の國の故地湖北地方でも見たことはある。しかしこの山西にはひどく各處に見るのである。耕讀第の文字は直ちに吾人のあたまたにその退耕録の著述にでも從事せるものあるを聯想せしむるのである。單に「進士第」とあつたり「世進士」とあつたりする扁額なんかよりは數等奥ゆかしい感じが喚起せられる。

折しも自分は天龍山麓、エウトウ窯頭の山里にて十七八頭の驢馬の明礬搬出の壯觀を見たきり蒙古路を歸路につける駱駝の行列と行逢つたり、みちみち色々の場面光景にあひ、又山羊の群の間を破りて山下にくんだり、いよいよ山境を出で、古唐村は紙漉き場、漆喰壁の幾百となく

南面して散在せる清楚なる村にさしかゝる。

すべて此のあたり山西省中でもその田舎氣分のたつぷりあるところである。一度山郷を出てしまつてからは古唐模範村を始め幾十百個村を包容するといふ山西大平野のパノラマ東方見渡す限り一望千里、天空開豁なる北支那古國の情趣を漾はせてゐる所である。

やがて晋祠の勝瀛、萬古流芳、惠流三晋の神祕境に向かつて歩を進む。晋祠の村の氣分はその勝地、仙閣、泉聲の神祕境に古柏の老樹の森々として生ひ茂れるものがあり、何となく神さびて古國の情趣を漲らせてゐる。村外れの田家は故宅舊家らしきうちが打續いてゐるを眺む。何心なく之を見ると總角をおきたる唐子の少兒を抱いてゐる山西美人の門側にたゞすめるものが居る。是は固より田舎のことゝて纏足をしてゐる。いかにも落つきのあるゆかしい田舎の景趣であるわいと思はず自分は又不圖振り返つて見る。すると門に高くまた肉太の、

「耕讀第」

の文字を入れた古色蒼然たる扁額の懸かつてゐるのに氣がつく。思ふに此のあたりでは此の文字の扁額を讀むことは一再ならずである。むかし私かに公職を退いてから田舎に歸り靜かに老

いを養うてゐる氣分を此の三字に現はし出慮を促されて辭退するの意をも標榜してゐるつもり
なにはあるまいか。その邸宅の門聯に、曰く、

門無俗客

讀古人書(又は友天下書)

なんてあるは實にあたりの景趣とよく調和して人生のうらやましい處を行人に見せつけてゐる
やうにも取られたのであつた。不惑、天命を知るの域に達してゐらるゝの讀者之を見て如何に
感ぜらるゝや。自分は此の「耕讀第」の文字から意味深長なる或るものを聯想してやまないの
である。

二十四 太原に於ける閻錫山の風韻

山西の、都太原は目貫きの柳巷街、チンクウシヤン晋谷香に身を寄せてゐたら、閻督軍の
祕書、謝維楫先生が見えた。謝先生といふは在留の及川君と老朋友でもあり、旁太原の風物な
ど話とぎに來訪してくれたので色々便宜を得た。

數回去徠してゐるうちに督辦にも一度敬意を表しに行かうとて一緒に督辦公署に出かけ閻大
人を訪ねたのであつた。例によつて衙門は巍々乎として聳えたる大建物である。謝先生を東導
に天井の高い督辦の大官廳に通される。

山西は有名な模範自治省として十八省中隨一の省と目され、支那本部切つての評判の名督軍
の控えてゐる所である。つい此の頃の山西のたよりによると閻督辦もどうやら多年執つて來た
政治上の中立態度を破つて青天白日旗を掲ぐるに至つた。又將來歲計經濟の確定を得る爲めに
省民の好意に訴へ無擔保の公債八百元とかを募集せんとしてゐる話や、山西の好路面に去來頻
繁なる自轉車に對し毎月五十仙の新税を課する事にしたとかいふ話なども傳へられてゐる。恐
らくこれは萬止むを得ず實行することになつたのであらう。民國の十四年九月自分共の督辦と
あつて閑話を交へたときの言葉のうちにも頗る味のあるものが多かつた。今その話題にのぼつ
たものゝうちから二三を摘録して見ると、かう云つた風韻を認めることが出来る。

その一 山西の山の色

「山西省を遊歴してゐるといふと大分山の色が綠を呈してゐるところの多いのは隣接の他省

北支那の田舎の情趣

と變つて見えますね」

とこちらから督辦に話題を持ちかけて見る。すると閻錫山のいふに、

「我が山西省では毎年三月チンミンチエー清明節の佳節には一人一木主義を實行し省民は必ず各人植樹記念として之を楽しんでやつてゐるやうなわけでありますので……」

といふ耳を傾くるに足るべき話である。又續いて、

「太原では高等農林學校も經營してゐれば殖林のことには殊に力を入れてゐるのです」とつけ加へてゐたのであつた。

その二 紡績の詰

「上海や青島あたりではよく紡績のさわぎがあつて労働問題が持ちあがつてゐるが」と遠廻しに話をかけて見ると、督辦には、

「山西省は榆次縣に紡績公司があり目下一萬三千錠だけの工場を有してゐる現状である。棉花などの關係上尙それ以上殖やせないでもないが、それ以上生産せしめては省内生産過多の虞れがあるので制限してゐるやうな譯であります」

といつてゐた。

または太原城内のあらゆるすべての電柱へもつて行つて種々な格言を残らず一本々に書き付けてあるのですべての住民を學生と見てその心得べきことを目から這入らせるやうにしてゐる場面なども見られるのである。こゝに閻錫山の周密なる注意が見出される。

その三 山西富豪の郷土

「山西は支那でも有名な銀行家、豪商連の輩出するところと聞くが、山西はどの地方に多くありや。その富豪の情態はいかに」

とたづねて見ると閻錫山、

「山西の富豪は太原から南、大谷縣に多く、その生活は田舎としては珍らしく、ギヤマンの瓔珞をさげた麗はしい寢臺を使つてゐる家庭などもある。山西旅行のついでに大谷へ赴かれれば如何、ぜひお勧めする」

との懇なる物語りもあつた。

その四 山西の人口の増減傾向

北支那の田舎の情態

「山西はかうして各地方あるいて見ると人口稀薄のやうに見られるが、戸口調査などの方面は定めし苦心されての事だらう」

と同情して問ひを出して見ると、督辦には、

「山西全土の人口は千二百萬餘といふことになつてゐる。が連年の飢饉、出水、地震などの爲めにとかく人口は減じがちで困つてゐる。東京でも先年の大震災のときには……」

と同病相憐れむ話が持ち上がる。自分は、

「なるほど東京の震災後同じ年にまもなく、山西黄河の東、苛嵐縣に大地震の災厄のあつたことを承知してゐる。そのとき四千五百人からの死傷を出してゐた慘狀を日本で傳聞してゐる。明代にも嘉靖年間であつたか大地震があつた。古くは春秋戰國の世にも度々あり、どうも山西と日本とはよく相似て居る所がある」

と目と目を見合はせて語り語り笑つたのであつた。

かくて督軍との對話は次から次へとあつて盡きないのである。同行の高橋亨博士、西田、及川加治の諸君からも色々興味深き話題が出てゐた。自分は孫傳芳や薩鎮冰に會つたり、盧永

祥を訪ねたり、劉存厚、鄧錫侯を訪うて面談をした時を思出しこゝでは別に文學風流の話をしたわけではないが、何となく靜かな落ちつきのある錆びた低い口調で以て滾々として盡きないこの督辦との話は打切りたくない氣分がしてゐたのであつた。

「國立山西大學や高等工業、農林、女學校から文廟、博物館などへ巡遊されるなら今から、案内を申しあげるから」

との事に一同その好意を受けてのびやかな半日の清遊歴訪を試みた次第であつた。

二十五 山西省汾水濁流のほとり

太原で閻錫山督辦と閑話を交へて居るうち自分共は晋祠から天龍山へ分け入る豫定なることを語つた。ところが督辦はいふ。

「晋祠までそれでは自動車を使はれたら如何です」

「督辦署から一臺出させますからどうぞそれへ」

との芳情であつた。秘書の謝維楫君は、早速あとで道路の方を調べて見てくれた。ところが謝

先生はいふ、

「晋祠の道は例の立派な自動車道ではあるが汾水の長橋が先日の出水氾濫で一部分落ちた、めドライブ不能」

といふことが判つた。それでは没法子であるからとて折角の乗り物をば断るの止むなきに至り、インビンリウクワン迎賓旅館から洋車(人力)を傭ひ同行の連中と共に城門を出て城壁を右に見て往還を西行すること十支里。やがて濁流汾水のはどりに來たのである。

洋車は千里の沃野の展望のきく自動車路からそれて降り、土砂深き河原の廣々としたところをぎこちなく曳かれて行く。木橋の桁柱の三四支里も列べるを上に仰ぎ見てかなり先まで進む。別段に見たところでは橋の流れおちてゐる所などなきうで完全な如くに見えてゐた。でも人馬は皆自分共と同じく橋下の河原に降り之を絡繹として去來してゐる。のであつた。いよいよ橋の盡くるはづれの處近くまで行くと、成る程、橋の手摺りから桁から柱まで、すつかり流されて切れて居る。汾水の濁流のところを視るとそんなにすさまじい勢ではないが、その當時は此の千里の廣野を流れ流れて來た水勢だけに定めたいした出水であつたであらうといふ

想像は十分につくのである。

今でこそ大分水は引いて居るが、まだかなり水勢は強い。これを洋車で渡るのも少々危険のやうな氣もする。けれども見ると彼岸の河原から水をこぶりこぶりと徒渉り馬に激勵一番、支那では珍らしく、馬方の叫び聲がしきりに聞こゆるのである。自分は、之を見ると、

「來るわ、來るわいくらでも、うま車は向ふから」

とその揃ひの大貨物を積み込み、汾水渡りの光景を呈してゐるのを見ていつた。車上には各揃ひの赤旗を押し立て群がり涉つて來る、その旗の文字は

山西省硝磺局軍用硝車

と云ふ十字が儼めしく記されてゐるのを見る。太原の督辦署さして山地の方から運搬して來るのだなといふことが判つた。ところがそのうちの一臺が樁事を勃發してゐる。といふのは馬が水中にへたばり坐り込んで了つて馬方のいかに叫んでもおめいても、鞭打てどもいつかな動かうともしないのである。硝車は中流に水をかぶるのみで哀れにも立往生の態。いかに氣の長い支那の馬でもこれには大分閉口の色を見せてゐた。

又その馬方といふ馬方は又とない天下の奇觀を呈してゐる。どういふことかと云へば水中ツボン褲子に鞋襪の類一切濡らしたくないといふ處からすつかり面々下半身を裸體にしてゐるのである。支那の土俗男は猿又なんかは西洋と同じく全く用ひないのである。で、全くの丸出しなのである。それが揃ひも揃つてよい恰好して手綱片手に一生懸命汾水濁流の波の間を徒ち渉るといふバナラマなのである。かうした眺めは支那でなくては、わきでは見られぬ光景である。

珍らしい光景だからといつて之に見とれて居ないで自分共も早く何とかして彼岸に渡らずばならぬ。どうしたものであらうと思案の末銘々の腕車の後ろに結び付けてあつた紅い夜具類は車上に積み水に濡れない丈の用意をなしたへそして銘々は頑丈なる車夫の背に負ぶさつて渡るの外はないのである。たゞ車夫の脚の力に一身を托するの外別に妙案もあるまいといふことになりまかつた。一運托生だ。山西の車夫と流れれば共に流れるのだ。汾水は勿論黄河の支流になつてゐて洛陽の奥陝西省は潼關の北なる韓城縣で黄河の本流に合してゐる河である。流るれば末は黄河の土左衛門となるわけである。

かうしたいやな想像をして見るのも支那式に面白いことであるが、さらばと云つてあの硝車の馬見たやうに水中にくたばつて坐り切りになつて了ふのもよい加減なものである。やおら、さきに車を彼岸にやつておいて河心の瀬踏みをさせるがよいとてよく當たらせておいたのである。それから安全な水底の流れの急でない處を選びえらび水中模索をやらせ乍ら生涯滅多になり此の山西車夫の背にしかとしがみつゝ猿のやうな恰好で辛くも中流どころまで渡つて来た。若しや底の流れが速ければ河床の土砂は崩れりたられて急に深くなる恐れがあるからドンブリ行けば共流れになるわけである。

「全く串談ぢやない」

と云つて見たところで支那の大河はかうして、ときどき旅客にいたづらをする。否大陸生活の深刻なところをしみじみと體驗させるのである。その一ヶ月前には自分は山東省はチミ即墨行きに際しその即墨河の氾濫を渡るときやはり馬夫の——背にしがみつゝ、同じやうな體驗をさせられたことがあつた。少しは慣れては來てゐるが餘り氣持のよいものでは勿論ない。

汾水の中流に來て殆んど目の舞ふ計り滾々と濁流の動いてゐる水面を見ると無意識的に言葉

が出る。車夫の耳朵に近く口を持つて行つて云ふ。

「車夫君、しつかりしてくれ」

「ゆつくり足に力を入れてね」

と頼む言葉にえらい力が這入るのである。丸で念佛でも唱へてゐるやうな鹽梅でその時は一處懸命に之を繰返したものであつた。

先軍浙江省は紹興の田舎、晋の王羲之の遺蹟蘭亭に曲水の迹を訪ねに行つたときにも蘭亭境内へ渡つて行かうとする時肝腎の石橋が落ちてゐた。その後その橋も修繕せられ架せられたのである。水は清冽時候は極寒のひどいときであつたのであるが矢張り此の時にも驢馬屋の馬夫の背に負ぶさつて涉つたのであつた。或ひは又山東は曲阜の文廟に参拜に出かけたとき例の泗水を涉つたのであつた。がこのときは馬車のまゝ水を渡つたのだつたから何の事はなかつたのである。人の背に負ぶさつて支那の河を涉ると云ふことは交通の開けない本當の片田舎だけに何分に覺悟をしてゐなくてはならぬのである。自分は度々の經驗を経てはゐるものの此の時ばかりは全くどうなることかと少なからず案ぜられたのであつた。濟んで了へばあとから大きな

事は云へるが濁流の中心をゴボリゴボリと涉つて行くのも人間として相當修養になる。修養を通り越して全くヒヤヒヤさせたのである。

然かし兎にも角にも自分は幸に事もなく車夫の背を力に上手に足場を探り探りして涉ることが出来た。車夫も足もどがしつかりして餘程自分に安心を與へてくれたのであつた。そして岸に達して見ると車夫どもは殆んど支那服の上半胸部までズブ濡れに濡れてポタリポタリと水の滴つてゐたのは可愛相であつた。他の百姓たちの一緒に水を涉つた連中も同じやうに濡れてゐた。涉つて了つた連中ども三三五五に集つて山西訛りの田舎辯で何事をか聲高くしゃべつてゐる。そこへさしてこれから涉らうとツポンの褲子を脱いで仕度をしてゐる山西省の硝車の連中ども、残らず皆河原に出て今も涉らうと仕度くができて振り出しのまゝで集まつてゐる。その身構への無邪氣さ加減と云つたら太古堯舜時代の擊壤の歌の唄はれてゐた時代を聯想せしめてゐたのである。同行の一人は大分あとから矢張りこれも車夫の背にしがみついて涉つて來たのであるが無事に着くと背からおろされるなりいきなりニコつき乍ら自分のところに來て

「後藤さん汾水濁流渡りのあのしがみついてゐたよい恰好をちやんとカメラに納めましたか

「何れ焼増しをしたら東京へ山西の記念に贈りますよ」

といふ。よい所をやられた。一つ引伸ばしにでもして家族のものに見せてやりたいと思つた次第であつた。かくて一行は皆流さるゝ憂き目も見ず立往生もせずして幸に車夫のおかげで安着したのであつた。河原の珍光景には苦笑しながらしばし見ぬふりをしてゐたが誰れ云ふともなかなたの濁流を顧みつゝ、

「あれあそこにまだ先きの馬は硝車と共に水をかぶつたまゝ流れのまん中にへたばつてゐる速く何とかしなくては、一晝夜もああしてゐたら馬は水中に死んでしまふであらう」

「馬が動かないと来てゐるのだから人間ではどうとも仕方がないのだらう」

「いつ迄見てゐたつて始まらないが實際可愛相なことだ」

と役に立たなくとも同情の言葉を残して汾水の河原の沙上を上り一行は再び車上の人となつて棗や桃を擔げる農夫の往來繁き自動車路を眞一文字に西、晋祠の方へと向かつたのであつた。かくてその後幾日間か一行は聖壽寺に宿をとり天龍山中の山籠もりを濟ませ晋祠から田舎が夕馬車に分乗し又と棗の老樹の並み木道から自動車路の新道を歸り來る。その夕くれ千里の廣

野は秋の夕焼けでもあるか。黄金色の夕照を受けて麗らかに見えてゐたのもつかの間のこと。やがて天地は暮色蒼然たる暗幕に銷されんとするの時刻になつた。太原郊外の山は中腹に暗みを破つて二三の燈火のきらついて見え始めた。秋の夕ぐれ丈に急に足もとが暗くなつて來た。馬車の中から

「あまり暗くならないうちに汾水を涉らなくては危険だぞ」

「全く危険だよ。この間見た馬のやうになつては」

「でもあれから下雨はなし一日一日と水は減る一方だから今日あたりは減水し少しはよいだらうよ」

「だつてさうばかり安心は出來ない。馬車を急がせなくちや。早く早く」

などと車中このガタ馬車の動搖のきついのも忘れて了つて呑氣な話をかはしてゐたものの氣はせいて來たのであつた。中にも高橋大人はひどくその四望暗くなつたのを氣にしてゐられた様子であつた。

二十六 日暮れて路遠く暗夜又汾水を渉る

汾水の空は暗くなり夕暮れの靄雲全くとち罩めて渡江には危険だななどと云つたつて馬車うまは何も感じない。馬は固より大陸の産ゆる香氣に出来ゆつたりしたものである。太原への歸路は登山の初めから汾水が氣がかりであつたから豫め晋祠の馬車屋チュワンイーテン忠義店の掌櫃にその話を十分含めておいたくらゐである。面倒の起らないやうにと人力を豫め早く用意させるとに云ひつけてあつたのであるが、處がその邊に大變手違ひがあり順遅れに遅れて了つた。その結果汾水の徒ち渡りが夜さりになつてしまつた。河水の徒ち渉りも二度目丈に大分慣れて來てゐるとは云へ、疲れた揚句に夜る河を渉るのであるから少々冒險なわけである。考へて見ると少々危ぶない氣もちもするのである。

かうなつた以上は出来る丈け汾水のほとりまで馬を急がせるの外はない。ところが馬も馬だが、馬夫も馬夫だ。本當に全く大陸的だからゆつくりしたもののである。でもまだ馬の方は四脚で歩いてゐる丈に人間の足なみよりは何と云つても速い。ところが馬夫と來ては莫迦に足が

おそい。足のおそい癖に馬までを成るたけゆつくりあるかせようとして手綱を引くその頻りと手綱を強く牽くのが一度や二度でない。強くひつ張るものだから馬は得たり賢こしとさなきたに速くもない足並みを一層ゆるめて運ぶのである。

「一體どうしてそんなにしきりと手綱を引くのかい、成るべく急いで汾水まで行つてくれな
くちや」

「承知しました。その積りで」

と馬夫の返事だけはよいが矢張り足の方はのろくさい。馬までのろくさせてゐるのである。

「馬夫君。お前さんも馬車に乗つてしまつた方がよい。こゝへこの通り横乗りをして」
とやつた。そうすればそれ丈重くはなるわけだから馬も牽きづらくなり遅くなる。實に骨の折れたわけだ。他の今一臺は疾くに既に先きに行つて了つた。今は影も形も見えぬ。夕ぐれのもやの裏に消えて了つて殆んど五町も十町も先きになつてゐるのであらう。

「馬夫君。汾水は大丈夫かね。大丈夫渡れるかね。こんなにくらくなつても」
といふと、馬夫は、すましたもの、

「大丈夫ですよ。どうにか濡れませうよ」

とおちつき拂つてゐる。之を耳にした同乗の高先生自分よりも一層と氣をもむ。

「あちらの山にも麓の方にも大分明かりが見えだした。たしか太原の城内はあの左方にあたる筈だ。夕ぐれの雲煙に包まれて全く見えないが、もう大分近い。」

「汾水はあの手前だからもうわけはない」

高先生は車上、山西の秋のたそがれの風に少々涼しさを感じて来た。「襯衣一枚ではちと涼し過ぎる」など獨りごとの如くいふ。

「前の馬車に上衣を脱いでおいてあるが、こんなにどうも肩が大分離れて了つては仕方がない。しかしどうも肩が冷へる」

と馬車屋にその話をする。馬夫君、足もとはおそいと云はれて居るが聲は中々よい聲で高い。眞一文字の影を汾水の方に向かつて聲の限りを張りあげ、宛てはなけれど靄霧たるもやの中に放送すること五回七回。曰く

「晋祠から出た馬車屋君、お客の上衣がそちらの車に這入つて居るから少し待つてゐてくれ

ねいか。よう」

幾度呼べど叫べど何の返事もない。よほど離れてゐるらしい。高先生、しかたなくなり、

「返事がなければ自分はおりてこれからテクルの外ない」

「ガタ馬車で揺られてゐるよりか。テクつた方がました」

とテクリ始めて見たがそれも路が何分遠いのでいくらも續かず又車上の人となり思ひあきらめられたと見える。こんどは先年の秋の夕ぐれ自分が山西の北部大同石佛寺の歸途城外で行き暮れて困つた時の話題をとり、時間つぶしに色々物語る。異國情緒はこの夕ぐれからあきの旅路に却つて味はれるものである。又學界に時めく人々の自由批評など罪なき無駄話をかはしてゐるうち星の光りも薄ぼんやりとして淡く、天地はあやめもわかぬくら暗みに罩ざされてしまつた。その黑暗みの野路を縫うて兎も角もたどり行くうちに遂に汾水のはとり例の廣い土砂の河原に到着したのである。あたりは眞暗らである。馬夫に聲をかけて、

「どうだい、どうどう到了。大丈夫かね、眞暗らだが車からおらないでこのまゝ濡れるかね」

「ぬぬの馬車はどこいらであらう。今一つの馬車は居ないやうだね」

など語り合つてゐるうち、馬夫は水標でも心得てゐるものの如く、餅屋餅屋で、危ぶないとも何とも考へてゐないやうである。しばし瀬踏みをしてゐたと思つたらすぐいきなり、

「大丈夫ですよ」

とばかり、ゴブリゴブリと馬車を汾水の河中に乗り入れる。勿論からだは車上に飛び乗つて、

「お持ちものは天井の方に、膝もとは特に氣をつけて頂きたい」

と云ひ乍ら馬を勵まし手綱をひきつゝ苦もなく暗の流れを乗り切つて對岸に達することが出来たのであつた。そして城外島の中の暗み路を辿り城門に来ると警備の兵隊から誰何せられる。しかし名刺さへ出してやればそれで安心する兵隊の心理とそここの處の呼吸を呑み込んでゐるのでわけなく之も切り抜けられたのである。これで目出たく一時見えなかつた先きの馬車とも一緒になることが出来約束の馬車屋の前に一同相揃つて、こゝに到着、洋車に乗りかへ、久しぶり迎賓旅館の宿へ無事歸りついたのであればこれ晩の九點鐘であつたであらう。

二十七 人煙遠き山西の幽境山寺朝露の情趣

人煙稀なる幽境に遊び千古の神祕を探り高山流水を友として山僧と茗茶を煮るの詩趣は登山癖に没頭せる自分共には又格別の快事と感ずる次第である。山中の幽居は身を浮雲の外におき柴門に俗客なく洵にあたまの轉換には何よりの處である。聯の文字も澁く又なつかしく、

書卷莫教春色老 柴門不爲俗人開。

簾前春色應須惜 身外浮雲總是閑。

山西省天龍山の秘境聖壽寺の境内は支那内地でも殊に森閑としてゐる。北齊時代の佛教藝術は後方の斷崖に高く東西にバツクをなしてゐる。嶺南に、江南に、四川に、又齊魯に、北京に太原にと各地を遊歴して來た身心を時にはかうした神さびた千有餘年の苔むす石佛の間におき山寺の溪流も遠き山門内に起臥しその幾夜さかを仙人生活で過ごして見るは一にはたしかに腦袋の轉換になり又身の淨化にもなるわけで人知れずこれを趣味深く感じてゐるわけである。

山寺の客堂に假寝の旅枕は夜半一種云ふ可からざる幽玄の氣分に打たれるものである。自分は一倍深山の美感に打たれる傾を持つてゐる。これは巴蜀の夜泊に渾浩流轉の水聲を聞いたり、江南の農家に夜半犬の遠吠を聞いたり又北支那の片田舎に驢馬の亡國的に嘶く長音を聞い

たりなどした時の感じとは全く今はその感想情緒を異にしてゐる。山門に入り門に俗客なく幽居の情濃やかなる山僧寺男を相手に山寺生活の味を體驗すると云ふことは、たとひ數日の山ごもりにしたところで大變身心の淨化の上に清香な氣分の吹き込まれる如き感じのするものであつて何とも云へぬインスピレーションを受けるのである。

夜は毎晩その晝間の石窟巡ぐりで疲れてよく眠る。太原の迎賓旅館から運んで持つて來た煎餅の如き薄き布團にくるまつて正體なく夢見る餘裕もなくぐつすり休息する。その代り朝は存外早い。山谷に響き渡る梵鐘の響にふと眼をさます。山の輪廓もまだうすぐらく靄籠たるもやに罩ざされてゐるころである。一行はまだよく眠つてゐるのを獨りそと起き出てよい氣分で門外に手水を使ひに行く。堂を出て小門をくぐり四天王の門裏中庭を聖壽寺の碑を右に見て通りぬけ唐もろこしや白菜の畑の一隅茅廁に用足しをしてそれから先きの溪流にまで小徑を辿るのである。かうして顔を清めに行くにも四五町はある。よい運動である。溪流には石上に寺男の備へおきたるものにもあるか半麩けの茶碗がおかれてゐる。ほのぼのと明かるくなる山寺の檐端の反りを振り返り打眺めながら齒磨きを使ふ氣分と云つたら何とも云へぬよろしい、北

齊の千佛の斷崖は溪流の上小松原の急峻な坂の上に高く懸かつてゐるのがまた東光を浴びる時刻にならないので薄ぼんやりと蒼紫色の中天にかゝつてゐるのである。

やがて寺の方を振り返つて見ると山門のよこのくぐりから朝霧を破つて丈高き寺男の畑をしに行く姿して二頭の驢馬の足音も高く山畑の畔に沿ひつゝ出かけるてふ山寺のもやの朝景色。小杉未醒畫伯の描寫にでもよくありさうな情趣である。しばし自分もその畫中の一人となつて此景趣に見とれて居た。やがて、「お早やう」とこちらから言葉をかけると寺男の方でも「お早やう、えらいお早いことですね」と挨拶してゐたがやがて又朝霧の中へと姿を消して行つた。

溪流のそばの洗鉢に十二分の山氣、靈氣を感受し了つてそろそろ寺内は客堂の方へと歸つて行く。小門をくぐり堂前の小祠葡萄棚の下に差しかゝると山門隨一の禪味濃厚にして脱俗氣分のする老僧空秀和尚に出くはした。七十幾歳の老軀をひつさげ祠堂と云ふ祠堂、佛庵をば念佛の聲も低く口の中に唱へながら朝拜の線香を一々手向けて廻つてゐるのである。その禮拜の恰好から錆びた念佛の聲全く北齊の石佛を思ひ出させる。實によく三昧に入つたものである。そ

の小首を右に少しくかしいで口角も開かず吃もり吃もり尻あがり念佛を唱へてゐるその歸依振りは堂に入ったもので山西は愚か天下の奇觀である。自分も和尚に伴して各祠堂に巡禮し、その朝拜の古例を實地に見また之を研究することの出來たのは幽境早起きの御利益として授かつたわけであると有りがたく感じた次第であつた。

七 支那地方文化の情味

二十八 地方文化の情味

日本や歐米諸國の如き名實共に法治國のシステムで以つて外交其他萬般の事を處理してゐる所は爰に問題としない。老大國支那の如く列國のシステム協定を時には無視し、或は窮屈がり何時でも脱退超越せんとする大きな氣宇である國に在つては、他國人がその常識を超越し、支那一流の特色に對して最も深重な研究を遂ぐる必要がある。普通支那なればこそ人々も許し中國人自身も許して居る慣習にはなつてゐるが、之に對しては列國が總掛かりになつて此の謎の本體を突止めておく可きであらう。

支那には儒教もあり法律もあり、人間生活に最も徹底したる理解もある。それで國內の秩序が立ち、社會も持てて居る。形式儀禮文字の上では國の制度文物のよく備はつて居る如く見え居る。けれ共、實力のある者は何時でも天の命により、民衆のバックを得れば、革命を起こし、國の轉覆を圖つても、人心の收攬には差支を感じることもなく、後世の歴史も之を許し、認め高祖とか何とかの尊號をさへ奉る。實に自由な囚はれてない國である。法を無視し、法を超越する如き行動をするなどは何でもない事である。其教義に囚はれシステムに據つて行つてゐるやうに見えてゐても、急轉直下に、之が無關係の態度をとり、之を無視し、敢て又之が敵對の行動をとることさへある。而かも天下は之を怪しむものさへない。今も其の實例は乏しくない。支那古來の戰畧兵法に於いても、その股肱の驍將が反旗を翻し寢返りを打つて君を窮地に陥れ、自らその位地を狙ふ筆法の如き、これ亦日本武士道を背景とする吾人の常識では先づ推測を許す能はざる點である。歐米にも日本の武士道に劣らぬ洋式の武士道のある如く支那にも亦支那式の修道の大本がある。支那の修道の大本は日本や西洋のそれよりも遙にスケールが大きく且つ融通力も廣い。日本の物尺を持つて行つた位では測りきれない。常識以上の支那式の

常識を持つてゐる。全く桁ちがひの桁である。

支那民族に認めらるゝこの大きな桁は獨り國內の事ばかりでなく國外、國際的の事を取扱ふ上にも及ぼしてゐる。その時の當事者自身に在つては勿論、法治國並みの考を以つて之に臨んでゐるであらう。又あるとしておくを禮とする。しかし更に大きく考へて來る時は勿論、そこには尙大いなる餘地がある協定事項を履行するに際しても「對內的に出來ない事情があつて履行したいのは山々であるが」と云ひ出す。ところで其履行が出來ぬからとて、非常手段に訴へて出かける事も出來ない時勢になつてゐる事は百も承知してゐる。それ故對外的の方面の事に於いても支那人はその最も自由な態度を取つても構はぬと云ふ腹をきめて居るであらう。又どれる丈どるが支那三千年來の慣用手段でもある。今更日本人や歐米人から小さいヒントを得させてもらつたからではない。先天的に外交の事にかけては特に練れたあたまを持つて居る。列國は手を代へ品を替へて小さい常識で之に臨み、ヤン／＼云つてみても本尊の方で動かなければ其れ迄である。

支那社會の世相と國情の奇想天外的なるは、支那各地の戰爭に名將離合の常なきあの實情に

ついで見らるゝなら最も明瞭に判る。論語に教ふる真正直な道德觀念も、兒童を初めに仕付る時の作法の型の如きもので、支那の社會は三千年逆の手、裏の裏四十八手の複雑な方畧をのみ事とし之が實現に人傑は苦心焦慮してゐるのである。されば支那外交の舞臺も常に此逆の手、裏の裏の方面の事にのみ注意を拂ふべきは云ふを俟たぬ。之が又支那に對する常識でもある。支那の人士は、平素その非常に細かい處まで拘泥して法典にのみ據つてゐる俗人かと思ふと急轉直下に之を破棄して、仙人に早變りをし、天に嘯き笑つて他を云ふと云つた味のある態度をとり得る民族である。日本人は法の爲めにいつも苦しむが、支那人は法から脱出して、獨り自ら自由の天地に洋々として楽しみ、躍り舞ふの呼吸を知つてゐる民族である。日本人や列國の人士が支那の檜舞臺に乗り出し、むきになつて國際協定事項に汲々と努めてゐるのもよい。互に樽俎折衝するのもよい。しかしその努力が全部無効にされてしまふか、それとも無効も同然になるやうな運命に抛つておかれるやうなこともあると云ふ事を、豫め含んでおくことは無駄にはならぬ。なぜかと云ふと、妙な言ひ方だが、それ丈海千山千であつて確かに支那の方が桁が大きいし、尙もつと人間としても又民族としても永久的の底力を有つてゐるから其れ位のこ

とはやりかねないのである。

支那民族の外交心理の奥底に、かう云つた意味深長な、而かも沈重な動かす可からざる情緒の存してゐることは、近來幾分専門家以外のものゝ間にも理解されて來た事と思ふ。しかし日本は氣のつきかたが遅い。一般にはまだ歐米萬能の空氣が漲つてゐる關係上、支那の事なんかは歐米の智識さへあればそれで推して行ける。泰西の常識さへよく練つておけば支那人相手の舞臺ぢやもの。多寡が知れて居る、歐米の檜舞臺を踏んだ力倆で北京に乗込めばたいした事は無いさ。と云つた様なかぶれた考がまだ、相當に抜けないのである。かやうな程度に支那を軽く見、又支那人を安く見、支那の舞臺と云へばいつも片手間か序での仕事位にしか見て居らぬのである。中には北京にやられるのを不名譽のやうにつらく思ふものもある。日本では北京の舞臺ぐらゐ今日外交上重大視すべきところはないのである。ところが又其北京ばかりに重きをおいてやつて居れば、支那の問題は片付く如く手軽く考へんとする連中がある。北京の卓上でさへ協定を遂行すれば、支那四百餘州の事はと云つた空氣が今尙相當濃厚なやうである。これは元來東京にその空氣が漾うてゐるのであるが北京に行つて見ると一層よく判る。北京のバツ

クとなれる舞臺は今どこであるかと云へば、北に赤露の大活舞臺があつて南には四百餘州各省各地がある。北京を中心としたあらゆる支那の北部一帯、西部一帯に、南部は云ふに及ばず、東部がまた現在見る如く極めて重大なシーリアスな場面となつて來た。

日本の外務當局のところへは固より北京の當局者の處にしたところで、支那各省各地方の有意義な實情はどれ丈調査報告が來てゐるか。餘り深入りすることは避けたいが、併し事の茲に至つた因果關係より見るに多くは自ら招いたも同然の始末になつてゐるやうに見える。結果から推して見ると有意義な調査研究視察がまだく非常に足りなかつた。又外務省的の單調な型に嵌つた觀察法でのみ行つてゐた。外務以外のものゝ目で見ると、更に高所大所からのゆとりのある、そしてもつと多面的の深刻な觀察も出来るのであつた。當局者から採點させると型に嵌まらぬのでよい點はつかぬかも知れぬ。然かし支那民族なり支那人の常識、支那人の桁なりを測つて行く上にはもつと適當な多面的な大きい尺度と觀察法をとるの必要があつた。自分は支那各地總領事館、領事館に知己も多いし、懇意な諸賢も多い。その最善のベストを盡し尊きエネルギーを消耗してゐらるゝに對しては多大の敬意を拂つてゐるとに於いて人後に落ち

ぬつもりである。然かしそのビジネスの忙殺と人員淘汰の爲めであるか、或は所定地域の餘りに廣大に失せる爲めか、實情調査の完全を期することは並大抵でない事を察してゐる。實地巡遊の暇さへないとも聞いてゐる。従つて地方々々の實情の調査は意の如く手が届き兼ねてゐる。北京の方でもこれ亦餘り自分は深入りするの資格は持たぬが如何に地方の情報が來てゐても地方の色彩情味に就いてそれ程の理解が湧き起つて來にくい事と思ふ。それもその筈であると思ふ節も段々あり、それに就いて興味ある實話も耳に挿んでゐるが具體的の挿話はこゝに避けておきたい。

地方の情報と共に、その情報の調査の必要な位の事はどこでも判つてゐる筈であるが、事實閉却される傾きを有つてゐる。閉却されぬまでも重きをおかれてゐない。或は理解がつきにくい。ヤン／＼云つても物に順序があると計り、たいした事ではあるまいものごと目に見えてゐない事文に軽く見られてゐる事は事實である。地方にも、北京にも確かにその事實はある。従つて又東京にもその事實があるらしい。吾人は事の起つてから驚くよりも、豫め未然に知り、又その徑路の方向を調べておくならば、某大官が豫定の運命に深入りしつゝあることも推知し

得られる。支那の事件は十中八九まで豫測を許さぬと云ふ。それにしても總べてが皆突發ではない。突發の前にアンダー、カーレントの探れぬ者は少ない、型に嵌つた一本調子の舊法をどらず、色々支那民族性の呼吸を見るに足るべき味のある方法をとるならば、アンダー、カーレントの調査も出来る。それは政局や軍事の方ばかりでなく、思想の方面でも、生活の方面でも、藝術の方面でも、すべて民衆的の側の新しい觀察が出来る。當局者が政治の方面を見るに、政局の側のみから行く方法の最早や時代おくれであつて、今少しくゆとりのある藝術なり、思想なり、生活の情味なりの方面に着目し、この時勢にあつた方法によつて支那各地方の深刻な情報を集め、又之を重要視するの態度になつてもらふべきであると思ふ。

赤露が支那各地に手を伸ばし、情報を得るに内地各地方の道教の方面にそれ／＼人を派し巧みなる赤化運動の方法を講じてゐる實況を最近の奥地視察で見聞したのであるが、かれらがその民衆に食ひ入つた方法に着眼せること丈は、確かに支那民族を理解してのやり方であつて、支那に對しては列國よりも一步進んだ新方法のバイオニアであると思つた。自分は獨り外務當局や、又それに系統を引いてゐる人士に卑見を述べる計りでなく、一般國民、支那問題に興味

をもてる人士に向かつて都會地偏重の舊弊から眼覺めて、支那は各地方をも重く視るべきことを主張したのである。續々支那事情の視察に出かけらるゝ貴衆兩院の諸賢に於かれても此の點については深く考慮を煩はしたいと思ふ。

北京南池子で瀬川淺之進翁との談話中に翁の述懐があつた。瀬川翁は云ふ。

「これ迄何十年と支那人を見るにいつも外務省の役人と云ふ目ばかり見て居つた」

「こんどかうして文化事業の委員の心もちで見ると實にやさしい味のある大きな民族である事が判つた」

「いつぞやも後藤君、或る日の朝支那紳士の處を訪ねて行つた處が大客廳の時計がとまつてゐる所を一人の客がじつと仰ぎ見た。すると悠然とかまへてゐた主人公は大きな聲を長く曳いて、

スキ チョウ ラ睡覺了(ねむつてゐるのだ)とやつて笑つた。また時計もねてゐるので針が止まてゐると、かう云ふ氣持ちで風韻のある所を云つたのだがこゝは支那人でなくては言葉に出ない、わたしは感心してこゝだと思つた」

瀬川翁にしてこの感想を聞くことは誠に面白い。味のあることで支那大官訪問の場面が目に見るやうである。翁の感心された姿も今尙髣髴として現はれて来る。こは外交官が支那人心理の情緒を理解するとの必要なるを事例によつて説かん爲めライチユエン瀬川大人をかりて来て茲に挿話としたのである。

二十九 各省慣習の尊重を度外視すべからず

日本では支那の社會の氣持ちも、國民の思想感情も左程よく判つてはゐないから大抵の事は日本なみの常識で推測をしてゐる。そして何でも日本人の考へてゐる通りに行くべきものだと何心なく思ひ込んでゐる。例へば今、日本が外國から或る問題を持ち込まれて東京で協定が出来、早速實行をするになつたとする。すると東京に於て當局は之を各地方官憲に達示する。着々實現されて行つて中央にその成績が擧がつて來るのが一々見える。この筆法で支那は老大國であつても之と同じやうに行くだらう。支那だつて中央政府もあり、地方に任命された役人もゐる。この通り行かぬ理窟はないと單純にかう考へて了ふ。單純に組織的に考へて、それで

日本式の事を計畫する。又會社を作る。當てはきつと先方から外れて來る。

支那が列國で考へてゐる如く他國の常識なみに行くものなら、時局の安定は疾くに得られるわけである。一般日本の常識家などは、支那のことは北京でさへ取極めをすれば、それで各地方へは自ら傳はりもするし、地方は不平もなくその事がシステムティックに行ける筈であるときめてかゝる。例へば北京では文化事業の事もきめられた。北京と上海に場所を作ることになりまつた。すると廣東の方から、なぜ南支を抜きにしたかときつて責めて來た。來たのが當然である。北京できめる時は、全體の支那があたまにあるやうでも、その實なかつたのである。無視されてゐるのと同様におかれた南支は、そこでいきり立ち、その後日本から學生團をやつたり、講演者に行つてもらつたりして、今の處それが治まつてゐる。最も早く開け又最もあたまの進んだ廣東でも、北京から見ると度外視してもよい位に取扱はれてゐたのである。日本の當局の方でも大勢の上から、廣東をそれ程尊重してゐなかつたことが判つたのである。かう云つた考は當局ばかりではない、日本の總體に亘つて廣がつてゐる。とかく地方の意思を尊重するとか、慣習を考慮するとか云ふことは抜かつてゐることが多い。これと云ふが一々地方々々に

當たつて見る事も困難であるし、又地方の考は都會に集まり、都會で事をきめるなら自然の地方の人も納得了解するであらうと云ふ位の日本式の常識で行くのである。日本のやうな國の小さいまとまりのよい國土ではさう行くのが當り前である。之に反して支那は國土の廣さからして既にちがふ。地方的人情も丸きりちがふ。利害問題も亦ちがふ。習慣もちがふ。省によつては互に敵視してゐるやうな處もある。北京できめた事となると、意地にも反對すると出るものさへある。

北京は中央だから、時には地方に諮らずしていきなり決定してもよい事もあらう。事後承諾をさせる文でよい事もあらう。併し乍ら北京中央政府が苟くも外國を相手どつて地方に關係深き協定を遂げて行かうとする、茲には豫め萬般の對內的の事は話もついで居れば了解もできてゐなくてはならぬ筈である。所がそこが支那當局者に望みにくい點である。又そこを突込んで苦しい處であらう。土臺はまだ踏み固められてはゐない、基礎はいつもぐらぐらとぐらつてゐる。むしろ列國の取きめた力で、つまり外からの方法で以つて對內的の事を制し壓へ、セメントで形をつけて行きたいと云ふ腹があるやうに見える。それ故國內の基礎のできてゐない

處へ指して列國からも色々条件を持ち込む。協定は相當の處で成立する。支那側も面子が揚がつたとして喜ぶであらう。日本や列國も努力の甲斐があつたとして満足するものもあるであらう。しかしその協定に取りかゝる前に、支那當局は勿論、列國側に於いてももつと平素から基礎の安定如何、基礎の價值如何、その實施に至る前に地方で崩壊さるゝ心配はなきや無効に歸する恐れはなきや。地方の習慣を破壊するものでなきや否や、地方民衆の反感はいかゞなど一々その實際に就いて手をつけなくては嘘である。北京政府を信用してゐるからと云へば吾人亦何をか云はんやである。固より北京當局の面子を重んじて之に花をもたせる事は禮としても大切な事である。けれども事實問題として見る時は更に一層深刻なところまで立入つて各省の習慣を重んじ、その習慣に本づく實施の制度の改善廢止の立案を必要とするのである。然るに習慣を度外視し、たゞ中央で案を立てて之を協議するだけでは實際問題の情味から離れて了つて、謂はゞ卓上協議の爲めのペーパーの上の協定となつて了ふ虞れがありはしないか。

厘金税問題の北京關稅會議に上程せられたるの時に當たつて、自分は當時新聞紙上に於いて卑見を述べ、世論に訴へてもおいのであるが、その後つづいて西洋に於いても、支那に於いて

も、アグレン氏の意見の公表を見た。裁厘の問題は今日支那各省の全體に亘り實にゆゝしい大きな財政問題である。その裁厘問題と同時に之が補填の財源も共に論議されたのであることは知つてもゐるが、しかし支那各省各地方の實況に照し考へて見て、裁厘の問題は消費者側から云ふと、支那内外人の別なく均しく熱望してゐる。所であるけれども地方經濟の慣用手段としての此の都合のよい厘金局の財源なるものは、ここ三ヶ年や五ヶ年の間にバタリと廢止ができてやうな性質のものであらうかどうか。別段今自分は之れを獎勵して更に多くとらせる如き非人情的の論を考へてゐるのではないが、少なくとも吾人はこの習慣のあることを考慮しなくてはならぬと主張するのである。かの阿片吸飲の禁止、又その輸入禁止の問題はあれ程表面八釜しく云つてゐるが、裏面には滔々として行はれ、今や殆んど公然の秘密となつて行はれてゐるではないか。阿片特賣店の數も上海で見ても年々殖える一方であり、罌粟の栽培も益々盛に殖えて來た。それからとれる稅額も非常な激増である。名を拒毒會にかりて之を禁絶せんとするの叫びもあるが、こは支那一流の宣傳プロバガンダに過ぎぬ。阿片栽培の如きは四川貴州雲南三省の如き寧ろ大いに獎勵して地方増稅の道を之で圖つてゐる位である。實に支那のことばか

りは何が何やら全く思案の外である。ひとり厘金稅ばかりが正直にバタリとやむと云ふは受取れない話である。阿片には今日幾多の代用服藥もある。四川、叙州、重慶あたりにはいくらもそれを賣つてゐる。而かも尙揚子江上流地方は、その航行し來たる船を見かけて公々然と阿片の黒いのを暖かくねり合して乗客に賣り付けに來てゐる盛なる光景を自分は目撃した。裁厘が行はれるとしても各地方の官憲はその填補の額としてよこして來たものは之を當然の役得として納めて取つて了ふであらう。そして依然厘金の方はその方として中止をしないどころかどこ迄も絞り取り、その地方官吏が自分の地位を勝ち得たときの投資額を取り返すつもりでなしくづしに取込むであらう。その邊の懷勘定は淡白なる日本人の常識では一寸意識されない點であらうと思ふ。

かやうにして支那各地方の飽く處なき取り立て方は止まないであらう。然し各省地方厘金の誅求がかりに止まつたとしても、一方軍閥の連中が名を保境安民にかりて臨時軍費の徵收をやつてゐる此の習慣が各地に盛である。之がその代りとして愈々益々猖獗を極めることであらうから苛斂誅求は何れにしても遂に止まりさうにも思へない。物品の側から云ふと、どのやうに

しても當然絞り取られるやうに社會が出来てゐる。かう云つた風に民衆に理解なくして民の膏血を絞つて飽くなき方法は勿論禁絶させるに越した事はないのであるが、それは覺束ない。先づ各省自身にそれ〴〵人傑を得なくてはならず。同時に中央政府にも眞に實力實權を握れる大人物が現はれなくては始まらぬ。列國の全權使臣を請じて色々協定事項の進行を圖るもよし。しかしながら之が實施期に當つて眞によく實現し得らるゝの見込み成算がありや否や。支那當局の胸のうちを先づ同情するのであるが、同時に又自分共支那民衆の心理習慣人情を見てゐるものゝ目からすると、この厘金廢止が首尾よく行はるゝ如きとあらば煙草酒などの輸入釐澤品に増税さるゝのである。自分は支那當局並びに列國全權の面子に對し、こは成算なしとは斷言せぬその代りに影の薄いこの協定にたづさはり、之に骨を折つてゐらるゝ諸賢に甚大の敬意を拂つておきたいのである。

支那は往年の華盛頓會議に顔を出すやすぐ「支那とは何ぞや」の一大奇問でどぎもを抜かれ、又厘金稅廢止のお土産案を歸りにもらつて來た。今各省各地から久しく財源の一つとなつてゐる厘金方法を撈ぎ取つて了ふ如きことは、第一の禍を地方から除かんとして却つて第二第

三の禍根を醸成するの機會を與ふることになりはしないか。これは豫言でなくして支那民衆の爲めの憂國の叫びである。

三十 朝野名流の巡遊を促す

こゝに當局とは必ずしも外務當局に限定せる意味ではない。何省の大官にでもよろしい。或は又必ずしも現職劇職にあるものを無理に立たせやうと云ふのでもない。志の經綸にあるものは現在の利那的些事の推移よりも對岸大陸情勢の視察の價値を認められ、須らくその巡遊の機を逸することのないやうに願はるれば幸である云ふことを述べたいのである。

近くは臺灣統治上の事について見るも、大官が一度なりとも對岸福建省方面の巡遊に出かけることは第一親交の上に、第二に産業の上に、第三教育の上にと種々政治以外の方面からも頗る有意義の事と考へられるのである。更に福建から廣東に又南洋に馬來にと之と相互的交渉を保ち、將來の福利増進を圖るべき方策を立つる事は大事なことであるが、その之に強い力を與へんとするには相當大官級のもの或はその各方面の専門家の巡遊視察が必要である。これは誰

しも氣付き又よく云ふ所の事柄でもあるが、さてその實行を見ることは割合に困難である。多くは下級官吏をして短日月、出張させるぐらゐでおしまひである。それも豫算を楯に多くは視察せしめない状態にある。然らば民間側の方でドン／＼出かけ行くものがあるかと云ふと、こは一層少ない。日本人はともすれば室内にこもる性癖を有し、出不精の方である。種々些細な口實をたてに出かけることを好まない。云ひ譯を列べる計りで事實出かくる者の誠に少ないのは遺憾である。

日本内地では當局の經綸、殊に昨今の如く萬事行詰まりの状態にある日本内地の經綸は一方内地を顧ることを怠らぬと同時に、常に對岸の支那並びに南洋方面を考に入るべきは輓近識者の思潮である。直接植民地思想を鼓吹するの考でないが、今日の文部省側のこと云へば兒童青年の教科書讀本を繕いて見ても實に支那南洋の事となると力が込められてゐない。その量に於いても西洋の事のみが多く挿入され、東洋方面の記事は貧弱である。親善を口に説ける支那方面の記事に對してその親し味の情が缺けて居る。のみならず又全く熱がない。これらの缺點は大官當局者自身に一度の巡遊もない事を示すものであつてあまりに冷淡である。従つて痛切

なる面白い大陸的資料とか、又支那を本にして見たる東亞の形勢とか、支那人の生活の事情とか云ふ生きた方面の教材は殆んど取入れられてゐない。かやうに日本人の最も深く注意して居るべき管の隣邦支那のことの殆んど閑却され重要視されてゐないとは残念なことである。今や支那は之を外國一般の遠國の中に入れて了つて通り一偏の外國同様の程度の教へ方などで満足すべき時勢ではなくなつて來た。その特に専門的の事情に迄深入りせしむるの必要は認めないまでも、文部の大方針として特に支那の事情に親しましめ、支那を見ること眞に心から隣邦友國を見るの感じを抱かしむる所まで進めなくてはなるまい。今日の教へ方では支那は全く歐米などよりも尙遠國なるかの如き程度の取扱ひ方であつて、その内容の方の程度を見ると、その地方民衆の生活状態衣食住のことなど固よりよく示してゐないのである。日本のこの教育法を高所大所から見るときは、甚だ時代おくれの觀があると評せざるを得ないのである。

日本の學校では最近の支那青年が孔子教を棄て、露西亞の共產運動に化せられつゝあるもの多き事などを勿論教授するの要はない。しかし乍ら日本の内務當局者邊りでは上海や北京の如き日本の表支關たるべき大都會に於いてその急激な變化を示し、今や益々共產黨の色彩を濃厚

にしつゝある現下の光景など對岸の火事としてばかり見て居られまい。毎日の如く船便によつて上海から日本へはバンフレットでなり、書物でなり、書類でなり、又その去徠せる所謂新人の口によつてなり、火の手はすぐ移つて來るのである。當局は日本の無産黨を解黨せしめたのは法に照らしての事であらうが、それにしても對岸の新しい思想状態は甚だ留意すべき程度にまで進んでゐることを諒解せらるゝや否や。上海、廣東、天津の労働問題は單なる勞資爭議の問題ではなく赤化の糸を引いてゐるものゝ後ろに控えてゐることは知る人は知つてゐる。思ふに日本の社會の根柢は健全であつて大磐石の上に宮ばしらを太しく建てた形であることは信じて疑はぬ。けれども時局を思想問題の方から見る丈でも内務當局者否國民の中の志あるの士は對岸支那の新人並に思想問題に就いて視察研究を試みる丈の價値は十分にある。文部内務の當局は此の重大な又或は意味に於て日本の最も新しい左傾思想などと深い交渉のあるべき土地である支那に對し、研究を怠らないやうにしておかれたいのである。

然し自分がこゝに特に當局大官の支那巡遊を慫慂する所以のものは文部内務の側よりも外務當局その人の徹行的漫遊である。固より肩書を取りはづしての旅行を意味するのであるが、支

那各地の事情は從來の如き唯ステーションの下車とホテル滞在の連続旅行と云つたやうな出張視察から一步を進め、苟くも支那人の經濟生活民衆生活に觸れた深い情味のある所を見る事につとむ可く、又在留日本人の實情や生活の狀態活躍の情味などに就いても大局の上から眞に理解ある觀察を遂げてもらはなくてはなるまいと考へる。

最近外務の畑を見ると次第に従前の所謂古い支那通と云つた肌合ひの人はお拂ひ圖となり、殆んど全く影が薄くなつて來た。僅かに囑託で残つてゐる者に其名残りを窺ひ得る程度になつて了まつた。そして新式と云はんか、學校出と云はんか、歐米よりの轉勤者と云はんか、かゝる色彩の連中を以つてせる濟々多士の支那舞臺とはなつた。時代の推移は又如何ともなしがたい。思ふに古い通人には又弊害の伴ふものがあり一得一失であるとは常に聞いてゐる。しかし支那の事は世界獨特の呼吸を要し、又支那人は世界の外交舞臺に他に類のない心理状態をもつてゐるものである。されば此には世界に通ずる多くの人材を要すると共に又子飼ひの生え拔けの支那通で一生終始してゐる者の大いに必要であることは云ふを俟たぬ。

今日支那人側の外交舞臺に文學者がゐるかどうか勿論それは少ないであらう。少ないからと

云つてもひと通りの事は大抵心得てゐるのである。支那は文學の國であり、文章の國である。又風流韻事の國である。日本人のこの道に通曉せる古い時代の通人は一朝一夕の俄か仕込みで出來たものではない。それが泰西の事情に通ぜぬとか老齡とかの理由で五十臺のものを多く引かせて了つた。銀行、會社、書院側に居られたもの迄も大抵隱退の身となつた。國民外交の必要を益々感じて來た今日では出廬を促したい適材適翁が空しく今や國寶を抱き乍ら、好きに禹域を去つて故國に閑日月を樂んでゐるとは、洵に惜しい。從來支那の外交舞臺にありて日本人が特に西人と違つて優越の趣味的交りをなすことのできてゐた連鎖が今や空しく切り棄てられたことは日本外交界の爲めにひどく惜しむのである。それも退耕後の餘生を支那で暮して活いて見たいと云ふならまだよし。多くは故國古里に引揚げて了つて折角の支那から絶縁状態になつて了ふとは残念である。自分の先輩の故拓川加藤恒忠翁の如き仙骨脱俗で而かもよく支那の風流韻事を解し、支那に外務の要職こそもたれなかつたけれどもしかしのどの病氣で死なれるまで屢々南北支那をよくも游歴してゐられたのである。そしてその間亦李盛鐸翁始め幾多の支那要路の人士とも去來してゐたことを知つてゐる。自分はこゝに支那の外交にはどこ迄も永

久に支那生え抜きの通人を現代式に子飼ひで仕立てなくてはならぬことを力説しておきたいのである。

支那の外交は支那人の民族性からも判断せらるゝ如くビジネスマンだけの力では本當の車は廻せない米國や歐洲のそれとはちがふ。公使館のビジネスマン式に朝の九時から晩の八時までぶつ通した人間味のないビジネスに没頭せる大官連を見ると涙を禁じ得ないのである。而かも尙宴會招待その事が又一種ビジネス化せられてゐると云ふ現状である。外交のことは心にゆとりと多少の暇を與へなくては無理である。北京の外交は外交に非ずしてビジネス也とも云ひ得る同情すべき現状を自分は目撃したのである。

されば支那の外交でより以上兩國の爲め好結果を收めんとするには、當局大官でゆとりのとれるもの又は現職に非ざる人物の渡支して巡遊悠々その間にビジネスマンの想到し及ばざるところ又所謂外交以外の外交を二重外交の争のないやうよく諒解の下に試むやうにする。このことは大層兩國の爲めによいことと思ふ。政務次官と事務次官の並び存する形に則れなどと云ふ意味ではない。かゝる形式階級の些事を云つてゐるのではない。大官自身の支那實情に就いて

深刻にして且つ又眞實なる理解のある人材を得んが爲めの獻策に外ならぬのである。若しそれ一般國民中に之が適材を見出し得るならばそれでも宜しからう。唯その適材の所見、見識、卓見が時に政府當局を動かし社會に重きをなし支那に對しても相當認められたる大人である可きは云ふを俟たぬ。必ずしも官僚又は官邊から引張つて來なくともよい、要するにかくの如き適材の游歴を得て、時局並に民衆の考察或は在支日本人の現狀に就いて十分の努力を惜しまないならば、現代の外交は一層時代の要求するものに合致するわけのものであると信するのである。

三十一 地方官憲民情の重大視

支那を一つの國と認めて會議を開く場合には「支那とは何ぞや」で先づ止めを刺しておくの必要があると同じく、北京の會議そのもの及びその提案の種類によつてはその全國的性質を帯びたるものは、之を地方の實際に照し合せてその實効の價值如何を豫めたしかめおくの必要はなきや。支那の次第に覺醒に近づき地位の向上を期し面子の尊重を痛切に思つて來てゐる矢先

きかゝる野暮くさい注意をすることは異様にとられるかも知れぬ。しかし乍ら民國の實情殊に地方々々の半獨立的狀態や民情の實際について親しく見ると列國側としては先づ豫備としてその邊の注意を拂ひ、その邊の事情を確めておくの必要がある。固より支那を信賴する以上はこれは不必要の事であり、又支那の國としての體面を頭から無視した事になるであらう。けれども支那自身にありても尾大掉はず、地方にては常に少なからぬ不安を感じつゝ中央としてやつてゐる文のことである。中央に威信がなく中央の威令が地方に行はれず、政府のにらみが遠くに利かなくなれば萬事それ切りである。事は甚だ容易の如くにして容易でない。元來支那はその國土が廣きに過ぎ暫くの間は政令の行届いてゐるやうに見えてはゐても何時云ふ事を聞かなくなるか判らぬ。地方の官憲地方の督軍地方の民心と云ふものゝ向背は全く逆睹しがたい。背いて了つたら中央では如何ともしがたい。事實何とも出來ない。例へば督軍から地方の鹽稅が押領されて了つたら外交團から八釜しく申し立てゝ見たところその地方の兵力で之を押收し中央に渡すものか。と傲語して來るときは手におへなくなるのである。

自分が民國十三年の秋、四川重慶に逗留してゐた時分のこと、督辦の劉存厚や省長の鄧錫侯

驍騎將軍それに系統はちがふが故袁祖銘などの諸星に會つてゐた。當時督辦などの口吻で時局はどう見られてゐたかと云ふに、

「中原は中原、四川は四川であるから盧永祥と齊燮元とどちらが勝たうと四川には何の關係もない又中央が誰れに歸しやうとそれもこゝに影響は來ない」

「デモ先づ中央に立つものをいつでも援助し之を立て、おくどすればよい譯だ」
などとあつさり呑氣に嘯いてゐたのであつた。そこですかさずこちらでは心のうちで。

「それでは御都合主義と云ふやうなものだ」

と云つて見やうと思つたがやめた。然かしこの考は獨り劉大人ばかりでなく、劉湘でも劉文輝でも奥の方に隅を負つてゐる猛虎先生たちは皆同じやうな考で居るものと見えた。全然別の世界にゐるのであるから中央政府のことなど何とも思つてゐないのも當然だ。北京の方でも亦問題にしてゐないであらう。第一その交通が陸で北の方長安の都から、秦嶺を越えて蜀の棧道に出るにしても大變であり、南の方水路宜昌から三峡の天險から進み大軍を動かすとしても容易でない。此の天險に據つてゐる英雄の四川省に擁してゐる寶庫は又たいしたものであらう

が、之も今の處何ともしやうがない。たゞ誰れ人でもその嘯くがまゝは嘯かせておくより仕方があるまい。又雲南にしても貴州にして似たものである。西南の三省五省は何としても別天地として例外扱ひにする外ないのである。更に東南福建あたりにしても、最近民國十四年に自分は二度計り立寄つて見た省長の薩鎮冰翁にもあひ談話を交へて見た。これも當時中央とは別になつてゐた。而かも當時中央からは如何ともすることが出来なかつた。閩江を廻り福州に這入る前馬尾山下に造船所も持つてゐるのを見た。吉雲、楚觀、海鵠と云つた兵船の艦舳相衝で碇をおろしてゐる所をも目撃した。そして海軍査驗所において閩江の關門を扼し見張つて居るのである。かう云つたまの當り實況を見て來て北京中央政府を顧みると自分には萬感交至るのである。中央の力では福建に齒が立たない。中央にして中央の力が此に及んでゐないからである。

また民國十四年夏以來、斬新な思想で風靡されてゐるかの廣東はいかゞであるかと云ふに廣東に對する中央の實權は怪しい。之が實力の及んでゐる程度は如何であるか。北京の大學教授に云はせると廣東の變化は之を當然の事となし別國扱ひをしてゐて之を少しも怪しまない状態

に在るではないか。廣東の實際の民情は三民主義の下にある故中央に對して自由な新しい態度を取り來たつてゐるではないか。これは周知の事實である。

その他支那各省地方の官權のうちにはその自ら持する薄くして大いに民意を尊重し、善政を布いてゐるものもあるが、又その苛斂誅求飽く處なく兵を擁して其の横暴振りを發揮してゐる者もある。土民は之に對し反感を招きながら如何ともすることが出來ず之をこぼしでもする時は、

「保境安民の爲めの税金だ何が苦しいか」

と來る。或は年に三度の節季まぎはに必ずその地方の商業會議所の巨頭に多大の強奪金を仰せつける。之に言葉が濁るときは、

「出さなければ我が部下の兵隊に給料が拂へないわけだぞ」

「自然兵隊の掠奪が始まり、すると城内の秩序は亂れて來るであらう。」

「そうなつては自分は責任が持てないからその積りで居ろ」

恐ろしい劍幕であるが中央に泣き付いて行くわけにもいかぬから止むなく何ぼかは、まどめ

て渡さなくてはならなくなる。面とむかつて會つて見れば優しい好々爺としか見えぬ官憲、督軍でもかう云つた策を行ふ。これは何處の地方でも支那當世の慣用手段になつてゐるのである。やらぬ丈損だと云つた氣分になつてゐるからたまらない。

中央政府に實力と手腕さへあれば之ににらみも利くわけであり、又かゝる横暴をさせておくこともあるまい。けれども普通の中央政府では地方は大抵これだ。人民の怨府となつてゐやうともお構ひはない。中央政府にして若し力があらば強く八釜しく出て民意を楯に惡魔を驅逐し取りかへる事も出來るであらう。力が足りなければ致しかたもない。自分はいつも支那の田舎各地方の厘金の課税とり立てかた又は軍人が横暴振りを發揮して品物に課税し船に通行税をウソと申し付けてゐる現場を目撃することが度々である。若しその四百噸位の船であるとか一關門毎に二百弗内外の課税が來るのである。先づコンブラドルと初め話が出来て、それから船長に來る。長江上流では一日の航行に三四の關門は通過するから容易なことでない。殊にそれが現金でなくては承知をしないのである。話に多少のゆとりはあるが其の減額は許されない。もし全然應諾のむづかしい顔でもしやうものならば、言下に云ふ。

「なぜそれで此の激流地方の航行ができるか」

と来る。米國船などはそれに耳も向けずに黙殺して突破せんとするから、岸上の屯營所からボン／＼發砲せられてゐるのである。鐵板を貼つてゐるし機關銃もそなへてゐるから「来るなら來い」と腰強くもやつてゐるやうであるが、實はたまらないであらう。

かやうに全く強食弱肉の修羅場が此の民國の地方には現に窺はれてゐる。かう云つた光景の場面は日本では固より北京の外交團邊りでも知られてゐるであらうか。又調べが付いてゐるであらうか。どうか。

支那の税金問題は古來支那では最も大きい問題である。民の怨を買ふのもこれである。官憲が鉅萬の投資を敢へてしてその地位を勝ち求めるのもこれである。收税に伴ふ役得を當てにせんと争ふのもこれである。とにかくたいしたもののである。良民こそよい迷惑であるが、このことが古來幾千年の間支那の社會を縦横に掻き亂してゐる。北京の會議で税金問題の討議せらるるはよし。列國の使臣を集め請じ、國際會議にこれを持出してゐるのも洵に意味のある事である。支那政府のする事であるからゆめ手落ちのあらう筈もあるまい。この協定案を眞甲に振り

翳しそして北京會議で列國と協議をした事であるからと大きく出れば或る程度までの實効は見られる見込もあらう。又列國も實効の見られるやうに牽制をしてやつて行くべきであらう。行はれなければ外交團からも又領事團からも抗議を持込むことにもなるであらう。しかし支那の地方の出來事は多くは問題にしたいとも取り合つてくれなければそれ迄である。受け禰してしまへば少しの張り合ひもない計りでなく問題にならずして葬むられた形になるのである。

既に支那の自主權を認め支那人の自尊心を毀けずとして常にその面子を重んじて行くことは、支那の將來を考へる吾人の最も賛成する所である。個人としての民國人に深き敬慕の念を以つて接觸してゐる自分の心では又國としての支那、民國に對しても多大の尊敬を拂ひたい。人が支那を侮蔑せる語を用ひるを聞きさへ不快の念の起こつて來る自分である。従つて支那に對して理解を持つことも人後に決して落ちぬつもりである。しかし支那の自主權や個人的の敬慕の念と云ふことから引離して、支那の地方事情とその實用に對しては大に意見を異にせざるを得ないのである。中央政府自身も歴代之には大に困つてゐることであらう。今更怒つても地段を踏んでも始まらぬ。地方は地方、中央は中央と云ふこと以上に多くは期待されない。情

けない話であるが致方のない事である。そこが支那現状の真相である。

しかし支那の人士は打明けて云ふとこれを日本人の考へる程に氣にしてゐない。諦らめてゐる。地方とはそのやうなものだと相場をきめてかゝつてゐる。日本の外交時報などでヤン／＼云つて見ても驚かぬことは又こちらでも判つてゐる。地方の事實がそれと判りつゝも尙且つ會議は會議としてやつて行く丈の度胸を有してゐる。成算のあるなしは別として列國使臣を請する丈の經綸があり態度がある。こは元來諦らめてゐるから出来ることである。地方の事を憂ひて憂ひずゐるから會議の續行も出來協定も出来る。こゝに支那中央當局の對內的、對外的兩方面に向かつての大きな手腕が認められる。

支那は他國で考へる如く津々浦々まで、中央の政令が行はれるなど云ふことは望まれない。こは、歴史に徴しても完全に統一されたらしい李唐の時代にしても、或は康熙、雍正、乾隆の頃にしても果してどうであらう。唐の安祿山の亂は云はずもがな、その宮廷なりその都の地方界限なり小範圍に於いて治まつてゐたとは認められるとしても、一般には颶風の吹く如く天下を風靡してゐたに過ぎぬであらう。元來支那の事だから四百餘州をたゞ風靡してさへるれば

よい。曲りなりにも衝突して來たり反旗を翻して牙城に攻めかけて來るものさへなければ天下泰平と稱し得る又それでよいとしなくてはなるまい。それも遠隔僻陬の地に少々波瀾のある位は中央官廷の榮華の夢には差したる響きを與へて來ない。中央ではたゞその政令の行はれるサークルの内だけを對象として泰平と稱してゐればよい。「支那とは何ぞや」など理屈攻めに來られても、かゝる明白な事は始めから問題にしてゐないと大人らしくしてポヤツとした態度である事。こゝが支那としては最も大事な所である。支那の支那らしい處、支那國民性の發露はこゝである。列國にしてもそこが氣になつて心配な位なら始めから支那を相手に協議などせぬがよいと云つたところに腹をきめてゐる。そこに立脚地を置いて列國を操つり時局の切迫や、南方からの妨害、巨頭の出現があつたに拘らず之が遂行を期せんとしてゐる。そこに深い味があると思ふてはなるまい。

以上述べる如き處に支那はその腹をきめてゐるとすれば支那は支那としてそれでよろしからう。しかしながら列國はそれでよろしきかどうか。支那は大きくて廣い。矢張り長いものに列國は卷かれる式で行くか。騒いで見たつて地方は地方である。自主權を認め支那の内政干涉は